

埼玉古墳群発掘調査報告書 第六集

丸墓山古墳
埼玉1(7)号墳
將軍山古墳

埼玉県教育委員会

序

史跡埼玉古墳群は、埼玉県名発祥の地と称される行田市埼玉にあります。ここには、旧状を良く残す九基の大形古墳が集中しており、古墳時代後期の全国有数の古墳群と考えられております。

埼玉県では、この地域を「さきたま風土記の丘」として環境整備を進め、埼玉古墳群の保存と活用をはかってまいりました。また、古墳の規模等について、その実態を把握するための発掘調査を実施し、その成果を公表するとともに、古墳群整備の基礎資料としてまいりました。

本書は、埼玉古墳群の丸墓山古墳とその南側に新たに発見された円墳群、さらに將軍山古墳に関する数度の発掘調査の報告書であります。

この発掘調査によって、丸墓山古墳については、埴輪や墳丘表面を覆っていたと考えられる礫の一部を検出するとともに墳丘の形態・規模についての資料も得ることができました。円墳群については、いままでも大形古墳だけが集中していたと考えられてきた埼玉古墳群内の地域に、小形の円墳が併行して築造されていたことがわかりました。また、將軍山古墳については、他の大形古墳と同様に、二重の堀が巡る可能性をもつことなど多くの重要な新成果が得られました。

本書は、これらの成果をまとめ、公表するものであります。本書が、埼玉古墳群の保護並びに教育・学術資料として、広く御活用いただければ幸いに存じます。終わりに、発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導・御協力をいただきました文化庁をはじめとする関係各機関並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。

昭和六十三年三月

埼玉県教育委員会教育長

荒井修 二

目次

序	
例言	
調査の組織	
I 丸墓山古墳の調査	1
一 調査に至る経過	1
二 調査の経過	2
(一) 第一次調査	2
(二) 第二次調査	2
三 古墳の立地と概観	3
四 調査の成果	6
(一) 遺構	6
(二) 遺物	9
五 まとめ	11
出土遺物観察表	32
II 埼玉1~7号墳の調査	37
一 調査に至る経過	37
二 調査の経過	37
三 丸墓山南方円墳群の概要	39
四 調査の成果	43
(一) 天王山古墳(埼玉一号墳)	43
(二) 梅塚古墳(埼玉二号墳)	43
(三) 埼玉三号墳	44
(四) 埼玉四号墳	44
(五) 埼玉五号墳	44
(六) 埼玉六号墳	45
(七) 埼玉七号墳	45
五 まとめ	46
出土遺物観察表	71
III 將軍山古墳の調査	79
一 將軍山古墳と昭和五九年度の調査の契機及び調査の経過	79
二 調査の経過	79
三 調査の成果	80
(一) 遺構	80
(二) 遺物	80
四 まとめ	81
出土遺物観察表	84

挿図目次

第1図	丸墓山古墳測量図	4	第20図	丸墓山古墳第4トレンチ出土遺物	29
第2図	丸墓山古墳の位置とその周辺の遺跡	5	第21図	丸墓山古墳第4トレンチ(75~80)、第5トレンチ(81~83)出土遺物	30
第3図	「忍名所図會」中の丸墓山古墳	10	第22図	伝丸墓山古墳墳丘出土遺物	31
第4図	丸墓山古墳トレンチ配置図	12	第23図	丸墓山古墳周辺の円墳分布状況	41
第5図	丸墓山古墳第12、14トレンチ土層断面図	13	第24図	丸墓山南方円墳群分布図	42
第6図	丸墓山古墳第14、15トレンチ土層断面図	14	第25図	天王山古墳(埼玉1号墳)平面図	47
第7図	丸墓山古墳第13トレンチ土層断面図	15	第26図	天王山古墳第1~4トレンチ土層断面図	48
第8図	丸墓山古墳第16、18、25トレンチ土層断面図	16	第27図	天王山古墳第5~10トレンチ土層断面図	49
第9図	丸墓山古墳第1トレンチ平面図及び土層断面図	17	第28図	梅塚古墳(埼玉2号墳)平面図及び断面図	50
第10図	丸墓山古墳第1トレンチ基石、埴輪出土状況	18	第29図	梅塚古墳土層断面図	51
第11図	丸墓山古墳第3トレンチ平面図及び土層断面図	19	第30図	埼玉3号墳及び4号墳平面図	52
第12図	丸墓山古墳第3トレンチ平面図及び土層断面図	21、22	第31図	埼玉3、4、5号墳土層断面図	53
第13図	丸墓山古墳第5トレンチ平面図及び土層断面図	20	第32図	埼玉5号墳平面図及び土層断面図	54
第14図	丸墓山古墳第18トレンチ出土遺物	23	第33図	埼玉6号墳平面図及び土層断面図	55
第15図	丸墓山古墳第13、18トレンチ出土遺物	24	第34図	埼玉7号墳平面図及び土層断面図	56
第16図	丸墓山古墳第1トレンチ出土遺物	25	第35図	天王山古墳(埼玉1号墳)出土遺物	57
第17図	丸墓山古墳第1トレンチ出土遺物	26	第36図	"	58
第18図	丸墓山古墳第2トレンチ出土遺物	27	第37図	梅塚古墳(埼玉2号墳)出土遺物	58
第19図	丸墓山古墳第2トレンチ(43~50)、第3トレンチ(51~54)、第4トレンチ(55~61)出土遺物	28	第38図	"	59
			第39図	"	60
			第40図	"	61
			第41図	"	62

第42図	埼玉3号墳出土遺物	63
第43図	埼玉4号墳出土遺物	63
第44図	埼玉5号墳出土遺物	64
第45図	“	65
第46図	“	66
第47図	“	67
第48図	“	68
第49図	埼玉6号墳出土遺物	69
第50図	“	70
第51図	埼玉7号墳出土遺物	70
第52図	将軍山古墳昭和59年度調査区平面図及び土層断面図	82
第53図	将軍山古墳出土遺物	83

図 版 目 次

図版1	丸墓山古墳近景、第18、第16トレンチ等近景
図版2	第1、第2トレンチ遺物出土状況
図版3	第1トレンチ土層断面
図版4	第3、第5トレンチ遺物出土状況
図版5	第18、第13、第1トレンチ出土遺物

図版6	第1、第2、第4トレンチ出土遺物	83
図版7	第4、第5、第1トレンチ出土遺物	82
図版8	丸墓山南方円墳群遠景、天王山古墳近景、土層断面	70
図版9	梅塚古墳遠景、同周堀	70
図版10	梅塚古墳東南側ブリッジ、円筒、人物埴輪出土状況	69
図版11	梅塚古墳土師器、須恵器出土状況	68
図版12	埼玉4号墳周堀土層断面、遺物出土状況	67
図版13	埼玉5号墳周堀、土層断面	66
図版14	埼玉5号墳遺物出土状況	65
図版15	埼玉6号墳周堀遺物出土状況	64
図版16	埼玉7号墳周堀遺物出土状況	63
図版17	天王山古墳、梅塚古墳出土遺物	62
図版18	梅塚古墳出土遺物	61
図版19	“	60
図版20	“	59
図版21	“	58
図版22	梅塚古墳、埼玉3号墳出土遺物	57
図版23	埼玉4号墳出土遺物	56
図版24	埼玉5号墳出土遺物	55
図版25	“	54
図版26	“	53
図版27	埼玉6号墳、7号墳出土遺物	52
図版28	将軍山古墳昭和59年度調査区近景、外堀出土遺物	51

例 言

一 本書は、埼玉県行田市埼玉二七ほかに所在する埼玉古墳群丸墓山古墳周堀、及びその南方に所在する埼玉1〜7号墳、並びに將軍山古墳外堀（行田市埼玉一二一ほか）に関する発掘調査報告書である。

二 丸墓山南方円墳群中の梅塚古墳は鷹梅塚の呼称もあるが同一の古墳である。

三 調査は埼玉県教育委員会が主体となり、県立さきたま資料館が実施した。発掘調査の実施期間は左記のとおりであり、整理、報告は昭和六二年度の実施である。

丸墓山古墳 第一次、昭和四八年度（昭和四八年一月二四日〜昭和四九年二月九日 担当者 栗原文蔵、田部井功）

第二次、昭和六〇年度（昭和六〇年一〇月一六日〜一二月六日 担当者 小久保徹、杉崎茂樹、若松良一、田中正夫）

埼玉1〜7号墳 昭和四九年度（昭和四九年一月一日〜昭和五〇年一月一八日 担当者 栗原文蔵、田部井功）

將軍山古墳 昭和五九年度（昭和五九年六月一日〜六月二三日、担当者 小久保徹、中島宏、杉崎茂樹）

四 昭和五九年度以降の事業については文化庁国庫補助事業として実施した。各事業の組織は別表のとおりである。

六 出土品の整理及び本書の作成は県立さきたま資料館が行い、主に杉崎茂樹が当り、小久保徹、若松良一、田中正夫の協力を得た。

また、全体について中島利治が加除筆を行い、金井塚良一が監修した。写真撮影は、各遺構については各調査担当者が、また、遺物については杉崎茂樹が行った。

八 発掘調査から整理報告に至るまで左記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜った。

市毛 勲	岩崎 卓也	大塚 初重	金子 正之
亀井 正道	車崎 正彦	斉藤 国夫	田中 一郎
塚田 良道	中島 洋一	橋本 博文	増田 逸朗
文化庁			
行田市教育委員会			

調査の組織

丸墓山古墳の調査

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 中谷幸次郎(昭和四八年度)

同 荒井修二(昭和六〇年度)

教育次長 伊古田界二(昭和四八年度)

同 酒寄武陽(昭和六〇年度)

同 佐藤一司(昭和六〇年度)

同 五十嵐孝仁(昭和六〇年度)

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護室

室長 青木廣作(昭和四八年度)

兼室長補佐 柳田敏司(昭和四八年度)

庶務係長 町田勝義(昭和四八年度)

庶務係 持田まり子(昭和四八年度)

同 太田和夫(昭和四八年度)

同 桂正澄(昭和四八年度)

文化財第二係長 吉川國男(昭和四八年度)

文化財係 塩野博(昭和四八年度)

同 宮崎朝雄(昭和四八年度)

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課長 岩田明(昭和六〇年度)

課長補佐 高野貞夫(昭和六〇年度)

同 早川智明(昭和六〇年度)

庶務係長 持田紀男(昭和六〇年度)

庶務係 亀田孝(昭和六〇年度)

埋蔵文化財係長 梅沢太久夫(昭和六〇年度)

文化財係 水村孝行(昭和六〇年度)

同 鈴木秀雄(昭和六〇年度)

事務局(発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

館長 山口英和(昭和四八年度)

参事 金井塚良一(昭和六〇年度)

兼館長 野口光雄(昭和四八年度)

兼庶務係長 横川好富(昭和六〇年度)

副館長 風間俊克(昭和六〇年度)

庶務課長 横山正三(昭和四八年度)

庶務係 島村昌子(昭和四八年度)

同 川崎栄一(昭和六〇年度)

同 木村なを子(昭和六〇年度)

同 鈴木廣子(昭和六〇年度)

同 栗原文蔵(昭和四八年度)

学芸課長 小久保徹(昭和六〇年度)

学芸員 大館勝治(昭和四八年度)

同 小林重義(昭和四八年度)

同 田部井功(昭和四八年度)

同 杉崎茂樹(昭和六〇年度)

同 岡本一雄(昭和六〇年度)

同 若松良一(昭和六〇年度)

同 田中正夫(昭和六〇年度)

嘱託 金子芳一(昭和六〇年度)

埼玉1-17号墳の調査(昭和四九年度)

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 中谷幸次郎

同 豊田重穂

教育次長 石田正利

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課長 柳田敏司

課長補佐 野村鍋一

文化財第二係 吉川國男

同 柿沼幹夫

庶務係 持田まり子

同 桂正澄

事務局(発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

館長 山口英和

副館長 野口光雄

兼庶務課長 横山正三

同 庶務係 島村昌子

同 川崎栄一
 学芸課長 栗原文藏
 学芸員 大館勝治
 同 田部井功
 同 大友務

將軍山古墳の調査(昭和五九年度)

主体者 埼玉県教育委員会
 教育長 長井五郎
 教育次長 沼尻和也
 同 岩上進
 同 荒井修二

事務局(企画・調整)埼玉県教育局文化財保護課

課長 金井塚良一
 課長補佐 町田勝義
 兼庶務係長
 課長補佐 早川智明
 庶務係 亀田孝
 同 柚木博
 埋蔵文化財係長 梅沢太久夫
 文化財係 宮崎朝雄
 同 鈴木秀雄
 事務局(発掘調査)埼玉県立さきたま資料館
 館長 坂巻正一

副館長 横川好富
 庶務課長 風間俊克
 庶務係 鈴木廣子
 同 川崎栄一
 学芸課長 小久保徹
 学芸員 中島宏
 同 杉崎茂樹
 同 岡本一雄
 嘱託 大熊遠夫

整理報告(昭和六二年度、各古墳とも)

主体者 埼玉県教育委員会
 教育長 荒井修二
 指導部長 五十嵐孝仁
 指導次長 橋本昭
 事務局(企画・調整)埼玉県教育局文化財保護課
 課長 百瀬陽二
 課長補佐 横川好富
 同 森田嘉一
 庶務係長 保永清光
 庶務係 井田秀夫
 埋蔵文化財係長 梅沢太久夫
 文化財係 井上肇

同 書上元博
 事務局(整理報告)埼玉県立さきたま資料館
 指導部参事 兼館長 金井塚良一
 副館長 中島利治
 庶務課長 鈴木二三男
 庶務係 木村なを子
 同 田中由夫
 同 川崎栄一
 学芸課長 小久保徹
 学芸員 柳正博
 同 杉崎茂樹
 同 若松良一
 同 田中正夫
 嘱託 金子芳一
 臨時職員 太田博之
 萩野敏子
 加藤春江
 河辺美津江
 小山康彦
 鈴木須美江
 浜中紀子

I 丸墓山古墳の調査

一 調査に至る経過

埼玉古墳群は、北武蔵最大の墳丘規模を持つ二子山古墳(全長一三五〇)や国宝金錯銘鉄剣を出土した稻荷山古墳(全長一二〇〇)など一〇〇を越える規模の前方後円墳四基と、全長が八〇に満たない中小の前方後円墳四基、それに本書で取扱う、直径一〇五のわが国最大の円墳、丸墓山古墳を中核に、小規模な円墳とで構成されている。

古墳の築造時期は、いずれも古墳時代後期と考えられ、当該期の大形前方後円墳が集中して築かれている点で、全国有数の古墳群といえる。このため昭和一三年八月八日付けの文部省告示により、国指定の史跡となっている。

埼玉県は同古墳群を「さきたま風土記の丘」として史跡公園化し、整備する計画を立て、昭和四二年度から国庫補助を得て開始した。そして、これに伴い、各古墳の規模等の資料を得るための発掘調査が同年以降実施されている。

丸墓山古墳については、これまで四度の調査が実施されている。

第一次は、昭和四八年度の実施で、同年の一月七日から翌四九年二月二四日まで、稻荷山古墳の周堀復原の確認調査と同時に実施された。この調査は、昭和四三年に埼玉古墳群を撮影した航空写真に写し出された、墳丘南西側の前方部の痕跡らしい部分と稻荷山古墳周堀との切り合い関係の確認を主に眼に実施された周堀復原の資料を得るためのトレンチ調査である。

第二次調査は、昭和六〇年度の実施で、調査期間は同年一〇月一六日から、

埼玉県教育委員会による古墳群調査一覧

年度	古墳名(調査箇所)	報告書等
42	二子山、鉄砲山、奥の山古墳(周堀トレンチ調査)	『二子山古墳』(県教育委員会 昭和62年3月) 奥の山古墳は未報告
43	稻荷山古墳(主体部)	『埼玉稻荷山古墳』(県教育委員会 昭和55年11月)
48	稻荷山、丸墓山古墳(周堀トレンチ調査)	丸墓山古墳は今回報告
49	柳屋、天王山等小円墳群及び二子山古墳(中堤通り出し部)	今回報告
54	瓦塚古墳(前方部南側周堀)	『瓦塚古墳』(県教育委員会 昭和61年3月)
54	鉄砲山古墳(前方部西側周堀)	『鉄砲山古墳』(" 昭和60年3月)
55	二子山古墳(後門部北方外堀)	『二子山古墳』(" 昭和62年3月)
56	愛宕山古墳(後門部東側及び前方部南側周堀)	『愛宕山古墳』(" 昭和60年3月)
57	瓦塚古墳(墳丘西側周堀)	『瓦塚古墳』(" 昭和61年3月)
58	鉄砲山古墳(後門部東側周堀)	『鉄砲山古墳』(" 昭和60年3月)
59	将軍山古墳(前方部西方外堀)	今回報告
59	二子山古墳(前方部南方外堀)	『二子山古墳』(県教育委員会 昭和62年3月)
60	丸墓山古墳(北、南側周堀)	今回報告
61	瓦塚古墳(東側周堀)	『館報 No. 18』(県立さきたま資料館 昭和62年8月)
61	丸墓山古墳(墳丘南崩壊部分)	"
62	中の山古墳(北東周堀部分)	昭和63年度報告予定
62	丸墓山古墳(墳丘南崩壊部分)	"

一二月一日までで、周堀の墳丘側立上り部分を、墳丘の北側と南側で明らかにすることを目的に実施したトレンチによる調査であった。

第三次、四次は、昭和六一、六二年度の墳丘南斜面の崩壊防止のための盛土修理工事に先立ち実施された、墳丘盛土の遺存状況を確認する調査である。(調査結果は保存修理報告に掲載予定なので、本書では取扱わない。)

二 調査の経過

(一) 第一次調査 (昭和四八年度)

昭和四八年一月二四日～二月五日

稲荷山古墳前方部西方外堀確認用第13トレンチを丸墓山方向に延長、幅二
ミ、長さ六八・五ミとした。この第13トレンチの東の起点から三一・五ミ付
近で丸墓山古墳周堀の落込みを検出、埴輪片の出土あり。

一月一日～二〇日

稲荷山古墳外堀の西コーナート丸墓山古墳周堀との切合関係確認のため、
東西一五ミ、南北二〇ミの第18トレンチを設定、表土除去。

一月二一日～二五日

第18トレンチで丸墓山古墳周堀の落込みを確認し、平板実測。(稲荷山古
墳の外堀は明瞭に検出されず。)

昭和四九年一月八日～一二日

墳丘南西の、前方部らしき痕跡が航空写真に認められた地区に、第15、16、
17トレンチを設定。第16トレンチはバックホウを利用、基盤のローム検出。

一月一三日～一六日

石田堤東側に第11トレンチを設定、第15トレンチと共にバックホウで発掘。

一月一七日～一八日

墳丘北側に第12トレンチを設定し、バックホウを利用して発掘する。

墳丘南西の各トレンチの平面図、土層断面図作成。結局、前方部の痕跡は
確認できず、また、周堀の範囲も明確にできなかった。

一月一九日～二月三日

第18トレンチの周堀覆土を掘り下げる。第15、16トレンチ土層断面図作成。
二月九日

各トレンチを埋戻す。

(二) 第二次調査 (昭和六〇年度)

昭和六〇年一月一六日～二一日

古墳北側に第1、2トレンチを設定、バックホウにて客土、耕作土を除去。
一月二二日～二四日

第1、2トレンチで周堀覆土を確認、第1トレンチでは西壁にサブトレン
チを設定し掘り下げる。両トレンチ、墳丘寄りで河原石の出土多し。

一月二五日～二九日

第1トレンチの埴輪部分を拡張、ローム面を削平、整形したと考えられる
テラスを検出。周堀覆土から埴輪片と多数の河原石が出土。土層断面図作成。

一月三一日～一月一日

第1、2トレンチ、埴輪、河原石出土状況写真撮影。墳丘南側に第3、5
トレンチ設定、バックホウを利用し表土除去、周堀落込みを確認。

一月二二日～二〇日

第3、5トレンチ掘り下げる。埴輪片、河原石が出土するが、第1、2ト
レンチより少ない。第1、2トレンチ内出土埴輪片、河原石等実測。

一月二一日～二六日

第1トレンチ、一部堀底まで掘り下げ。第2トレンチは河原石検出面まで
の発掘にとどめる。第5トレンチは昭和四八年度の第11トレンチが重複する。

一月二七日～二月六日

各トレンチ実測を済ませ気球による写真撮影を終えた後、砂を撤き埋戻す。

三 古墳の立地と概観

行田市周辺には、秩父山地に源を発する荒川と、群馬県との境を流れる利根川の氾濫原が広がっており、関東造盆地運動と呼ばれる地盤沈降現象のある地域でもあるとされている。

一方、大宮市を中心とするローム台地の北尾立台地は、行田市付近にも伸びている。しかし、こうした河川の氾濫や地盤沈降のためか、鴻巣市付近から北では、周囲の沖積地との比高差は一歩前後しかなくなり、水田下に埋没する部分も多い。

丸墓山古墳を含む埼玉古墳群は、こうしたローム低台地上に所在するが、その標高は約一八メートルで、あたかも自然堤防のような微高地となっている。

埼玉古墳群は、稲荷山古墳や二子山古墳などの八基の前方後円墳と、大円墳の丸墓山古墳などが現存するが、ほかに煙滅した前方後円墳や小規模な円墳が数基知られており、いずれも古墳時代後期、六世紀初頭頃から七世紀前半代にかけて築造されたものと考えられている。

丸墓山古墳は、群中の大形古墳のうちでは、その東方の稲荷山古墳と共に最も北に位置しており、ローム低台地の縁辺の立地である。

その形態は、一時前方後円墳ではないかと考えられたこともあったが、調査の結果から円墳とみて誤りなからう。帆立貝式古墳のうち、円墳に帰属すると考えられる奈良県乙女山古墳などの例を除けば、日本最大の円墳である。規模については、周堀の立ち上り上端での計測で約一〇五メートルと推定され、

高さは、同じくこの周堀上端面からの計測では一八・二メートル（旧表土上面からは一七・四メートル）である。墳丘東南には、標高二三・二メートル及び三三・三四メートル付近にやや傾斜が緩やかになる部分があり、三段築成の可能性がある。埋葬施設については現在まで未調査であり、不明で、具体的な言い伝えもない。

周堀は一重で、東側では約三七メートル、稲荷山古墳の周堀とは切り合っていない。西方の調査は実施されたがその範囲は明確でなく、北側は旧忍川により失われているらしい。墳丘には全体でないが、基石があるのは誤りない。また、埴輪を伴ってその特徴から、古墳の築造時期は六世紀前半代と考えられる。

丸墓山古墳の大きさなどについて具体的に記載する文献のうち最も古いものは、文政六年（一八二三年）の成立といわれる『新編武蔵風土記稿』である。その「埼玉郡埼玉村」の天台宗の寺院である西行寺の項目に丸墓山古墳について「客殿ノ北ニアリ繞リ三百間（五四六メートル）高サハ三文（九・一メートル）ニ余レル古塚ニシテ壽木生ヒ茂レリ……中略……モシクハコノ塚上代國守ノ墳墓ナトニテアリシモ知ヘカラス……中略……天正一八年（一五九〇年）ノ戰爭ニハ石田治部少輔コノ塚上ヨリ（忍）城内ヲ望ミ地理ヲ察シテ水責ヲナセシナト傳ヘリサモアリシニヤ塚上ニ大日堂ヲ安ス」とある。これによると本墳がすでに「丸墓山古墳」と呼ばれていたこと、そして、西行寺と呼ばれる寺の位置は墳丘の南にあったことがわかる。現墳丘の南斜面に崩壊が認められるのは、この西行寺の建物があつたためとも考えられる。また、周囲の長さや、高さについては、実際とかけ離れるが、上代の国守の墓と認識されていたことや、石田三成の忍城水責めの陣が墳頂に敷かれ、大日堂があつたこともわかる。ちなみに、古墳の南北に遺存する土堤状の遺構は石田三成が

水責めの際に築いたといわれ、「石田堤」と呼ばれている。

次に、時代は降るが、郷土史家清水雪翁による明治四〇年刊行の『北武八志』³⁾「墳墓志」には、「……(前略)……圓丘にして周廻三百間高さ五丈位……(中略)……村中古墳頗り多く然れ共一も誰人の墳也と云ふことを傳へず獨り此の墳のみ口碑に蘇我調子麿の墓なりと云ふ……(後略)……」とある。古墳の規模と共に、聖徳太子の舎人であった蘇我調子麿の墓であるとの言い伝えを紹介するが、確固たる根拠はない。

丸墓山古墳の最初の学術調査は、昭和一〇年、柴田常恵氏らにより、なされた。これは、いわば埼玉古墳群の分布調査で、調査表には、丸墓山古墳は高さ一六尺、横径九六尺強、長径一〇〇尺と記載されている。また、昭和一二、後藤守一、三木文雄氏により初めて測量図⁴⁾が作成され、古墳の形状が具体的に知られるようになった。

その後は、さきたま風土記の丘の整備事業に伴ない、昭和四四年一月に航空測量図が作成され、昭和四八年度の範囲確認調査に基づき、周堀が部分的に復原された。そして、昭和六〇年度には、周堀の墳丘側の立ち上り部分を重点に確認調査がされており、同年度から墳頂部と墳丘南崩壊斜面の保存修理が実施されている。

丸墓山古墳の立地と概観は以上のとおりである。周廻の遺跡の分布については、これまでに刊行されている『武蔵埼玉稲荷山古墳』(県教育委員会、昭和五五年一月)や、『瓦塚古墳』(県教育委員会、昭和六〇年三月)などを参照されたい。

(註)

1 昭和四四年一月に撮影した、航空測量図作成用の航空写真に、前方部の痕跡らしき

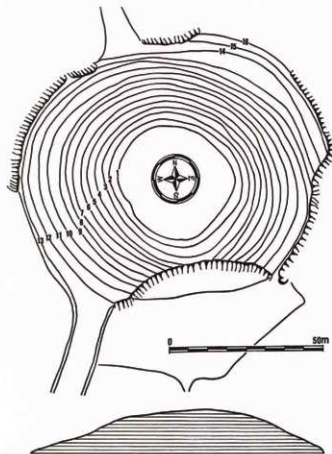
部分が写っていたためである。

2 以下に引用するのは、歴史図書社『新編武蔵風土記稿七』(昭和四四年二月)によった。

3 以下、引用は、歴史図書社『北武八志』(昭和五四年一〇月)によった。

4 丸墓山古墳の名称について、こうしと言い伝えから「墓墓」と呼ばれ、訛って「丸墓」となった可能性を記しているが、丸い形状からその名前が付いたとする説もある。いづれにせよ、『風土記稿』でも「丸墓山」であり、このほか、天保年間の成立という「忍名所図會」にも「丸墓山」として記述があり、(その南にあったという西行寺については、同書にかなり詳しい。「忍名所図會」同編纂委員会、昭和六一年九月)江戸時代には「丸墓山」という呼称が定着していたのであろう。

5 国史跡指定申請書に添付されたもので、本書掲載の図は左の文献から転載した。
『古墳調査報告書第六編』埼玉県教育委員会、昭和三八年三月



第1図 丸墓山古墳測量図(昭和12年、後藤守一、三木文雄氏による)



- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|----|----|---|---|---|---|----|----|---|---|---|---|---|---|---|--|
| 1 | 埴 | 王 | 古 | 墳 | 群 | 11 | 得 | 軍 | 山 | 古 | 墳 | 21 | 毘 | 沙 | 門 | 山 | 墳 | 31 | 長 | 神 | 明 | 遺 | 跡 | | | | |
| 2 | 若 | 小 | 玉 | 古 | 墳 | 12 | 八 | 幡 | 山 | 古 | 墳 | 22 | 名 | 板 | 高 | 山 | 古 | 墳 | 32 | 長 | 野 | 神 | 明 | 遺 | 跡 | | |
| 3 | 若 | 小 | 玉 | 古 | 墳 | 13 | 愛 | 岩 | 山 | 古 | 墳 | 23 | 真 | 針 | 日 | 塚 | 古 | 墳 | 33 | 星 | 宮 | 血 | 尾 | 遺 | 跡 | | |
| 4 | 小 | 芥 | 古 | 墳 | 群 | 14 | 荒 | 神 | 山 | 古 | 墳 | 24 | 大 | 袋 | 塚 | 古 | 墳 | 34 | 池 | 守 | 中 | 里 | 地 | 區 | 遺 | 跡 | |
| 5 | 酒 | 見 | 古 | 墳 | 群 | 15 | 地 | 藏 | 塚 | 古 | 墳 | 25 | 小 | 袋 | 塚 | 古 | 墳 | | | | | | | | | | |
| 6 | 酒 | 卷 | 古 | 墳 | 群 | 16 | 小 | 見 | 真 | 寺 | 古 | 墳 | 26 | 小 | 袋 | 塚 | 古 | 墳 | | | | | | | | | |
| 7 | 新 | 羽 | 古 | 墳 | 群 | 17 | と | 虚 | 藏 | 山 | 古 | 墳 | 27 | 小 | 袋 | 塚 | 古 | 墳 | | | | | | | | | |
| 8 | 羽 | 新 | 古 | 墳 | 群 | 18 | と | 虚 | 藏 | 山 | 古 | 墳 | 28 | 小 | 袋 | 塚 | 古 | 墳 | | | | | | | | | |
| 9 | 佐 | 間 | 古 | 墳 | 群 | 19 | 酒 | 卷 | 1 | 号 | 墳 | 29 | 池 | 良 | 内 | 遺 | 跡 | | | | | | | | | | |
| 10 | 丸 | 墓 | 山 | 古 | 墳 | 20 | 酒 | 卷 | 1 | 号 | 墳 | 30 | 池 | 良 | 内 | 遺 | 跡 | | | | | | | | | | |

第2図 丸墓山古墳の位置とその周辺の遺跡

四 調査の成果

(一) 遺 構

昭和四八年度

昭和四八年度は、昭和四三年度に撮影した航空写真に写し出された、前方部らしい痕跡の確認および周堀の範囲、規模を確認するためのトレンチによる調査である。

設定したトレンチは、北側の第12トレンチ、稲荷山古墳外堀との切合いを確認のための東側の第13、18トレンチ、前方部らしい痕跡の確認のための、第14、17、25トレンチ、合計八本である。(トレンチの呼称は、同時に実施した稲荷山古墳の周堀調査用トレンチと連番になっている。)

第12トレンチ (第5図)

墳丘北側の周堀範囲確認用のトレンチで、全長三六メートルの部分と、その外方の六・六メートルの部分から成る。地表から約二メートルほど掘り下げたが、厚く客土されている部分が多い。その下に灰褐色の水田耕作土があり、さらに暗褐色土や黒褐色土が続いているが、明確なローム土は検出されていない。昭和六〇年度第1トレンチ内では、明確なローム層が墳丘寄りで検出され、旧表土面から約二メートル下方(耕作土面下八〇センチ)は淡灰黄色粘土となっているので、あるいは、この第12トレンチの第4層、第5層の下方に同様のローム(粘土)層が存在するものと思われる。

第13トレンチ (第7図)

第18トレンチと共に、稲荷山古墳の周堀との切合関係を確認するために設

定したものである。両トレンチの状況は、すでに『埼玉稲荷山古墳』(埼玉県教育委員会、昭和五年一月)で触れているが、以下に改めて記述する。本トレンチ内では、土層断面図に示したとおり、南壁の東の起点から三一・九メートルで周堀の上堀部分を検出した。稲荷山古墳外堀とは約七・七メートルの距離がある。耕作土(第1層)下に周堀覆土の黒褐色土(第2層)、暗褐色土(第2層)があるが、第4層の暗褐色土以下は湧水のため堀底はボーリングにより確認した。

これによると、周堀底までは、耕作土上面から約一・二メートル・六メートルあり、おおむね平坦と推定される。この付近での稲荷山古墳の外堀は、耕作土から約六五センチなので、これよりはるかに深い。

第18トレンチ (第8図)

稲荷山古墳外堀との重複関係を確認するためのトレンチである。東西約一五メートル、南北約二〇メートルの方形のトレンチ(グリッド)である。

中程よりやや西で周堀の落ち込みが検出され、覆土は、耕作土の下に暗褐色土が三層に堆積している。耕作土(地表)面から堀底までは約一・五メートルで、堀底はほぼ平坦である。

なお、本トレンチ内では稲荷山古墳外堀の外方立ち上りは検出されておらず周堀が浅いか掘削されていない可能性もある。

第14トレンチ (第6図)

墳丘の南南東に設定したトレンチで、外方の四〇・二メートル(A-A)墳丘寄りの一六・五メートル(B-B)部分とから成る。A-A部分では、灰褐色の耕作土の下方に黒色土(第3、4、5層)があり、ロームの存在が確認された。このロームは、Aから約六・五メートルから墳丘方向に向かい急激に低くなり、周堀

外方の立ち上り部分である可能性がある。

B—B'部分でも土層の堆積状況はほぼ同じだが、周堀底の確認には至っていない。

第15トレンチ(第6図)

第16、17、25トレンチと共に、前方部の有無を確認するために設定されたトレンチである。

しかし、航空写真に写し出された前方部らしき遺構は、トレンチ南端に近い位置にある。耕作土から掘り込まれた擾乱(ごく新しい時期の濫状の遺構)と判明した。

土層は、灰褐色の耕作土下に茶褐色土、暗褐色土、黒色土が堆積しており、一部にロームが確認された。このロームは、トレンチ南端(A)から約一八〇付近で途切れるが、その北には暗褐色である第6層が、ほぼ同一レベルで存在しており、これもロームとすれば、この部分を周堀の外方立ち上りと判断し切れない。

第16トレンチ(第8図)

「T」字に東西、南北に設定したトレンチである。耕作土下に暗褐色、黒色土が堆積しており、第15トレンチから連続する、耕作土から掘り込まれる擾乱が存在する。

第25トレンチ(第8図)

第15トレンチ東方に、東西約三九〇の長さに設定したトレンチである。

耕作土下に暗褐色土、黒色土、暗褐色土が堆積しており、耕作土と暗褐色土間に黄褐色土が堆積する箇所がある。

昭和六〇年度

昭和六〇年度の調査は周堀内側立ち上り部分を確認する目的で、墳丘北側に二基(第1、2トレンチ)、南側に三基(第3、5トレンチ)のトレンチを設定して実施した。

第1トレンチ(第9、10図)

南北約二七・五、幅約三、墳堀に近い周堀立ち上り部分を東に五、幅五で拡張した。トレンチ付近は、公園化の際に八〇〜一四〇の客土が行われており、この下に水田耕作土が三〇〜四〇の厚さで存在している。現在土面からこの耕作土は重機を利用して排除、それ以下の部分は人力で掘り下げた。

周堀はちょうどその立ち上り部分まで、水田として利用されており、この耕作土中には天明年間の浅間山の噴火によると考えられる軽石粒(浅間A降下軽石、以下「浅間A軽石」と略)が含まれる(第3、4層)。以下覆土は暗灰色土(第5層)、明灰色土(第7層)が堆積しており、いずれも粘質土層である。立ち上り部分にはさらに暗灰褐色土(第10層)が堆積している。第7、10層が最大層で周堀底となるが、周堀底付近の同層には、葦などの禾本科植物の根と思われる植物遺存体が含まれている。

墳丘寄りの周堀覆土中からは、多数の河原石及び埴輪片が出土した。この河原石は小は拳大、大は人頭大で第10層が10〜15の堆積して周堀がやや埋没した後落下し始め、その上の第8、9層が堆積して周堀が約半分埋没するまで転落が続いている。これは、周堀上方のテラス縁部に貼られていた葦石と考えられるものである。埴輪片については、多くが第9層中からで、比較的上方の葦石とはほぼ同一のレベルの出土なので、そうした葦石と近接して樹

立されていたものが破損して転落したものと判断される。

周堀底はゆるい凹凸があるが、ほぼ平坦に掘削されたものとみることができよう。この付近のローム層は所謂ブラックバンドの下方が淡灰黄色で、さらに下方では、黄色味が薄れるが、周堀底はこのレベルにあり、標高一五・二一五・三がである。

周堀は墳丘側でその底から約七〇度の急角度で立ち上る。この周堀立ち上り面は、下方は比較的遺存状況が良いが、上方は若干崩壊している。

周堀と墳丘の間には幅約一・五mの平坦面が認められた。これはローム層(d層)のほぼ上面までを削り出して成形した可能性がある。

墳丘はこのテラス部分から約三五度の傾斜で立ち上っている。覆土である第14層の暗茶褐色土とは凹凸のある不整合面を形成するが、これはこの部分での若干の土砂の流失を物語るものであろう。トレンチ南端のa層は、青灰色の粘質土で、旧表土と考えられるもので、部分的に観察できる間層のa'層は、榛名山ニッ岳降下火山灰層(FA)の可能性が高い。

なお、周堀内で確認された溝(SD001)は、その覆土の状況から古墳と直接関係するものではない。

第2トレンチ

第1トレンチの東側に設定したトレンチだが、調査期間の関係で、途中までの発掘にとどまった。周堀立ち上り下端はトレンチ南部内と思われるが、上端はトレンチ外である。

周堀覆土中から埴輪片が出土している。

第3トレンチ(第11図)

第4、5トレンチと共に墳丘南東の崩壊の認められる部分の周堀内側立ち

上りを確認するために設定した。幅一・八m、長さは七・〇mである。

約八〇cmで客土されており、その下に浅間A軽石と思われるパミス粒を含む水田耕作土が存在する。これを取り除くとすぐにロームと周堀が検出されたが、旧表土は存在しておらず、ロームも耕作で若干削られているらしい。

周堀覆土は暗灰褐色土(第10層)、明灰褐色土(第11層)、灰褐色土(第13、14層)が堆積しており、堀底に近い部分にはロームブロックを多量に含む暗黄褐色土(第15層)が堆積していた。いずれもほぼ、自然な埋没状況を示すものである。

周堀覆土中からは、第1トレンチ同様、葦石と考えられる河原石が出土した。第15、14層が約二〇cmほど堆積した後、転落しはじめたものと思われる。上層の第11、13層に及んでいる。

また、覆土内からは埴輪片も出土したが、これらは、中々上層の第10、11層からの出土で、葦石より遅れて転落したものである。

周堀底はトレンチ内で良好に検出できなかったが、トレンチの端では、ローム検出面から約一・二mあり、標高は一五・五m前後、トレンチ外方でさらに深くなる可能性もある。

立ち上りは、トレンチ端部(A')から一・三mの部分、上端は二・二mの部分である。途中屈曲があり、上部が崩壊している可能性があるが、平均角度は約五〇度である。

第4トレンチ(第12図)

幅三m、長さ一mのトレンチである。客土の厚さは約一mあり、この下に約一〇cmの厚さで浅間A軽石と思われるパミスを含む灰褐色の水田耕作土が存在し、これを取り除くとローム及び周堀覆土が現われ、そのプランが

確認された。

周堀覆土は、墳丘側から自然に埋没する状況を示しており、立ち上り付近では暗褐色土（第12～16層）が斜めに四～五層に堆積する。その上方には暗褐色土（第8～10層）、灰褐色土（第11層）が堆積している。

周堀覆土中からは第1、第3トレンチ同様葦石と考えられる河原石及び堆積片が出土した。葦石は、周堀が第16、15層が埋没し、第14層が堆積している途中に転落し始めており、上層の第9層中に及んでいる。堆積片については大半が第10、11層に包含されており、葦石との落下とは第1、第3トレンチ同様時間差を認めてよいだろう。

周堀底は、緩い凹凸が認められるが平坦に掘削されたものとみてよく、堀高は一五・四～一五・六である。立ち上り部分は比較的良好な遺存状況で、堀底とは約六〇度弱の角度を有する。

第5トレンチ（第13図）

幅二・七、長さ九のトレンチで、昭和四八年度の第14トレンチ（B一部分）と一部重複し、このためか、トレンチ南手を中心に攪乱が目立つ。

トレンチ付近では、七〇センチから一・二メートルの厚さで客土されており、その下に水田耕作土（第7、8層）が存在する。そして、その下の暗褐色土や暗灰色土（第9～12層）の存在は、周堀の確実な覆土である第13層以下とは断続する堆積状況にあり、後世、同部分を削平する事業のあったことを示す。

堀底は確実に検出していないが、第4トレンチの状況から、掘り下げた部分より下方、ほどなくの部分かと思われる。立ち上りも、比較的古い時期に崩壊が起っているものと思われ、凹凸が目立っており、堀底からの立ち上り角度は約二五度前後と、他のトレンチ内の状況と比較して緩やかである。

覆土中からは葦石と考えられる河原石と堆積片が出土したが、攪乱のため点数は少なかった。

(二) 遺物

昭和四八年度（第14、15図）

主に調査法に起因するが、第18トレンチ以外の遺物は少なく、38を除き、第18トレンチ内の周堀覆土中の出土でいずれも破片である。なお、未確認とはいえ稲荷山古墳外堀に隣接する箇所であり、稲荷山古墳に帰属する遺物が混入している可能性がある。

出土遺物の種類としては円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器があった。

1～3は普通円筒の口縁部、4～6は朝顔円筒の口縁部（6は下方部位）である。7～22は円筒体部で、いずれも外面はタテハケメ、内面タテ方向のナデとその後のタテまたはナナメ方向のハケメで仕上げている。タガは突出度の大きいものもなく、偏平な台形をしたものが多いが、20、21のように三角形である。23～28は円筒の底部、29は楕形、30は人物の顔面の破片である。31以下は形象の破片だが器種不明である（34は馬の一部か）。36、37は須恵器の壺の破片、38は第13トレンチ周堀覆土中出土の高杯脚部破片だが、古墳の時期を直接指示するものと思われない。

昭和六〇年度（第16～21図）

各トレンチとも墳丘に近いこともあり、比較的まとまった量の埴輪片が出土したほか若干の土師器、須恵器片もある。

埴輪片で最も多いのは円筒の破片で、各部位の破片がある。成形及び調整は、外面はタテハケメを基本としているが、ナナメとなるものもある（ヨコハケメのものはない）。内面はタテのナデ、及びヨコないしナナメハケメを

用いる。口縁部は、外反させ（朝顔は直線的）ヨコナテで仕上げるが、ほぼ例外なく端面を作り出している。タガについては、台形やM字形を基調とし、突出度の大きいものもやや目立ち、74のような三ヶ所に稜を持つ特殊なものもあった。タガ部分で破損するが25は底部低位にタガを貼り廻らす例である。また、底面には禾本科植物の茎の痕跡を残すものが多い。スカシについては、13、32のように円形（正確には不正円形）のものが確認できたが、それ以外は未確認である。形象については点数も少なく、器種の判明したものも少ない。27、28はその台部で、大刀等の可能性が考えられる。また、93は靱の翼状の飾りの部分かと思われるものである。

（このほか、墳丘表採と伝えられるものを第22図に掲載しておいた）

（註）

- 1 川西安幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』64—2 日本考古学会 昭和五三年九月
- 2 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会 昭和五年一月
- 3 『二子山古墳』埼玉県教育委員会 昭和六年三月
- 4 丸墓山古墳の円筒埴輪片中には、稲荷山古墳の一箇所にタガを三条貼る円筒の系譜と考えられる三稜タガの破片があり（第20図75等）二子山古墳のものにはそれが認められない。
- 5 両古墳の年代については、註3の文献中で述べておいた。

忍城眺望



第3図 『忍名所図會』中の丸墓山古墳

五 ま と め

墳形及び周堀について

丸墓山古墳の墳形は、その南西方に航空写真に写し出された堀状の地下遺構によって、比較的小規模な前方部を有する前方後円墳と考えられたことがあったが、これは昭和四八年度の調査で、新しい溝状遺構と判明した。

埴玉古墳群周辺では、昭和になつて稲荷山古墳や若王子古墳など、一〇〇 μ 規模の大形前方後円墳が削平もしくは破壊されたが、これらはいずれも大規模工事によるものであることがわかっている。丸墓山古墳の場合、そうした記録もなく、また、前方部があったとすれば、それは南側階段部分の南西付近のほずであるが、この部分の墳丘には、大規模な採土の痕跡や崩壊も認められず、墳丘コンターラインも円丘状に整然としている。

以上の点から推測すれば、部分的ながら、今までの調査結果による限り、前方後円墳でなく、わが国最大規模の円墳と判断せざるを得ないだろう。

丸墓山古墳の規模は、昭和六〇年度の調査では、周堀の内側立ち上り部分の計測で直径一〇五 μ （みかけの墳丘立ち上り部分の直径では一〇二 μ ）とされた。周堀の外径は、外側の立ち上りが確実に捉えられた、昭和四八年度第18トレンチ付近で幅約三七 μ なので、昭和六〇年度調査で確認された内側の立ち上りを基準にした同心円形で推定すると、約一八〇 μ となり、今まで推定されていた周堀より小さくなる。それにしても、今回確認された、周堀内側の立ち上り部分は、いずれも部分的な確認であった。この古墳の周堀の具体的な形態・規模を確定するためには、まだ現在までの調査では不十分で

ある。その補足調査がさらに行われなければならない。

古墳の築造時期について

古墳に伴うことが確実な昭和六〇年度出土の円筒埴輪から、丸墓山古墳の年代を検討する。

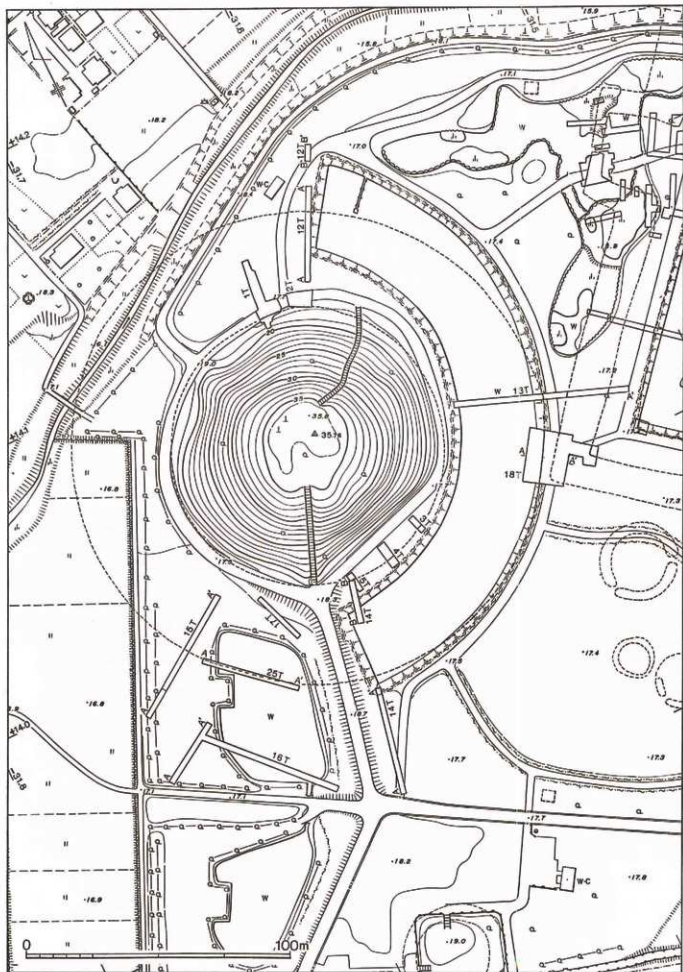
形状は、大きな破片（第16図一）から推定すると、口縁が直径約五五 μ にも達する、古墳群中の円筒埴輪としては最大級となるものがあり、これらの多段タガの大形品が主体となっている。外面はタテハケメで仕上げられており、スカシは円形のものばかりで、製作技法の特徴から川西編年のV期の範疇に入るであろう。

これらに類似する円筒埴輪を出土している埴玉古墳群内の古墳は、稲荷山及び二子山古墳である。稲荷山古墳の円筒埴輪は、外面をタテハケメで仕上げたものを主体とするが「B種ヨコハケ」を加えるものが若干認められ、スカシも円形のほか、半円、方形のものがあり、丸墓山古墳の円筒埴輪より先行する要素が認められる。

次に二子山古墳の円筒埴輪は、外面をタテハケメで仕上げられており、スカシは円形のほか、半円、方形のものがある。しかし、スカシの形態を除けば、タガの突出度や作りの点で、丸墓山古墳のものより後出的と言えよう。

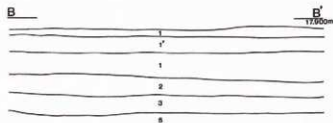
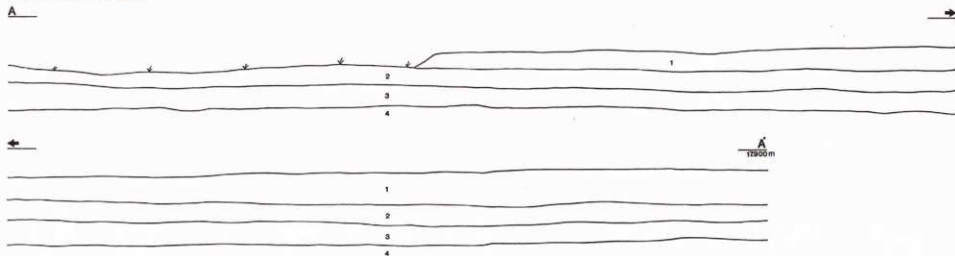
完形品がなく、破片による検討ではあるが、丸墓山、稲荷山、二子山古墳の円筒埴輪を比較すると、稲荷山→丸墓山→二子山、という時間的序列が考えられる。古墳の築造時期の順序も同様に考えざるを得ないが、稲荷山古墳が五世紀末～六世紀初頭、二子山古墳が六世紀前半でもその中ば頃と推定されるので、丸墓山古墳の年代は、六世紀前半頃に考えておくのが妥当である。

（註は前ページに掲載）



第4図 丸墓山古墳トレンチ配置図 (1~5Tは昭和60年度、13~25Tは昭和48年度)

第12トレンチ土層断面



第12トレンチ土層説明

1. 客土 1' 暗褐色
2. 灰褐色(耕作土)
3. 暗褐色(鉄分含む)
4. 黒褐色
5. 暗褐色

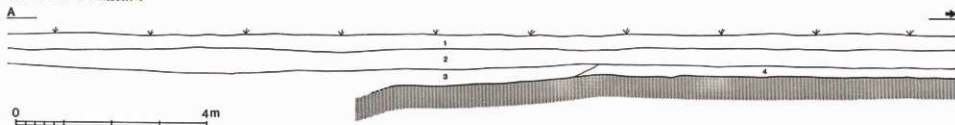
第14トレンチ土層説明

- A-A'
1. 灰褐色(耕作土)
 2. 暗褐色(鉄分含む)
 3. 黒色
 4. 黒色(3に比べ灰色味がある)
 5. 黒色(鉄分含む)
 6. 黒色(5に比べ青灰色味があり、粘性強い)

B-B'

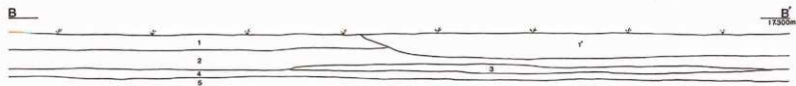
1. 灰褐色(耕作土) 1' 暗褐色(客土、ロームブロック含む)
2. 暗褐色(鉄分含む)
3. 暗褐色(ロームブロック、鉄分含む)
4. 黒色(灰色味があり、鉄分含む)
5. 黒色

第14トレンチ土層断面

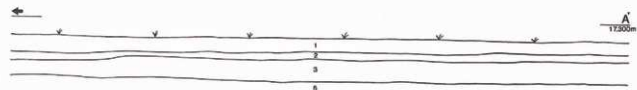
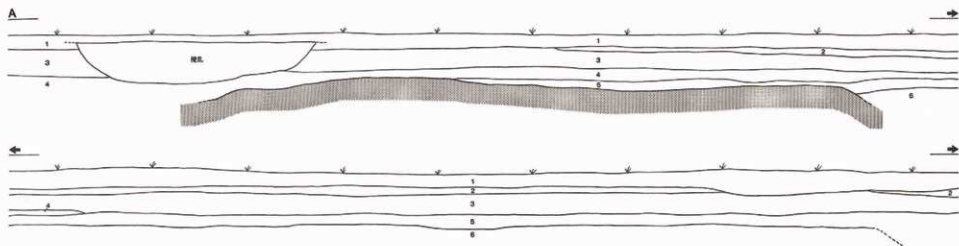


第5図 丸墓山古墳第12、14トレンチ土層断面図

第14トレンチ土層断面(前ページから)



第15トレンチ土層断面



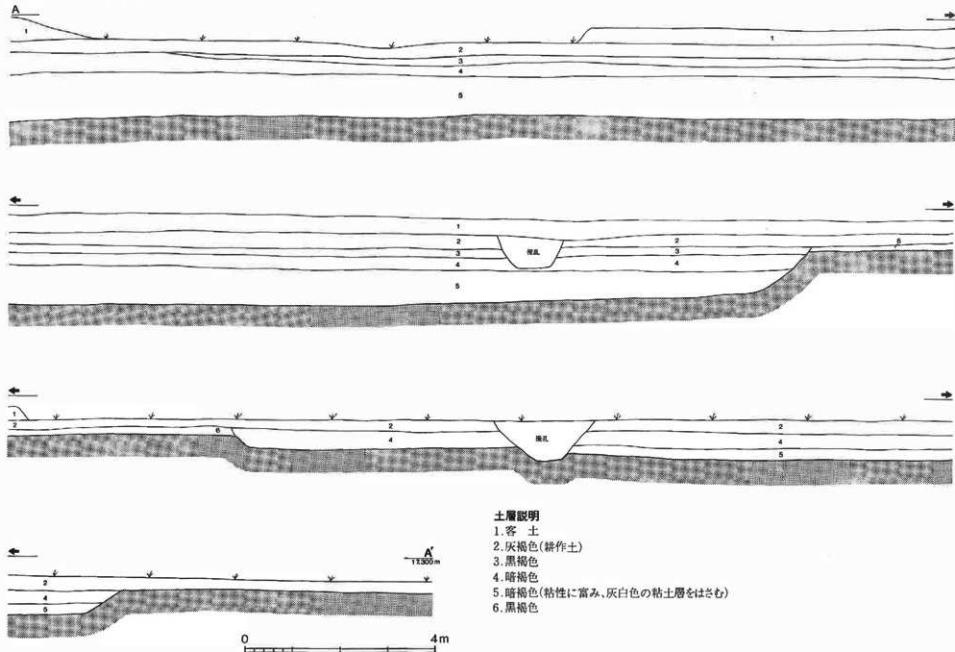
0 4m

第15トレンチ土層説明

1. 灰褐色(耕作土)
2. 茶褐色(ロームブロック含む)
3. 暗褐色(鉄分を含み、高師小僧発達する)
4. 黒色
5. 黒色(4よりさらに暗い)
6. 暗褐色(ロームの変化土?)

第6図 丸墓山古墳第14, 15トレンチ土層断面図

第13トレンチ土層断面

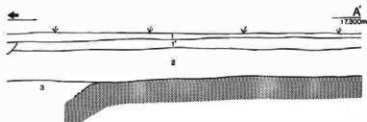
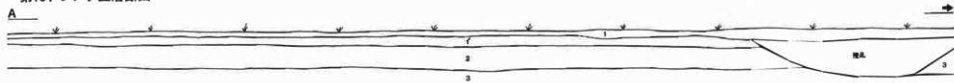


土層説明

1. 客土
2. 灰褐色(耕作土)
3. 黒褐色
4. 暗褐色
5. 暗褐色(粘性に富み、灰白色の粘土層をはさむ)
6. 黒褐色

第7図 丸墓山古墳第13トレンチ土層断面図

第16トレンチ土層断面



第16トレンチ土層説明

1. 灰褐色(耕作土)
- 1' 灰褐色(1と略同質の耕作土)
2. 暗褐色(鉄分を含む)
3. 黒色(やや灰色をおびる)

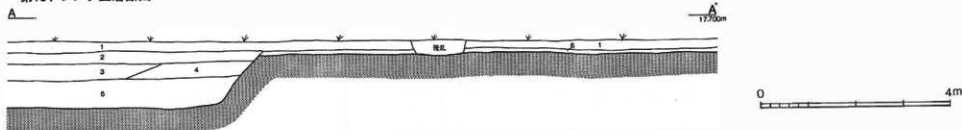
第18トレンチ土層説明

1. 灰褐色(耕作土)
2. 暗褐色(ロームブロック含む)
3. 暗褐色(灰色味あり)
4. 暗褐色(粘性強い)
5. 暗褐色(灰褐色の粘土層を包含する)
6. 茶褐色

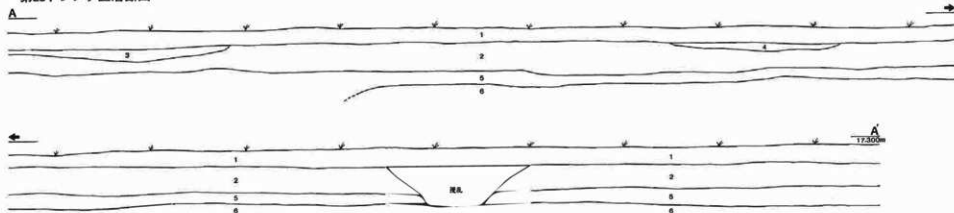
第25トレンチ土層説明

1. 灰褐色(耕作土)
2. 暗褐色(鉄分を含み高師小僧発達する)
3. 黄褐色(鉄分を含み高師小僧発達する)
4. 黄褐色(鉄分、ロームブロック含む)
5. 黒色
6. 暗褐色(粘質土)

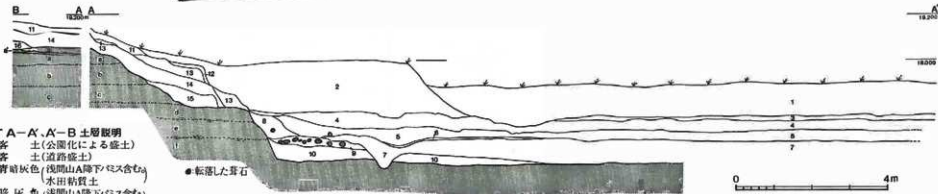
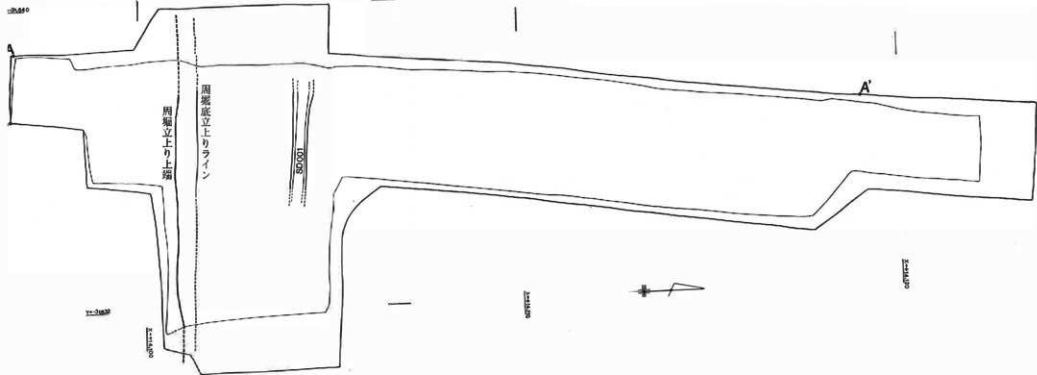
第18トレンチ土層断面



第25トレンチ土層断面



第8図 丸基山古墳第16, 18, 25トレンチ土層断面図

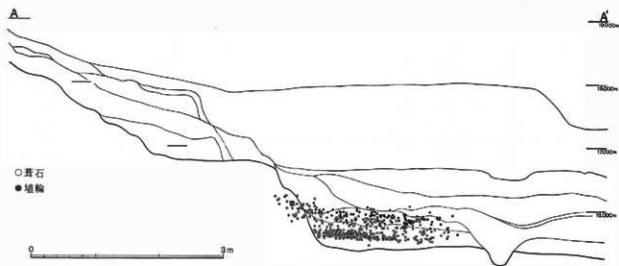


1T A-A', A'-B 土層説明

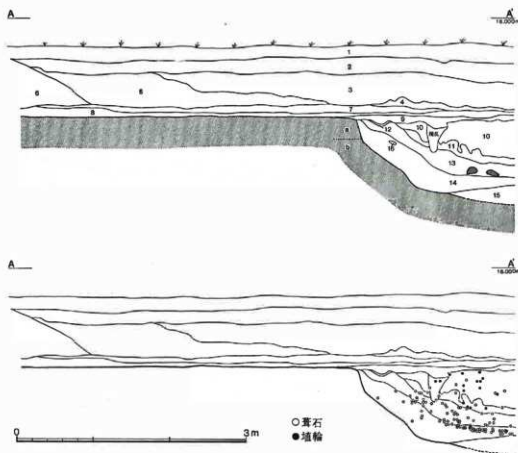
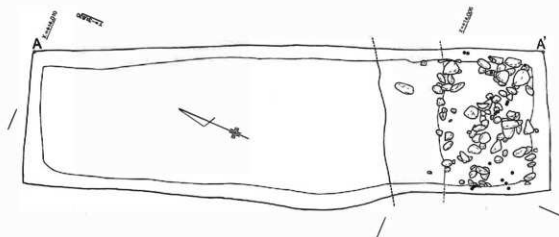
1. 客土(公園化による盛土)
2. 客土(道路盛土)
3. 青暗灰色(浅間山A降下/スス含む)
水田粘質土
4. 暗灰色(浅間山A降下/スス含む)
水田粘質土
5. 暗灰色(上半に褐色粒子含む粘質土)
6. 明灰色(灰白色土粒子を多量に含む粘質土)
7. 明灰色(灰白色土粒子を含む。植物遺存体含む)
8. 暗灰褐色(炭化物・ローム・明灰色土粒子含む)
9. 暗灰褐色(シルト質。炭化物・ローム粒子を含む。植物遺存体含む)
0. 暗灰褐色(シルト質。炭化物、植物遺存体含む)
1. 暗褐色(しまりを欠く腐植土、墳丘表土)
2. 暗灰色(13の風化土)
3. 灰色(1色のバミス少量含む。粘性強い)
4. 暗黄褐色(ローム質でしまりに欠ける。埴輪片を含む。墳丘覆土)
5. 暗灰茶褐色(ローム粒子を多量に含む粘性強い)
6. 黄灰色(灰色粘土中にハートロームブロックを多量に含む。粘性強い)

- a. 青灰色(白色の「スス」・褐色の粒子少量含む。粘性強かつくまる。) a' 灰色(aの明るい部分)
- b. 暗黄褐色(ローム層)
- c. 鮮黄褐色(ローム層)
- d. 暗灰黄色(ローム層)
- e. 黒褐色(ローム層、ブラックバンド相当層)
- f. 高灰黄褐色(ローム層)

第9図 丸墓山古墳第1トレンチ平面図及び土層断面図



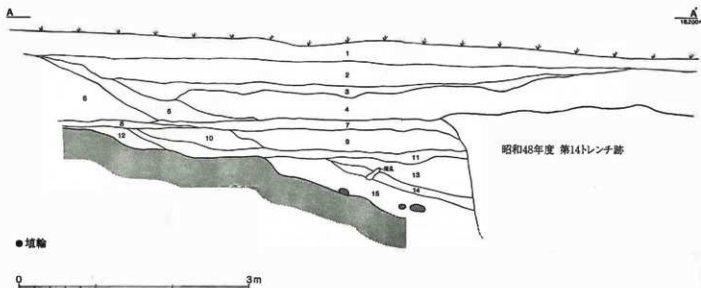
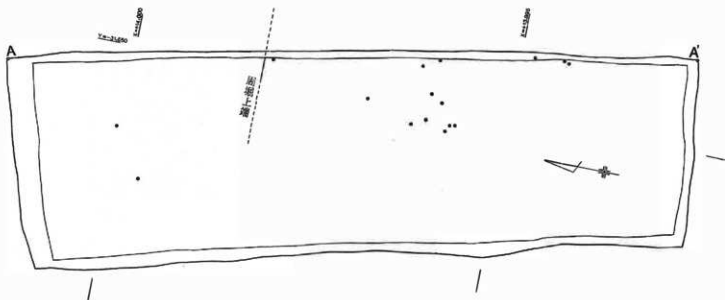
第10図 丸墓山古墳第1トレンチ墓石、埴輪出土状況



3T 土層説明

1. 客土 (茶褐色土。ローム・小石含む)
2. 客土 (明灰色砂質土)
3. 客土 (浅間山A降下パミス含む。黒灰色、灰褐色、明灰色、暗褐色土のブロック含む)
4. 客土 (暗褐色土。わずかに焼土粒子含む、灰褐色土粒子混入)
5. 客土 (暗褐色土。小礫多量に混入)
6. 客土 (旧道断崖土。礫を多量に含む明褐色土)
7. 暗灰褐色 (ローム、暗褐色土の小ブロックを多量に混入。天明パミス少量含む)
8. 灰褐色 (浅間山A降下パミス、焼土粒子をごくわずか含む。ローム粒少量混入)
9. 暗褐色 (灰色味があり、焼土粒子、茶褐色土粒子少量含む。ローム、明灰色土のブロック多く含む)
10. 暗灰褐色 (茶褐色土粒子、焼土、炭化物粒子含む。ローム、灰色土粒子混入)
11. 明灰褐色 (茶褐色土粒子、焼土、炭化物粒子含む。ローム、暗褐色土粒子混入)
12. 暗灰褐色 (10に近似。炭化物、茶褐色粒子含む)
13. 灰褐色 (焼土、炭化物粒子、茶褐色粒子含む。ローム粒子、暗褐色、灰色土混入)
14. 灰褐色 (13に近似。13よりやや明るくしまる)
15. 暗黄褐色 (ロームブロック多量に混入)
16. 暗褐色土ブロック
 - a. ローム基盤(黄褐色)
 - b. ローム基盤(黒褐色)

第11図 丸基山古墳第3トレンチ平面図及び土層断面図

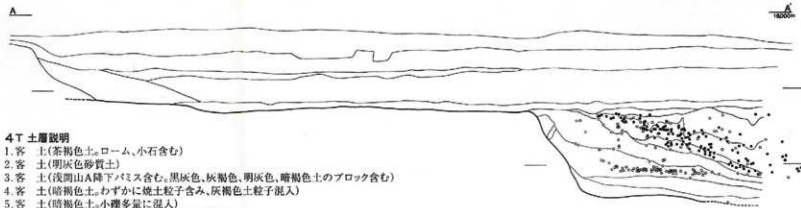
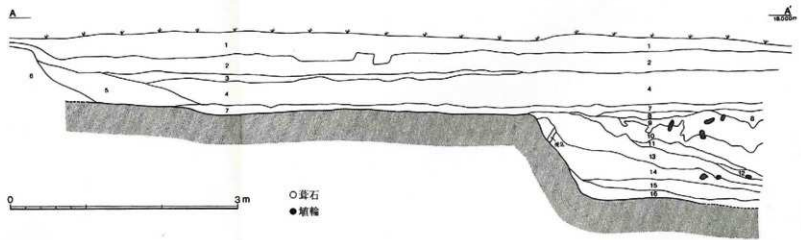
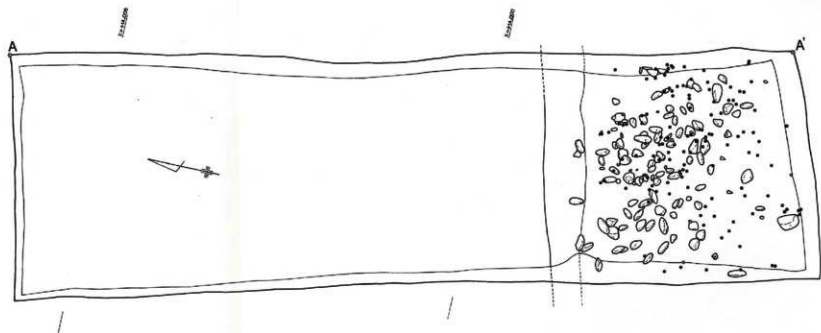


昭和48年度 第14トレンチ跡

5 T 土層説明

1. 客土(茶褐色土・ローム、小石含む)
2. 客土(明灰色砂質土)
3. 客土(暗灰褐色土・小礫含む)
4. 客土(灰色土・天明バミス含む、黒灰色、灰褐色、明灰色、暗褐色土のブロック混在層)
5. 客土(暗褐色土・小礫多量に含む)
6. 客土(旧道路盛土。礫を多量に含む明褐色土)
7. 暗灰褐色(浅間山A降下バミスわずかに含み、ローム、暗褐色土の小ブロックを多量に含む)
8. 暗灰色(浅間山A降下バミス、焼土、炭化物粒子わずかに含む)
9. 暗褐色(ローム、暗灰褐色土のブロック、粒子を多量に含む)
10. 暗灰褐色(焼土・炭化物粒子含む。ローム・明灰色土のブロック、粒子を含む)
11. 暗灰色(焼土・炭化物粒子含む。明灰色土・灰褐色土粒子混入。粘性に富む)
12. 暗褐色(焼土・炭化物粒子含む。ローム・明灰色土粒子混入)
13. 黒褐色(炭化物粒子含む。ローム・茶褐色土・灰色土粒子含む。植物性繊維含む)
14. 暗灰褐色(炭化物粒子含む。ローム・茶褐色土・灰色土粒子含む。植物性繊維含む)
15. 暗褐色(ローム粒子含む)

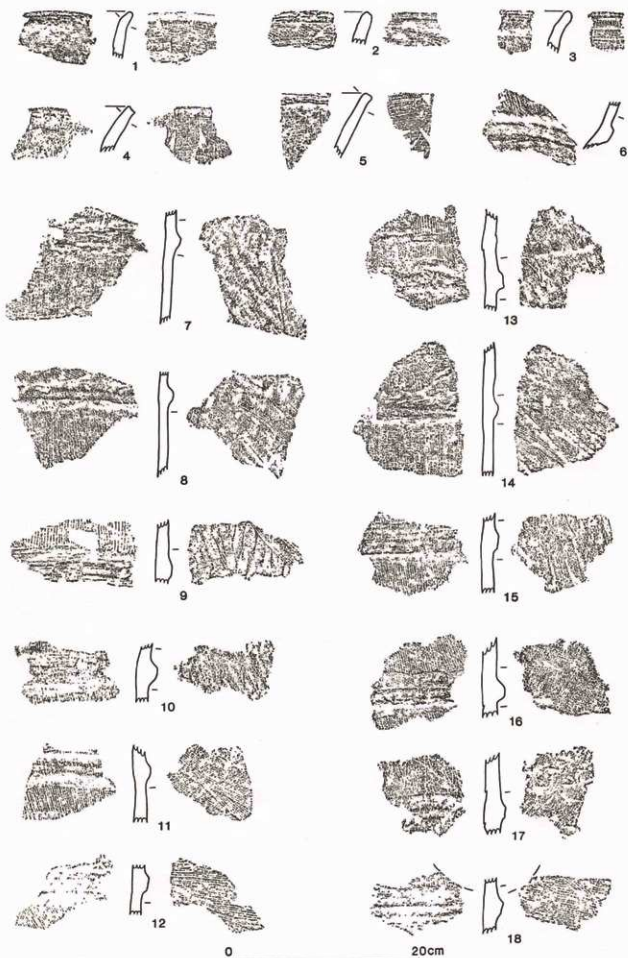
第13図 丸墓山古墳第5トレンチ平面図及び土層断面図



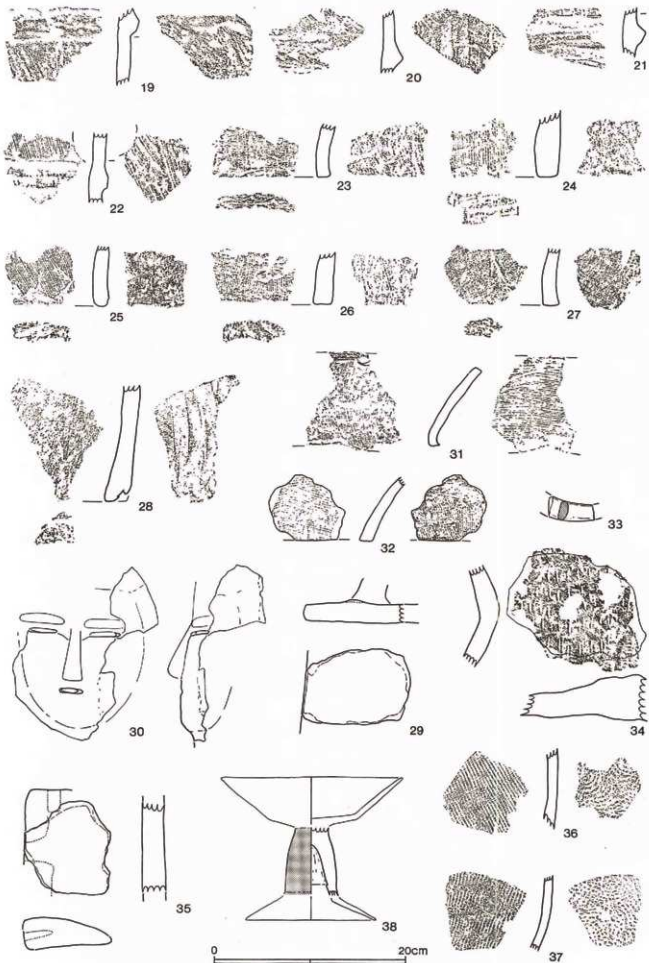
4T 土層説明

1. 赤土(赤褐色土・ローム、小石含む)
2. 赤土(明灰色砂質土)
3. 赤土(浅間山A降下ノミス含む、黒灰色、灰褐色、明灰色、暗褐色土のブロック含む)
4. 赤土(暗褐色土、わずかに焼土粒子含む、灰褐色土粒子混入)
5. 赤土(暗褐色土、小礫多量に混入)
6. 赤土(旧道路盛土、礫を多量に含む明褐色土)
7. 灰褐色(浅間山A降下ノミスわずかに含む、ローム粒混入)
8. 暗褐色(焼土、炭化物粒子少量含む、ロームブロック混入)
9. 暗褐色(焼土、炭化物粒子少量含む、灰褐色、黄褐色土の隠粒粒子含む)
10. 暗褐色(焼土、炭化物粒子少量含む、灰褐色、黄褐色土の隠粒粒子、黒色土のブロック含む)
11. 灰褐色(焼土、炭化物粒子少量含む、灰色、黒褐色土のブロック含む)
12. 暗褐色(焼土、炭化物粒子少量含む、黒褐色土ブロック混入)
13. 暗褐色(焼土、炭化物粒子少量含む、黄褐色、灰褐色土混入)
14. 暗褐色(灰色味が残り、焼土、炭化物、茶褐色土、ローム粒含む)
15. 暗褐色(硬質、炭化物含む、ローム、灰色土、黒褐色土ブロック混入)
16. 暗褐色(硬質、炭化物含む、ローム、黒褐色土ブロック混入)

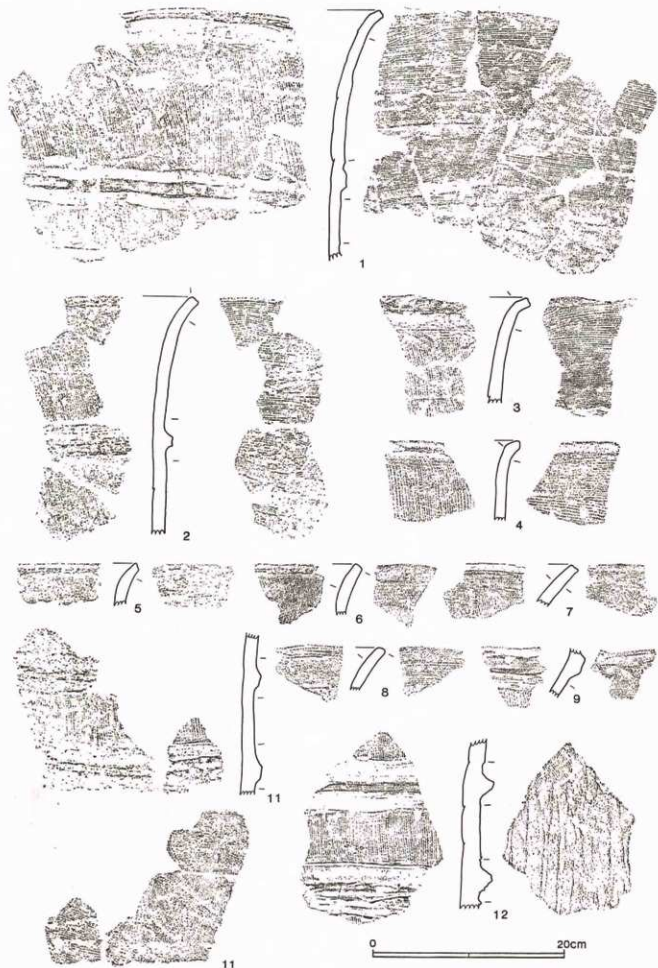
第12図 丸尾山古墳跡4トレンチ平面図及び土層断面図



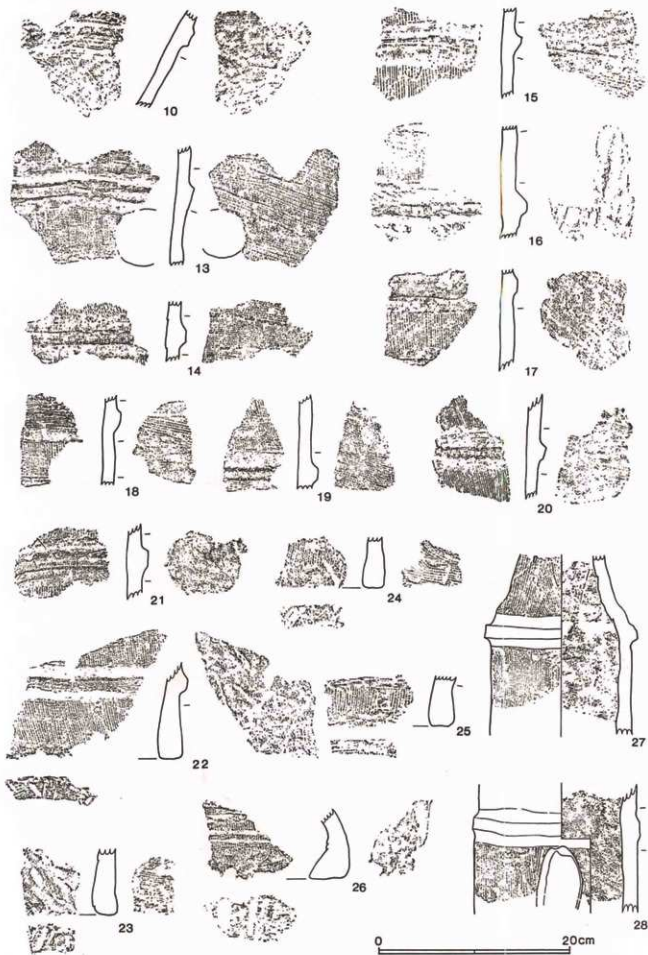
第14図 九墓山古墳第18 トレンシア出土遺物



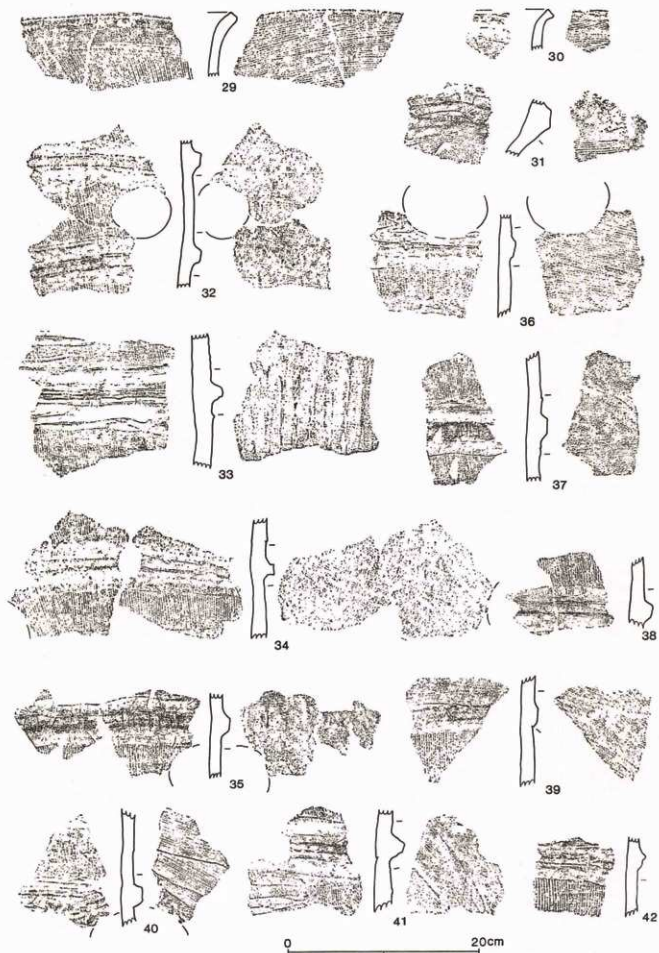
第15図 丸墓山古墳第13, 18トレンナ出土遺物



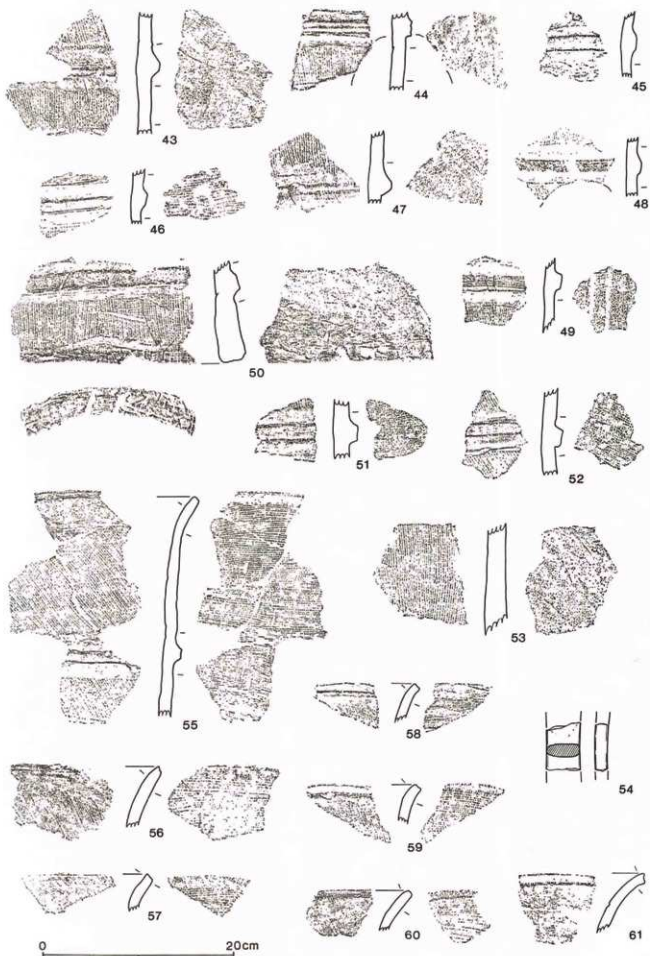
第16図 丸墓古墳第1トレンゾ出土遺物



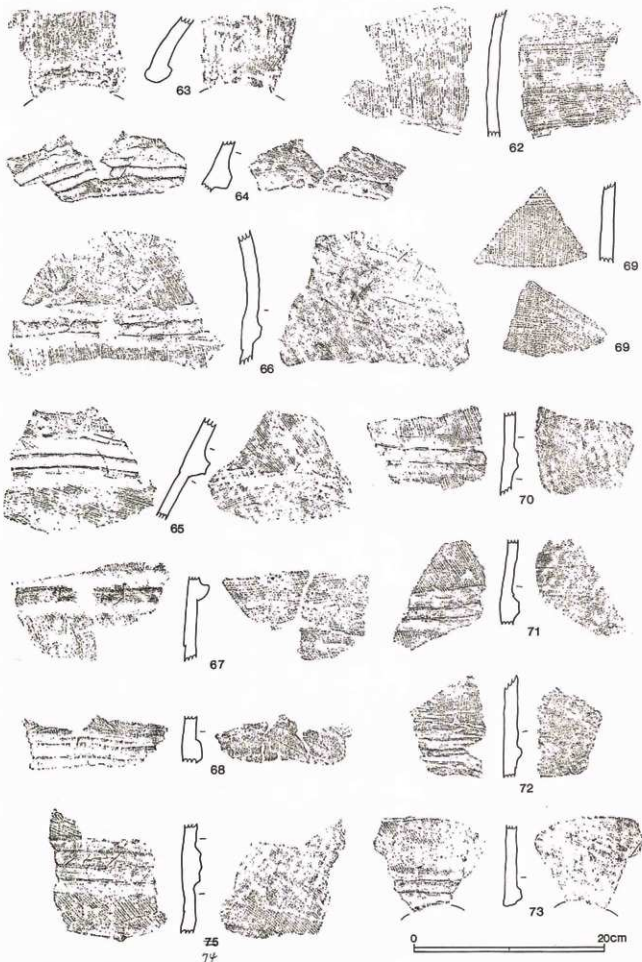
第17図 丸墓山古墳第1トレンチ出土遺物



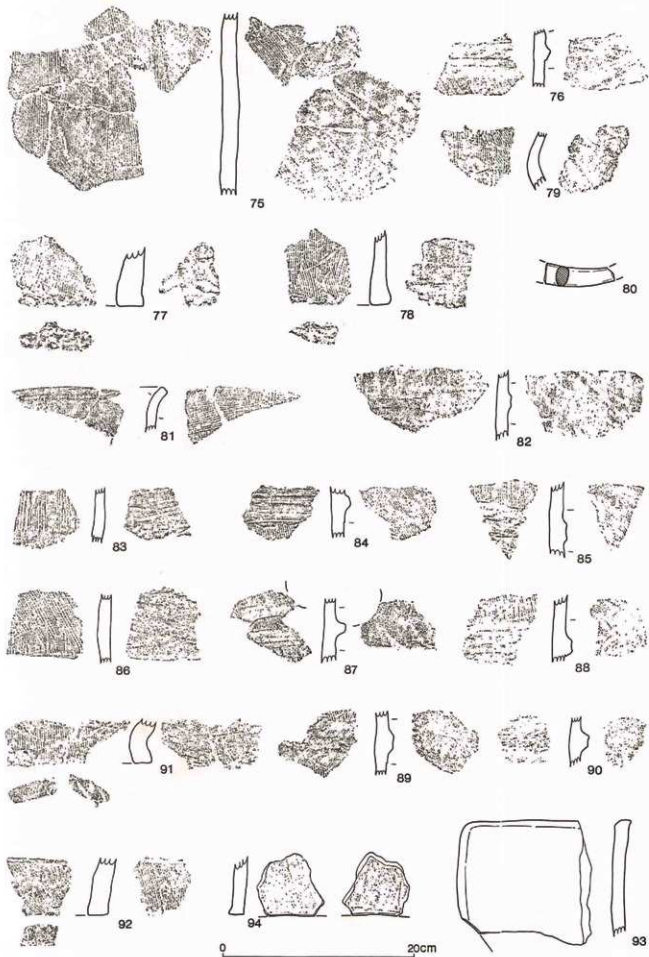
第18図 丸墓山古墳第2トレンチ出土遺物



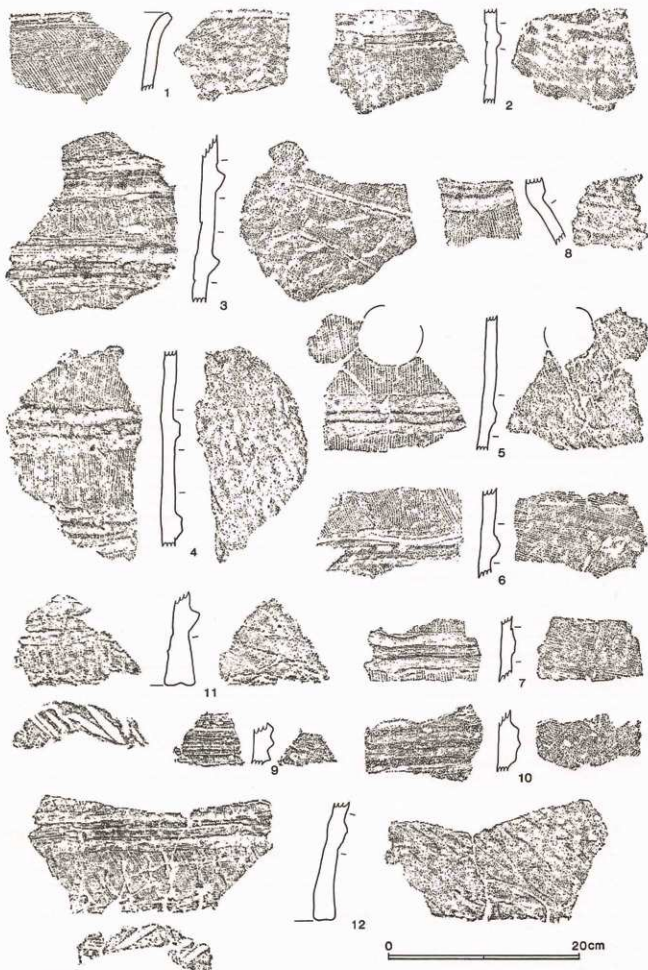
第19図 丸蓋山古墳第2(43~50)、第3(51~54)、第4トレンチ(55~61)出土遺物



第20図 丸墓山古墳第4トレンチ出土遺物



第21図 丸基山古墳第4(75~80), 第5トレンチ(81~93)出土遺物



第22图 伝丸墓山古墳墳丘出土遺物

丸墓山古墳出土遺物観察表

昭和48年度

(胎土、焼成については、黄砂をf、中砂粒をm、細砂をf、小石粒をsと略()内はその多寡で5(多量)→(少量)の5段階表示、焼成についてはHと略、()内はその明暗で5(濃黒)→1(灰白)の5段階表示、色調は新版標準土色誌(小山、竹原、日本色研、昭和45年)による。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土組成、色調等の特徴	ハケメ (mm/10分)	備考
1~3	円筒口縁	普通円筒の小破片。外面はタテハケメ(左傾するものもあり)、 端部はヨコナデして端面を作り出すが、3はくずれている。	1: f(5)H(2)橙(2.5YR 5/8) 2: f(3)H(4) # (2.5YR6/6) 3: f.s # (#)		18T層埋土上。
4,5	"	朝顔形口縁の小破片。直線的な開き方をしており、外面タテハケメ、 端部は端面を作り出しヨコナデで仕上げる。	4: f(3)sH(5)に赤味(5YR7/4) 5: f(3)H(3)		"
6	"	朝顔形口縁の下方位。内面は部分的にナメハケメ。	f.s にふい橙(5YR 7/4)	2.6	"
7	円筒底部	やや薄手なので上方部位か。外面タテハケメ、内面ナメハケメ、 ハケメ、オサエ痕残る。8、14と同一個体か。	f(表面ざらつく)淡橙(5YR8/4)	1.8	"
8,14	"	同一個体と考えられる。外面タテハケメ、内面ナメハケメで オサエ痕が残る。タガはくずれた台形。	8: f.黄橙(10YR 7/8) 14: f.s #	1.8~1.9	"
9	"	外面荒いタテハケメ、内面はタテナデとナメハケメ。	f.s. にふい橙(5YR 7/4)	1.5~1.8	"
10	"	タガはくずれた台形だが、やや突出する。	f.s. 橙(2.5YR 6/8)	2.5	"
11	"	外面タテ、内面ナメハケメ。タガは偏平な台形。	f.s.(4)橙(5YR 6/8)	1.9	"
12	"	"	s. 明褐色(2.5YR 5/8)	2.0	"
13	"	タガの上方で直径18cm位で、形象の台部の可能性が高い。	f. H(2)橙(5YR 6/4)	2.4	"
15	"	外面タテ、内面はナメハケメ。タガは偏平な台形。	f.s. 黄褐(7.5YR 7/8)	2.3	"
16	"	外面タテハケメ、内面ナデ。タガはやや突出度が高い。	f(4)H(2)橙(5YR 7/8)	2.2	"
17	"	"。タガは偏平でくずれたM字形。	f(4)sH(4)	1.7	"
18	"	円形のスカシのある破片。外面タテ、内面ナメハケメ。	s. 明赤褐(2.5YR 5/6)	2.3	"
19	"	外面タテハケメ、内面ナデ。タガはくずれた台形。	s. 橙(2.5YR 6/6)	1.7	"
20	"	タガは三角形。内面タテにナデ。	f(4)		"
21	"	内面ナメハケメ、タガはくずれた台形で三角形に近い。	s. 明褐(2.5YR 5/6)	1.7	"
22	"	円形のスカシのある破片。外面タテ、内面ナメハケメ。	s. # (2.5YR 5/8)	2.0	"
23	円筒底部	やや薄手。外面はごく浅いタテハケメ、内面は木口状工具でヨ コにナデの部分がある。底面に禾本科茎圧痕あり。	H(4)橙(7.5YR 6/6)		"
24	"	外面タテハケメ、内面ナデだが磨滅する。	H(1)にふい黄橙(10YR7/2)	2.5	"
25	"	やや薄手(形象の台部の可能性あり)。外面左傾するタテハケメ、 内面は底面に近い部分をヨコにナデている。	H(4)にふい橙(7.5YR7/3)	1.8	"
26	"	径が小さく、形象の台部の可能性あり。内面タテにナデ。	f(5)橙(2.5YR 6/6)	2.0	"
27	"	薄手で外反度が強く、形象の台部であろうか。	H(4)橙(5YR 6/6)	1.4	"
28	"	上位で直径約18cm。内面はタテにナデ。	f.s. 淡黄(2.5Y 8/3)	3.2	"
29	唇	唇形の下部縁部と考えられる。表にタテのハケメが残る。側面、 裏面はナデ。裏の円筒部分は剥落。	f.s. H(2)淡橙(5YR8/3)		"

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10枚)	備考
30	人物	顔面の破片。かなり大形の人物であろう。内面にマキアゲの接合痕が残る。顔面は丁寧にナデている。	f(4)s. 橙(7.5YR 6/8)		18T 周掘り土。
31,32	形象	器種不明。32は下位の破片だが、31と同器種と考えられる。上方が外反して聞きヨコナデにより端面を作り出す。下部はへら状工具で水平に穿孔する。円筒のスカシとしては不自然。	31 : f. にふい橙(5YR 7/4) 32 : f. s. 橙(2.5YR 6/6)	1.5 2.0	"
33	"	形象の付属品。裏面に本体のハケメが反転して残る。	f(2)H(2)橙(5YR 6/8)		"
34	"	表面が馬の背状となっており、へら先による長さ約1.5cmの同一方向の除刻が施されている。器種不明。	f(2)淡黄橙(10YR 5/2)		"
35	"	形象の付属品と考えられるが器種不明である。左側に面が形成され袋状の穴があげられており、上方にも面があり、竹管による穴があげられている。右側は縁に向き薄くなる。表は平滑、裏はナデだが深いハケメが消えずに残っている。			"
36,37	須恵器	甕体部破片。外面は平行タタキ(39はカキメを加える)、内面は同心円タタキ。	36 : H. 明青灰(10c 7/1) 37 : H. 明紫灰(5B 7/1)		"
38	土師器	脚破片。外面はへらミガキに赤彩、内面はタテにナデ(シボリ目残る)、接合痕以下はヨコにナデ。和泉式で相当磨滅する。	f(5)灰白色(10YR8/1)		12T 出土。古墳と直接関りなし。

昭和60年度

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10枚)	備考
1	円筒口縁	復原口縁径は55cm前後と大形である。外面タテハケメ、内面ヨコ方向のナデ及びハケメ。端部は外湾させ、端面を作り出している。タガは扁平な台形で、8.3cmに1条貼付される。多段(8段?) タガで、器高は90cm前後に復原される。	明赤褐色(5YR 5/8)		1 T 出土。
2	"	断面は1とは同種だが、口縁から第1段タガまでは1よりやや狭く、タガ間は逆に1よりやや広い。タガはやや突出度の強いM字形である。	f(5)H(2) 橙(5YR 7/6)	2.0	"
3	"	端部は、1、2とはほぼ同形態。端面が潰れる部分がある。	f(4)H(2)明赤褐(5YR 5/6)	2.1	"
4	"	端部を小さく屈曲させている。端面は鈍丸味がある。	s(4)黄橙(7.5YR 7/8)	2.6	"
5,6	"	小破片。5は端面がシャープ。	5 : s. 橙(7.5YR 7/6) 6 : f. H(4)橙(2.5YR 6/6)	1.7 1.6	"
7,8	"	端部が直線的に開く状況から朝顔形と考えられる。端面は7はシャープだが8は鈍い。	7 : s. 橙(7.5YR 7/6) 8 : f. 浅黄橙(10YR 8/3)	1.9 1.8	"
9	"	朝顔形の下方部位。タガは幅広く扁平なM字形。	f(4)H(4)橙(5YR 6/6)		"
10	"	" タガは扁平なM字形。	f(3)H(4) # (#)	0.8~1.0	"
11	円筒体部	外面タテハケメ、内面ナデ及びナメハケメ。タガは扁平なM字形又は台形。タガの間隔約10cm。	n. にふい橙(7.5YR 6/4)	2.2	"

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10本)	備考
12	円筒体部	外面タテハケメ、内面タテナデ(上方にナナメハケメあり)。重厚な作りで、タガは突出度の強い狭頭な台形をしている。タガの間隔10cm。33(2T)と同一個体か。	l(4)s. s. 橙(5YR 6/6)	1.8	1T出土。
13	"	円形のスカシ部分の破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。	l, H(4)にふい橙(5YR7/4)	1.8~2.0	"
14	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは扁平な台形。	s. 橙(5YR 6/7)	2.1	"
15	"	外面のタテハケメは荒く、タガは12と略同形態。	s(4)H(4)橙(5YR 7/6)	2.6	"
16	"	厚手で底部に近い部分か。タガはくずれた台形でやや突出度が強い。タガの間隔約10cm。外面タテハケメ、内面タテナデ。	l(4)ss(4)H(4) 赤(10R 5/6)	2.0	"
17	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは扁平な台形。	l, s. H(4)浅黄橙(7.5YR8/4)	1.8	"
18~ 21	"	体部の小破片で、外面はいずれもタテハケメ(20は左傾)、内面はナデ及びナナメハケメ。タガは扁平でやや粗雑。	18 : s. 橙(5YR 6/8) 19 : l(4)s. 明褐(7.5YR5/8) 20 : s. 橙(5YR 6/8) 21 : l, s. 明赤褐(2.5YR5/6)	1.7 2.3 1.7 2.4	"
22	円筒底部	底径33~34cmと推定。外面タテハケメ、内面ナナメにナデ。タガは鈍い台形でやや突出度が強い。底面に禾本科植物圧痕。	s. 橙(5YR 6/6)	2.3	"
23	"	外面はタテハケメの後ナナメにナデ、内面はヨコにハケメ。	s. 明赤褐(2.5YR 5/6)	2.3	"
24~ 26	"	底部小破片。外面タテハケメ、内面はナナメにナデ又はハケメ。底面には禾本科植物の圧痕が残る。25は低位にタガがある。26は基底部内側に粘土が三角形に突出、上方は内湾している。	24 : s. H(2)明赤褐(2.5YR5/6) 25 : l, s. H(4) (") 26 : l (") (")	2.2 " 2.3	"
27	形 象	器種不明。タガ以下は直径14.7cmの円筒状、上方は円錐状にせばまる。器材の台部か。外面タテハケメ、内面ナデ、マキアゲ痕の残る部分あり。タガはやや突出度が強い。	l(4)s(4)H(2) 明褐(2.5YR 5/8)	2.0	"
28	"	タガ下方で直径16.8cm。27同様器材の台部かと思われる。外面タテハケメ、内面ナデ。不正楕円のスカシが一對ある。	l(4)s(4) 明褐(2.5YR 5/8)	1.7	"
29	円筒口縁	大形の円筒の口縁で直径は50cmを超すだろう。端部は外湾させヨコナデで端面作り出す。外面タテ、内面ヨコハケメ。	s. 橙(2.5YR 7/6)	2.2	2T出土。
30	"	口縁部小破片。直下の部分はやや薄くなる。	明赤灰(2.5YR 7/2)	1.7	"
31	"	朝顔形口縁の下方部位。タガは幅広い台形。	s. にふい橙(5YR 7/4)	"	"
32	円筒体部	円形のスカシのある破片。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガはややくずれた台形で突出度強い。直径約47cm。	s. 橙(2.5YR 6/6)	2.2	"
33	"	11同様狭頭な台形タガを有する。外面タテハケメ、内面タテナデ。器厚はやや大きい。タガ直上で直径約45cm。	l(2)H(4) 橙(5YR 7/6)	1.9	"
34	"	タガは突出度の強い幅広い台形。外面タテハケメ、内面ナナメのナデ及びハケメ。タガ直下で直径約38cm。	l(3)H(2)H(4) 橙(5YR 6/8)	2.1	"
35	"	直径が17~18cmと小さく形象の台と考えた方がよいだろう。外面タテハケメ、内面はタテナデ。タガはしっかりした台形。	l. 橙(7.5YR 7/6)	1.8	"
36	"	円形のスカシ部分の破片。外面タテ、内面ヨコハケメ。タガは扁平でくずれた台形、直下の直径は約37cm。	l(5)s. 橙(2.5YR 7/6)	2.0	"

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/10本)	備考
37	円筒体部	外面タテハケム、内面ナデ、部分的にヨコハケム。	f(5)s. 橙(5YR 6/6)	1.7	#
38	#	外面タテハケム、内面ヨコハケム、タガはくずれた台形。	l. s. H(4) 橙(5YR 6/6)	2.3	#
39	#	#、タガは扁平な台形。	l. s. H(4) に近い橙(5YR7/4)	2.3	#
40	#	薄手で、上方部位の破片か。タガは突出度の強い台形。	l. 橙(5YR 7/8)	2.6	#
41	#	タガは33と略同形態で突出度が強い。内面ナナメハケム。	l. s. 橙(2.5YR 6/8)		#
42	#	タガはくずれた三角形。内面はナデ、ナナメハケム。	l. f. 橙(7.5YR 6/6)	2.3	#
43	#	タガはやや突出度の強い楕円形の台形。間隔は約8cm。	l. 橙(5YR 6/6)	2.3	
44~ 48	#	体部小破片。外面タテハケム、内面ナデ又はハケム。タガは47、48を除き突出度は低い。48は円形のスカシ部分の破片。			#
50	円筒底部	大形円筒の破片で、底部径は約33cm。タガはやや扁平な台形。外面タテハケム、内面ナデ(オサエ痕残る)。	l(4)H(4) 橙(5YR 6/8)	2.0	#
51,52	円筒体部	体部小破片。タガはやや突出度の高い台形。	51: f(4)H(4) 橙(5YR 6/8) 52: l. 橙(2.5YR 6/8)	2.0 2.0	3 T 出土。
53	#	やや厚手で、下方部位か。外面タテハケム、内面ナナメナデ。	f. l. 橙(5YR 6/8)	1.8	#
54	形象	付属品と思われるが、器種等不明。幅3.6cm、厚さ1.3cm、断面は隅丸の長方形。表、裏にうすくハケムが残る。	f. s. 橙(5YR 7/6)		#
55	円筒口縁	体部にかけての破片。2と近似した断面形態を示し、外面ナナメハケム、内面ヨコハケム。口縁径約55cmと推定される。	l(4)H(4) 明赤褐(2.5YR 5/6)	2.5	4 T 出土。
56	#	ヨコナデにより小さな凹んだ端面が形成される。	l. s. H(2) 橙(2.5YR 6/8)	1.6	#
57~ 61	#	口縁部小破片。いずれも端部はヨコナデで端面を作り出している。61はその開き方から朝顔形か。外面はタテ(ナナメ)ハケム、内面はヨコハケム。	57: f. H(4) 橙(2.5YR6/6) 58: m.H(2) # (5YR 7/8) 59: s # (5YR 7/6) 60: l.H(2) 明赤褐(7.5YR 5/8) 61: l.H(2) 橙(5YR 6/8)	2.0 2.2 1.5 2.2	#
62	#	口縁直下の破片と思われる。外面タテ、内面ヨコハケム。	s. 橙(5YR 6/8)	2.2	#
63,64	円筒口縁	朝顔形の口縁下方部位。63はタガ直下にスカシがあり穿孔面をナデている。64のタガはやや突出度の高い台形。	63: m. 赤橙(10R 6/6) 64: f. 橙(7.5YR 7/6)	1.5 1.7	#
65	#	朝顔形の口縁下方部位。タガは突出度の高いM字形。外面はナナメハケム、内面もナナメ及びヨコハケムで接合痕が残る。	m. H(2) 橙(5YR 7/6)	1.7	#
66	円筒体部	朝顔形の体部上方部位。タガは扁平な台形で、下方はタテ、上方はナナメハケム。内面はナナメのナデ及びハケム。	l(4)s(4) 橙(5YR 6/8)	1.4	#
67	#	タガは変形した三角形で突出している。外面タテハケム、内面ヨコハケム。胎土、色調等から62と同一個体と思われる。	s. 橙(5YR 6/8)	2.3	#
68	#	タガは扁平でくずれた台形、内面はナナメのナデ。	l. 橙(5YR 6/6)		#
69	#	外面タテ、内面はヨコないしナナメハケム。	橙(7.5YR 7/6)	2.2	
70	#	外面左傾するタテ、内面はナナメハケム。タガは扁平なM字形。	s. 橙(5YR 6/8)	2.3	#
71	#	タガはやや扁平幅広い台形。外面ナナメ、内面ヨコハケム。	l. s. 橙(5YR 6/6)	1.9	#
72	#	タガは狭く小さく丸味を持つ。外面タテハケム、内面ナナメナデ。	s. 橙(2.5YR 6/6)	1.7	#

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/104)	備考
73	円筒体部	タガは幅狭の台形。外面ナナメハケム、内面ナナメのナデ。	l. 明赤褐(5YR 5/6)	2.0	4 T出土。
74	"	縁が三つある特殊なタガを持つ破片。外面ナナメハケム、内面もナナメハケム。オサエ痕、接合痕を残す。	s. H(4)赤(10R 5/6)	2.6	"
75	"	厚手の作りで、上下の遺存状況から、タガがあっても不思議でないが、それがない、形象の一部か。	s. 明赤褐(2.5YR 5/6)		"
76	"	薄手で、タガは扁平で三角形に近い。	s. 橙(2.5YR 6/8)		"
77,78	円筒底部	底部小破片。外面タテハケム、内面ナデ。78は底径が20cm前後と思われ、形象の台部の可能性がある。	77: l. 明赤褐(2.5YR 5/8) 78: l. 橙(2.5YR 6/8)	1.8 2.0	"
79	形 象	象の字形に屈曲する小破片で、形象の一部であろう。	l. 赤褐(10R 6/8)		"
80	"	形象の付属物であろう。断面不整形円形で湾曲している。	m(4)H(4)橙(7.5YR 7/6)		"
81	円筒口縁	やや薄手で、端部はヨコナデで端面を作り出す。	l. 橙(7.5YR 7/6)	2.2	5 T出土。
82~ 88	円筒体部	体部小破片。87はスカシ部分。タガは、87、88がやや突出度が強い。外面タテハケム、内面ナデ又はハケム。			"
81,82	円筒底部	底部小破片。81は径が20cm前後と小さく形象の台部の可能性あり。81は外面タテハケム、内面ナデ。82は内外タテハケム。	81: l. s. 橙(2.5YR 7/8) 82: m(4)橙(7.5YR 7/6)	2.0 1.6	"
83	形 象	厚さ1cm強の板状で、器等の一部であろう。表はナナメ、裏はタテにナデ。黒縁部分はヨコナデで仕上げている。左下部分はへら状工具で内面に切込みが認められる。	f(4)s(4)H(5) 明赤褐(2.5YR 5/8)		"
84	形 象	器種、部位不明。板状で表はハケム、裏はナデ。	s. に近い橙(5YR 7/4)	2.2	"

伝境丘出土遺物

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/104)	備考
1	円筒口縁	外方に屈曲して開き、ヨコナデで端面を形成する。口縁径約48cmと大形。外面ナナメハケム、内面ナナメナデ。	m. 橙(2.5YR 6/6)	2.6	
2	円筒体部	径が22cm前後と形象の台部の可能性あり。外面タテ、内面ナナメハケムで接合痕顕著。タガは小さく、扁平な台形。	m. H(2)橙(7.5YR 7/6)	1.5	
3	"	径約44cmと大形。外面タテ又はナナメハケム、内面ナナメハケムで接合痕残る。	m. s. H(4) 橙(2.5YR 7/8)	1.6	
4	"	径約18cmと形象の台部の可能性が高い。外面タテハケム、内面ナナメにナデ。タガは扁平なM字形。	f. s. 赤(10R 4/6)	2.1	
5	"	薄手で円形のスカシが認められる。タガは扁平なM字形。タガ直下で直径約28cm。外面タテハケム、内面ナナメナデ。	f(5)橙(5YR 7/4)	2.6	
6	"	外面タテ、内面ナナメハケム。直径約36cm。	m. s. に近い橙(5YR 7/4)	1.8	
7	"	直径20cm前後。タガは扁平なM字形。	m. s. H(4)赤(10R 5/6)	2.1	
8	"	朝顔上位部分。外面タテハケム、内面ヨコにナデ。	m. s. 橙(2.5YR 7/6)	2.7	
9,10	"	60年度4 T74と同様のタガ形態。内面ナナメハケム。	9: m. s. 橙(2.5YR 6/6) 10: m. H(2) # (5YR 7/6)	2.7	
11	円筒底部	外面タテハケム、内面ナナメナデ。タガは三角形で突出。	m. 橙(5YR 7/8)	2.2	
12	"	外面ナナメハケム、内面ナナメナデ。底径約33cm前後。	m. s. 橙(5YR 7/8)	1.8	

II 埼玉1〜7号墳の調査

一 調査に至る経過

埼玉県教育委員会は昭和四四年一月、埼玉古墳群の測量図を作成するため、航空写真撮影を実施した。この写真には稲荷山古墳の長方形の周堀と共に、丸墓山古墳南方の、二子山古墳との間の地区に、数基の小形の円墳の周堀が丸く写し出された。

この地区はすでに土採取が行われ、水田として利用されていた部分が多く、いづれも、現状では墳丘の認められないものであった。しかし、同地区には宅地として利用されていた天王山古墳や、昭和一〇年頃まで墳丘が遺存していたといわれるポッチ山古墳が知られており、現在東京国立博物館に所蔵されている水鳥埴輪も、この付近の出土とされ、こうした円墳跡への考古学的関心が強まった。

その後、同地区での、風土記の丘の整備計画が具体化するに及んだので、これらの円墳跡を事前に確認するはこびとなった。

調査は整備予定地内の写真に写ったもの及び言い伝えなどで、存在の推定されたもの七基、それに宅地化され、方墳状を呈していた天王山古墳の、都合八基を対象とした。

古墳の名称は、すでに名称のあった天王山古墳を一号墳として梅塚古墳を二号墳、以下は単に「埼玉〇号墳」として調査を実施することにしたが、最

終的に確認し調査したのは七基である。

調査は天王山古墳から古墳の名称番号順に、昭和四九年一月一日から開始し、翌昭和五〇年一月一八日、七号墳の調査完了で、全調査を終了した。

二 調査の経過

天王山古墳（埼玉一号墳）

昭和四九年一月五日〜七日

墳丘上に第1〜3の各トレンチを設定し発掘を開始する。方墳状に墳丘が遺存しているので、併行して墳丘測量図を作成する。

昭和四九年一月八日〜一二日

第1トレンチをローム層上面まで掘り下げる。墳丘の最高部分からは、約二メートルである。（第2、3トレンチは、表土から約一メートルの掘り下げに留める。）

墳丘西から北側にかけての周堀確認のため、第4〜7トレンチを設定する。昭和四九年一月一三日

第4〜7トレンチで周堀を確認する。その状況からすると、周堀は円弧を描くものと判断され、天王山古墳は方墳ではなく、円墳を削平して四角にならし、宅地としていたことが判明した。

東側周堀確認のため、第8〜10トレンチを設定。

昭和四九年一月一四日〜一九日

第8〜10トレンチを掘り下げ、各トレンチ内で周堀を確認する。第8トレンチ内では、周堀中央がやや窪んで深くなっている。第9、10トレンチでは墳丘に所在した宅地の排水路と考えられる擾乱があり、第9トレンチでは周

堀内側の立ち上り部分を破壊している。

昭和四九年一月二〇日～二一日

第6トレンチを南に延長、堀内側立ち上りを確認。各トレンチの土層断面図を作成し、ひととおりの調査を終える。

昭和五〇年一月九日

古墳南の水路の反対側に第11トレンチを設定し補足調査、堀外方立ち上りを確認した。

梅塚古墳(埼玉二号墳)

昭和四九年一月一九日～二〇日

梅塚古墳の推定地に、直交する二本のトレンチ(第1、2トレンチ)を設定し調査を開始。各トレンチにより分割される堀の四分円部分を、それぞれA～D区とし、この中ほどこにさらにサブトレンチを堀と直交するよう設定して、その検出に努めた。

昭和四九年一月二一日～二二日

C区堀底から土師器埴(一点)と杯(二点)、須惠器杯(六点)が出土、図と写真に記録し取上げる。D区からは男子人物埴輪が出土。同じくD区では周堀が掘り残され、ブリッジが存在していることを確認する。

昭和四九年一月二四日

C、D区の堀の検出を終了する。同区内では堀底に粘土が堆積している。

D区出土の男子人物埴輪の周辺から同埴輪のものと思われる胸や大豆良部分が出土。同じくD区から須惠器の壺の破片がややまとまって出土した。

一月二六日～二七日

A、B区での堀の検出作業を終了したが、A区ではこれを明瞭に確認できなかった。また、B区ではD区同様、堀が掘り残されブリッジが存在する。

B区では、C、D区と同様、堀底に粘土が堆積していた。B区堀底から鉄製品出土する。

一月二八日

周堀覆土の除去を完了し、全体を写真撮影。実測を一部残し、調査終了。

埼玉三号墳

昭和四九年一月二六日～三〇日

東西、南北に直交するトレンチを設定し発掘開始。堀の西の部分と考えられる位置から土師器杯が出土。

一月四日

堀のプラン確認後覆土除去を開始。

一月五日～六日

周堀覆土の除去を終了し写真撮影。平面図、断面図を作成し調査を終了する。

埼玉四号墳

一月二八日

東西に直交するトレンチを設定し調査を開始。梅塚古墳と同様A～D区に地区区分する。

一月二九日～十二月三日

D区で周堀を掘り残したブリッジを検出。A区の大部分とB区内では周堀が浅くなってしまったため検出できない。

A区、D区周堀内から土師器杯出土。

一月五日～六日

周堀覆土除去終了。写真撮影終了後、平面図、断面図を作成、調査を終了。

埼玉五号墳

一月五日～八日

東西、南北にトレンチを設定し、調査開始。各所で埴輪片の出土多い。

一月二一日

周堀のプランを略確認。西部は周堀を掘り残してブリッジを造り出す。

一月二二日～二五日

周堀の覆土除去する。ブリッジ東の周堀内から、三个体分の円筒埴輪が出土。また、ブリッジ西側の周堀内からも多数の埴輪片が出土し、北東部の周堀内からも円筒埴輪片や土師器杯が出土した。

一月二七日～二八日

周堀覆土の除去を終え、写真撮影、平面図、断面図を作成し、調査終了。

埼玉六号墳

一月五日～八日

東西、南北にトレンチを設定し、調査を開始する。

一月二二日～二四日

周堀はその西の部分しか遺存していない状況が明らかとなった。この部分

には、周堀を掘り残したブリッジがあるが、その南の周堀内から土師器杯が二个体出土した。

一月二五日

周堀覆土除去後、写真撮影。平面図断面図作成し、調査を終了する。

埼玉七号墳

一月二四日～二九日

東西、南北にトレンチを設定し、調査を開始。東西に走る道路の北側と南に接して周堀を検出する。

一月二〇日～二二日

周堀の北から東側部分は確認できなかった。西部には周堀を掘り残したブリッジがあり、北側の周堀中から土師器杯が出土した。

昭和五〇年一月一八日

周堀の発掘を終了し、写真撮影及び実測を行い調査を終了する。

三 丸墓山南方円墳群の概要(第23、24図)

埼玉古墳群には、前方後円墳ばかりでなく円墳も構築されている。その数は推定を含め、現在群全体で約三五基、稲荷山古墳の周辺、奥の山古墳の西方、それに、すでに消滅した若王子古墳東方の三箇所に比較的まとまって所在している。それらは、直径一〇五以上の丸墓山古墳を別格とすれば、周堀を含めても直径四〇以上にも満たない、小規模なものがほとんどである。今回報告するものを除けば、調査されたものほとんどなく、耕作などのため開

聖され酒減してしまっており、墳丘を留めるものも数少ない。内部主体についても、稲荷山古墳北東三五〇に所在する白山古墳（直径約五〇）が墳丘に露出する石材や、その付近の土採取をしたという周辺住民の話から横穴式石室であることが確実で、中の山古墳東方に隣接して所在していたという戸場口山古墳が石棺の出土を伝えるほかは不明である。

本書で報告するのは、丸墓山、稲荷山、二子山の各古墳に囲まれる地域に立地する一〇基の小規模古墳中の七基で、その概要は下表にまとめておく。なお、各古墳の名称については、天王山古墳が、天王神社がかつて所在したことによるほか、梅塚古墳は、かつて聖徳太子の倉人、調子廬が植えたといわれる白梅があったためである。ポッチ山古墳は、墳丘の遺存状況を示した名称であろう。このほかの、数字を冠したものは、天王山、梅塚古墳を1、2号古墳として、以下調査の順に付した便宜的なものである。

〔註〕「忍名所図會」にはこの梅を丸梅と呼び、「史蹟埼玉」はこの梅の植わっていた古墳を梅塚と呼称するが、本書では、地元と呼称などから梅塚として報告する。

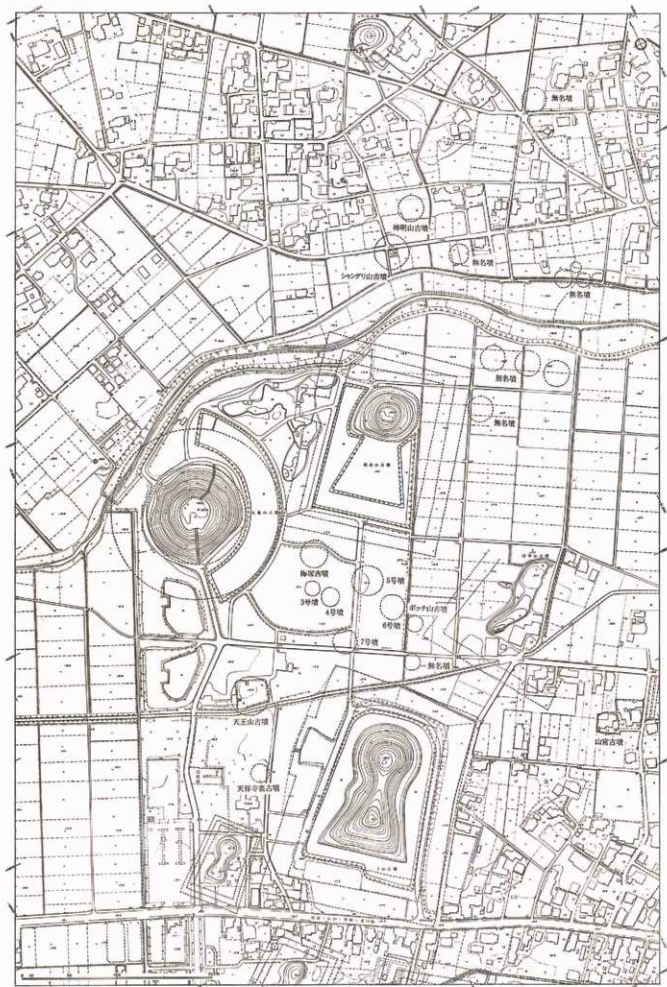
岩崎長春『増補忍名所図會』天保六年七月（昭和六一年九月）行田郷土文化会刊

高木豊三郎『史蹟埼玉』埼玉村教育會、昭和一年一〇月

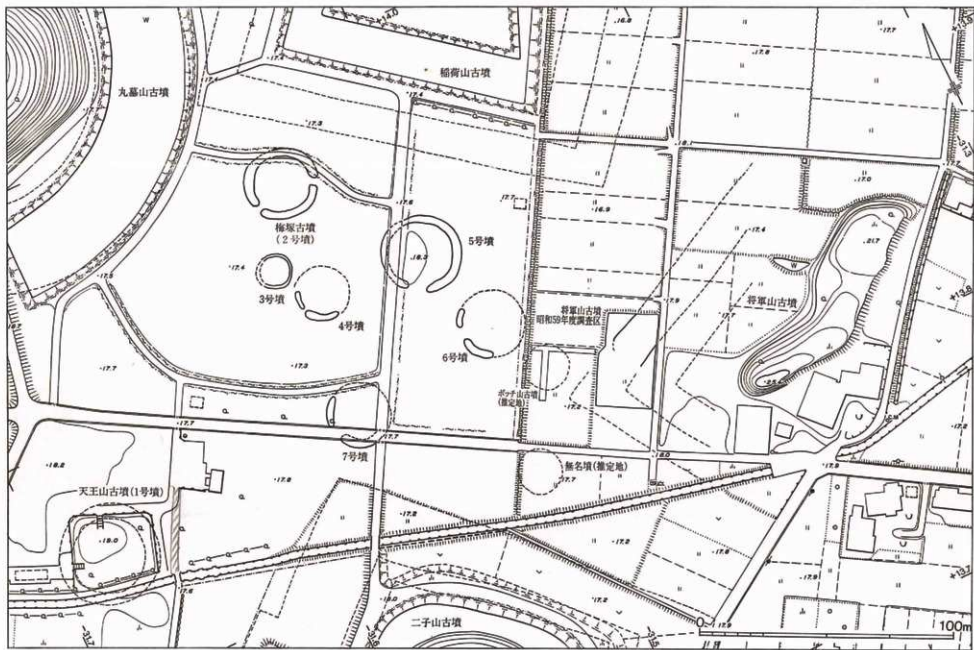
丸墓山南方円墳群一覽

No.	名 称	墳 形 規 模	出 土 遺 物	備 考
1	天王山古墳 (埼玉1号墳)	円墳 直径27m 高さ1.2m	埴輪(円筒, 人物), 土師器	昭和49年度調査 主体部不明, 方墳状に現存
2	梅塚古墳 (埼玉2号墳)	円墳 直径23.5m 周堀2箇所ブリッジ	埴輪(円筒, 人物), 土師器, 須恵器, 鉄製品	昭和49年度調査 周堀のみ遺存, 主体部不明
3	埼玉3号墳	円墳 直径12.5m	埴輪(円筒, 形象), 土師器	〃
4	4号墳	円墳 直径17.5m(推定) 周堀1箇所ブリッジ	埴輪(円筒, 人物, 馬), 土師器	昭和49年度調査 周堀一部遺存, 主体部不明
5	5号墳	円墳 直径26m 周堀1箇所ブリッジ	埴輪(円筒, 人物, 馬), 土師器	昭和49年度調査 周堀のみ遺存, 主体部不明
6	6号墳	円墳 直径22~22.5m(推定) 周堀1箇所ブリッジ	埴輪(円筒, 形象), 土師器	昭和49年度調査 周堀一部遺存, 主体部不明
7	7号墳	円墳 直径21~22m(推定) 周堀1箇所ブリッジ	埴輪(円筒), 土師器	〃
8	ポッチ山古墳	円墳 直径15~20m		昭和10年頃崩平
9	無名墳	〃		墳丘は現存しない
10	天祥寺裏古墳	円墳 直径約25m	円筒埴輪片多数(周堀内)	昭和56年度 行田市教育委員会 一部調査(未報告)

※ No. 1~7 は本書にて報告。



第23図 丸墓山古墳周辺の円墳分布状況



第24图 丸墓山南方円墳群分布图

四 調査の成果

(一) 天王山古墳(墳五一号墳)

遺構(第25、27図) さきたま風土記の丘設置の昭和四二年以前は、宅地であった。このため墳丘は一辺約二六メートルの方墳状を程し、最高部は標高一九・五三メートル、周囲の水田面は一七・四一五メートルなので約二メートルの比高差があった。調査は、墳丘上に主体部確認用のトレンチ三基(第一、二、三トレンチ)と墳裾部分に周堀確認用の八基(第四、五、六、七、八、九、十、十一トレンチ)を設定して行った。

この結果、墳丘は方墳状に遺存するが、周堀の平面形から、直径約二七メートルの円墳と判明した。周堀は墳丘の北と東の第6、第9トレンチで幅が七メートルを超えるが、他の部分では五・七メートル前後であり、周堀の外側での計測では直径は三九・五メートルとなり、周堀の深さは、墳丘の西から北にかけては、確認面のローム層上面から約二〇、四〇センチだが、東の第8、9トレンチ付近では約八〇センチとやや深い。南側の周堀は農業用水で破壊されているものと思われる。墳丘部分は、黄褐色のローム(上面の標高は一七・四一五メートル)上の暗褐色土(第8層、旧表土層か)を基盤としており、その上が盛土である。墳丘はこの基盤面から約一・五メートル程残存しているもの、上部は宅地化に際して相当削られて変形しているものと判断された。このためか、墳丘部分でのトレンチでは、主体部は検出されず、すでに破壊されてしまったものと思われるが、粘土層系の主体部の可能性はある。

遺物(第35、36図) 出土遺物は、埴輪片と土師器片があったが、いずれも破片で周堀覆土中の出土である。埴輪は普通円筒のほか、朝顔形の破片も

あった。1、4は直径などから四段タガの普通円筒の可能性はある。外面は全てタテハケメで仕上げ、ヨコハケメは認められない。口縁部はヨコナデして端面を作り出し、タガは偏平な台形又はM字形を基本とする。スカシは円形のものがあるが確認できた。円筒のほか、甕をかぶった人物の頭部や腕の破片があった。土師器の脚の破片は五領式期のもので、本墳に伴うものではない。

(二) 梅塚古墳(墳五二号墳)

遺構(第28、29図) 丸墓山南方の小円墳群のうちでは最も北に位置する。付近の標高は一七・四メートル、水田に利用されていた地区にあって墳丘は全く失われており、周堀のみが検出された。主体部については、もれ論不明である。直径は周堀内側の計測で二三・五メートル、周堀を含めた直径は二八・二九・五メートルである。周堀は幅二・四・四メートル、北の部分で浅くなり途切れている。断面は浅深はあるが、舟底状を程しており、黒色土が堆積するが、底に粘土が堆積する場所があり、水が溜っていた時期があったことを示している。東南のものには内幅二・三メートル、外面三・五メートルで外開きの台形状、西南のものには内幅二・四メートル、外幅四・六メートルでやはり外開きの台形状である。

遺物(第37、41図) いずれも周堀内の出土である。

埴輪は普通円筒のほか、朝顔、人物などがあった。円筒は外面をタテハケメ、口縁部は外反させて端面を作り出し、ヨコナデで仕上げている。45、48など体々底部の遺存の良いものからすると二段タガの小形品で、器高は三五・四〇センチ弱のものが多いのではなからうか。タガは偏平な台形やM字形、三角形のものもあり、粗雑な部分も多い。スカシは円形のもの認められた。54の人物埴輪は西側の周堀底から、頭を東に向け、仰むけの状態出土したもので、ほぼ完形である。このほか55、56のように美豆良や57、58のように

人物の佩刀と考えられるものもあり、複数個体の人物埴輪の樹立が考えられる。また、59、61は大刀形の玉飾りの、62は馬形の鈴飾りの可能性がある。

土師器埴(65)、杯(66、67)、須恵器杯(70、75)が、東南の周堀底から出土したが、その状況から、同所での祭祀行為に用いられた可能性が強い。いずれも鬼高式の古い段階のものである。須恵器杯は蓋杯で三セットあり、そのほか、甕の口縁部破片(68)や四窓スカシの高杯脚破片(76)など、古い要素を有するものもあった。このほか、鉄製品が3点あるが、用途は不明である。

(三) 埴五三号墳

遺構(第30、31図) 梅塚古墳の西南約三五メートルに位置し、周堀内側で、直径一二・五メートル、外側の計測でも一四・五メートルと今回調査した古墳中最も小規模である。水田耕作されていた地区で、耕作土表面の標高は一七・三メートル、その下に遺構確認面のロームが存在し、その上面は一七・〇メートルである。埴丘盛土は全く認められず、主体部も不明である。周堀は幅八〇メートル、一メートル、ローム検出面から、一五メートルで、断面は台形状である。

遺物(第42図) 円筒、形象埴輪片が出土したが、点数は少ない。また、土師器杯(4)が一点あり、ほぼ完形で、形態、法量は、梅塚のものに近い。

(四) 埴五四号墳

遺構(第30、31図) 三号墳の南東に隣接して所在する。東へ北西側の約半分強の周堀は浅くなり検出されなかった。埴丘盛土、主体部とも発見されていない。直径は周堀内側で約一七・五メートル、外側で二一・五メートルと推定される。検出された周堀の西の部分に、ロームを掘り残したブリッジが造り出され、内幅一・六メートル、外幅二・九メートルの台形状を呈する。周堀は幅一・五メートル、七メートル、

で、ローム検出面から深いところで約三〇メートル、断面は舟底状を呈する。

遺物(第43図) 周堀覆土中から埴輪及び土師器が出土した。埴輪は円筒や、人物(16)、馬形と思われる破片(17、20)がある。円筒は二段タガの小形品と思われるが、いずれも破片で出土点数は少なかった。タガは粗雑な作りのものが多い。

土師器は六個体あり(21、26)一点は小破片だが、他は全体の形状が十分わかるまでに復原できた。細部に各個体に差異があるが、いずれも鬼高式の古い段階のものであろう。ブリッジの南と北で周堀内に落ち込む形で出土した。

(五) 埴五五号墳

遺構(第31、32図) 梅塚古墳の東南約四〇メートルに所在しており、西北から西南にかけて、稻荷山古墳に至る道路の下になっている。

本墳も周堀のみの遺存で、盛土、主体部とも全く残っていない。付近の標高は一七・三メートル、遺構確認面のローム上面は一七・〇メートル、一七・一メートルである。

直径は周堀の内径で二六メートル、外径で三一・五メートル、五メートル、丸墓山南方の小円墳群では天王山に次ぐ規模である。周堀は北東部分がやや広く、幅三・三メートル、その他の部分はおおむね三・〇メートル前後で、最も狭い部分は二・六メートルであり、ほぼ全周して発見された。断面については舟底状を呈し、深さは、遺構検出面であるローム面から三〇メートル強の深土がある。覆土には、黒色土、暗茶褐色土、ロームロックを含む茶褐色土が堆積していた。

周堀には、その南西部がロームを掘り残してブリッジが造り出されている。内幅は七メートル、外幅七・九メートルで、やや外開きになるように意識されている。天王山古墳は不明と言わざるを得ないが、他の梅塚以下の各古墳との比較では

本墳のブリッジが最も幅広く、古墳の規模を反映したものと考えられる。

遺物(第44、48図) 本墳からは埴輪及び土師器が出土した。埴輪は道路西側の周堀中から円筒埴輪の全体のわかる個体(1、2)の出土があり、ブリッジ付近でも口縁部の全周するものが何点か出土した。今回、調査した一七号墳中、最もまとまった出土量である。円筒埴輪は二段タガのもので、器高は四二〜四三センチメートル、口縁径二五〜二九センチメートル、底径一三〜一五センチメートルで、外面はタテハケメ、内面は主にタテ方向のナデに加え、ナナメのハケメ、口縁部は外反させ端面を作り出しヨコナデで仕上げている。スカシは円形(正確には不整形円形と言ふべきだが)であり、口縁部内、外面に焼成前のヘラ書きによる窠印「X」(1、11)、「6、8」の描かれたものがあった。形象では馬形(51〜54)、人物(55〜57)、家形(50)と思われる破片もあった。土師器杯(81)は口径が一八・八センチメートルと大形である。

(六) 埴五六号墳

遺構(第33図) 五号墳の東南に隣接して所在し、以前に、県指定の「水鳥埴輪」の出土したと伝えられる古墳である。

西側の周堀が部分的に検出されただけで、盛土、主体部など、全く遺存していない。遺構検出面であるローム面の標高は約一六・二メートルであった。直径は、周堀の遺存があまり良好でないので、推定がむづかしいが、周堀内径で約二二〜二二・五メートル、外径で二六・五〜二七メートルと考えられ、梅塚古墳よりはわずかに小形である。周堀は、幅一・七〜二・四メートルで、舟底状を呈しており、遺存の良好な部分でローム面から二〇〜二五センチメートルである。この周堀の西側部分には、ロームを掘り残して幅五・六メートルの方形のブリッジが造り出される。

遺物(第49、50図) 周堀内から埴輪及び土師器の出土があった。

円筒は、1、2、10、15などの大形の破片からすると、器高約三三〜四センチメートル位のもが主体かと思われ、朝顔の破片もある。タガは二段で、扁平なものが多く、突出度もあまり大きくない。スカシは円形のもが確認できた。円筒以外では形象の台部(21、あるいは16もそうか)や、玉(あるいは鈴)飾り(22)と思われる破片もあった。

土師器では、完形の杯一点と、器形わかる杯二点(23、25)があった。小形化が見られる点や口縁の外反度がやや大きいのは、二号墳、四号墳のものより新しい要素であろう。

(七) 埴五七号墳

遺構(第34図) 五号墳の南西約五〇メートル、稲荷山古墳に通じる道路と東西に直交する市道の交差点に所在する。四号墳や六号墳同様、周堀の西側部分の一部確認されたもので、墳丘盛土、主体部も検出されていない。遺構検出面であるローム上面の標高は一七・二メートルである。古墳の直径は周堀内径で約二一〜二二メートル、外径で二六〜二七メートルと推定され、周堀の幅は二〜三・五メートル、六号墳同様、西部を、ロームを掘り残してブリッジを造り出しているが、その南の部分は、道路下となり不明である。

遺物(第51図) 遺物は、周堀内から埴輪片及び、土師器杯が出土したが、三号墳同様量的には極めて少ない。

五 ま と め

—各古墳の築造時期とその性格—

調査された七基の古墳(跡)から、埴輪、土師器、須恵器が出土している。埴輪は全ての古墳から出土したが、それらの普通円筒を観察すると、二段タガの小形品が主体である。その形態や製作上の特徴から、川西編年のV期の古い段階に位置付けることができる。

土師器については、天王山古墳を除く各古墳で、須恵器を模倣した杯が出土しており、多くは古式の鬼高式土器である。梅塚古墳及び第3、4、7号墳のものは、法量、形態から、同一型式と認められる。ほぼ垂直な体部や、忠実に口縁端面を作り出す点は、陶色編年の第1期後半の杯の模倣と考えられる。第6号墳の完形品(23)は、やや小形化しており、陶色編年第1期末の杯の小形化現象を反映したものとすれば、やや新しくなる要素をもっている。

第5号墳のものは、陶色編年第II期初頭の大型化した杯を模倣したと思われる、さらに新しく考えてよいであろう(このことは、第5号墳のブリッジが他の古墳のものより南に偏った位置にあり、築造時期の差の反映として考え合わせることができる)。

古墳の具体的な時期は、梅塚古墳出土の須恵器で伺い知ることができる。

同古墳からは甕及び蓋杯が出土したが、蓋杯は法量、立ち上り部分の形態などから、陶色編年の第1期末、TK47型式と判断される。そして、甕は、体部内面にタタキメをナデ消す比較的古い製作技法が認められるものの、体部

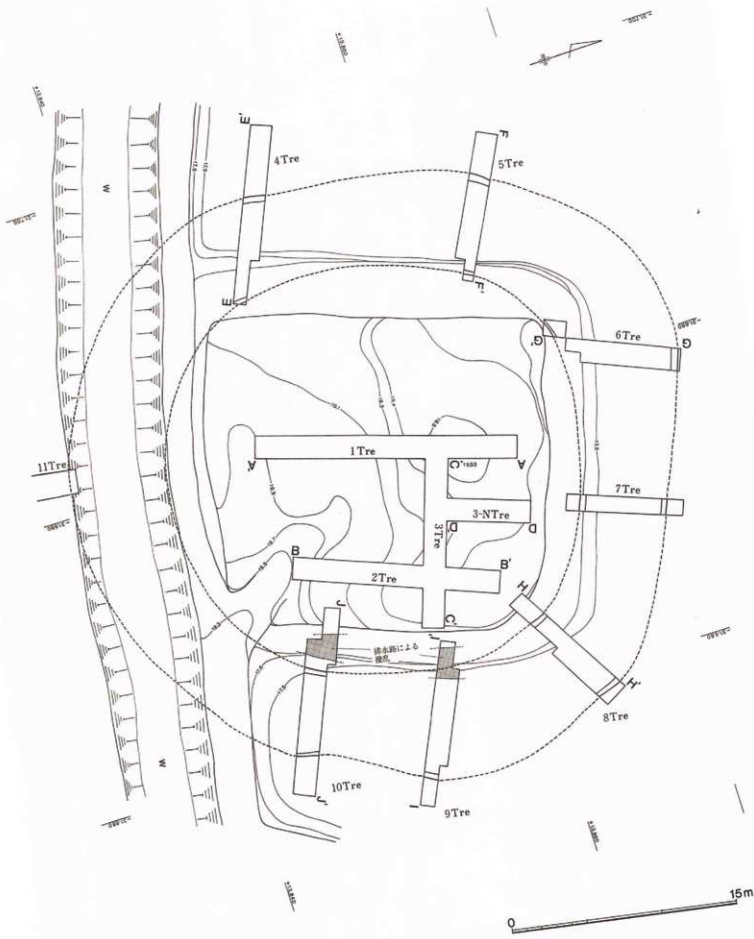
外面の平行タタキや頸部が無文などの様相から、同期の所産としてよいであろう。

以上の須恵器は、古墳の埋葬時の祭祀に用いられ、放置(放棄)されたもので、型式の年代観は、六世紀前葉と考えられているが、これが古墳の築造時期を示すものとして考えると合併した土師器杯の年代も、この須恵器から、その製作年代がおさえられる。

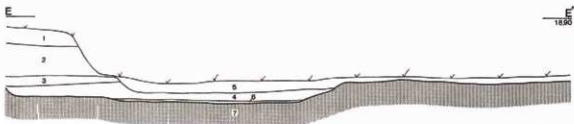
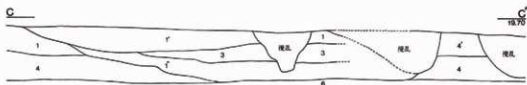
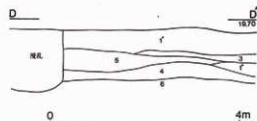
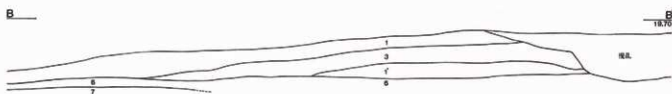
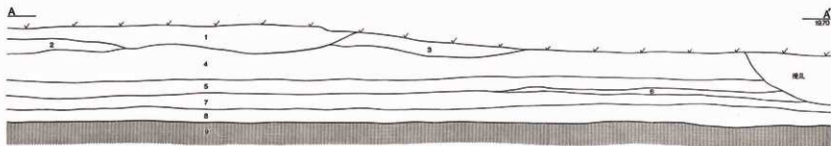
梅塚古墳の須恵器による年代比定によれば、出土埴輪の様相から同時期と思われる天王山古墳を含めた七基は、六世紀前葉頃に相次いで築造されたことになる。この時期は、埴玉古墳群内の大型古墳では、稲荷山古墳が出現した直後で、あるいは、丸墓山古墳や二子山古墳の築造と重なるかという時期である。時間的に、また、位置的に近接すること、そして古墳の規模からすると、大型古墳に葬られた埴玉古墳群の最高首長層を交えた小首長の墳墓と考えるとよいだろう。

(註)

- 1 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』64-12 日本考古学会 昭和五三年九月
- 2 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 昭和五六年七月
- 3 このほか、高杯脚破片は、短脚四方スカシと古い要素を持つが、かなり磨滅しており、確実に古墳に伴うと判断できない。



第25図 天王山古墳平面図



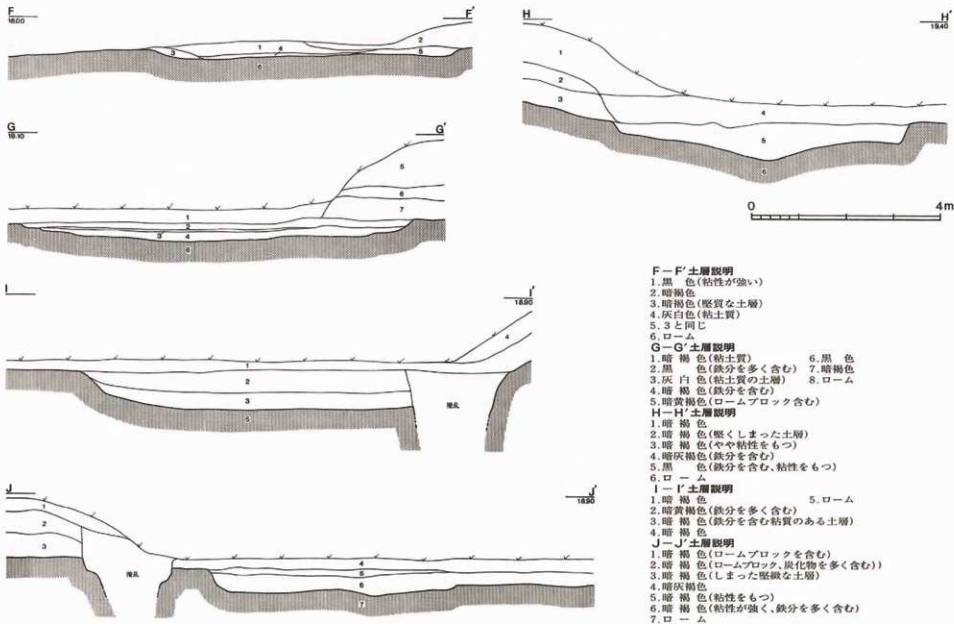
A-A'、B-B'、C-C'、D-D' 土層説明

1. 黄褐色(ロームブロックを含む)
- 1'. 黄褐色
- 1''. 黄褐色
2. 黄褐色(1に比べて暗い)
3. 暗褐色(ロームブロックを含む)
4. 暗褐色(土質は堅くしまっている)
5. 黒色(土質は堅くスコップを入れると縦にわれる)
6. 黒色(5に比べるとやや明るい)
7. 灰褐色(土質は緻密で堅くしまっている粘土質)
8. 暗褐色(土質は緻密で堅くしまっている粘土質)
9. ローム(黄褐色ローム)

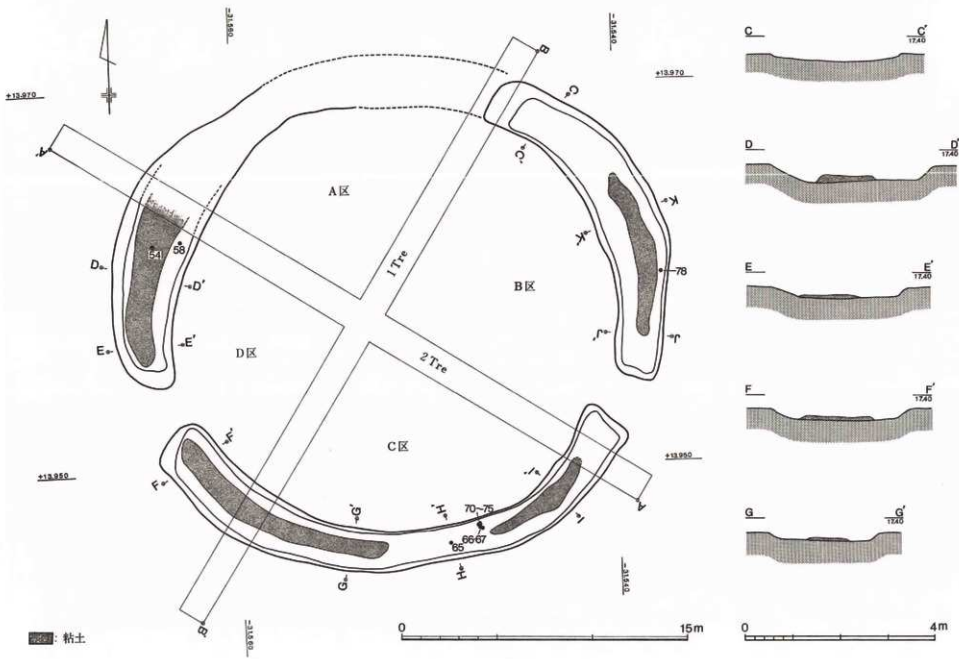
E-E' 土層説明

1. 暗褐色(ロームブロック、炭化物を多く含む)
2. 暗褐色(ロームブロックを含む)
3. 暗褐色(堅緻な土質)
4. 黒色(堅緻な土質、堆積出土層)
5. 暗褐色(ロームブロックを含む、動かされ持ち込まれた土層)
6. 灰褐色(粘性に富む)
7. ローム

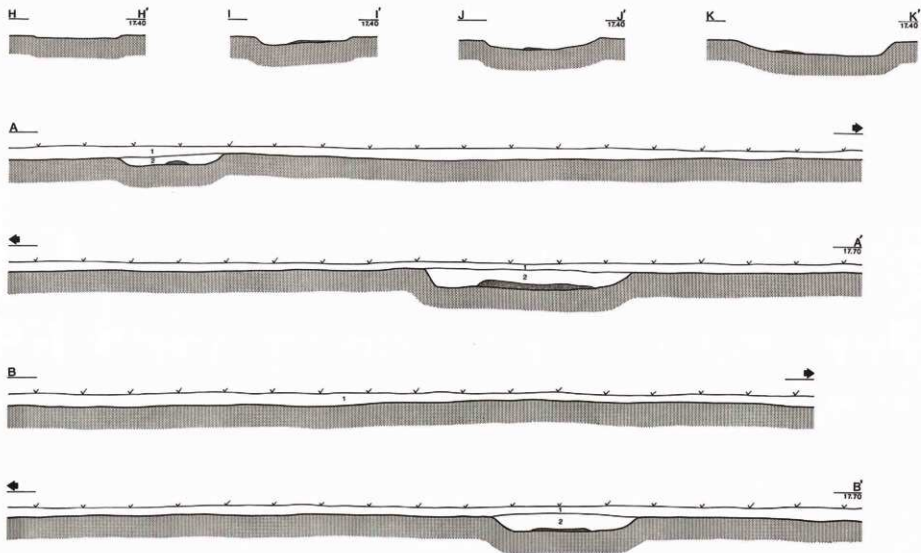
第26図 天王山古墳第1~4トレンチ土層断面図



第27図 天王山古墳第5~10 トレンチ土層断面図

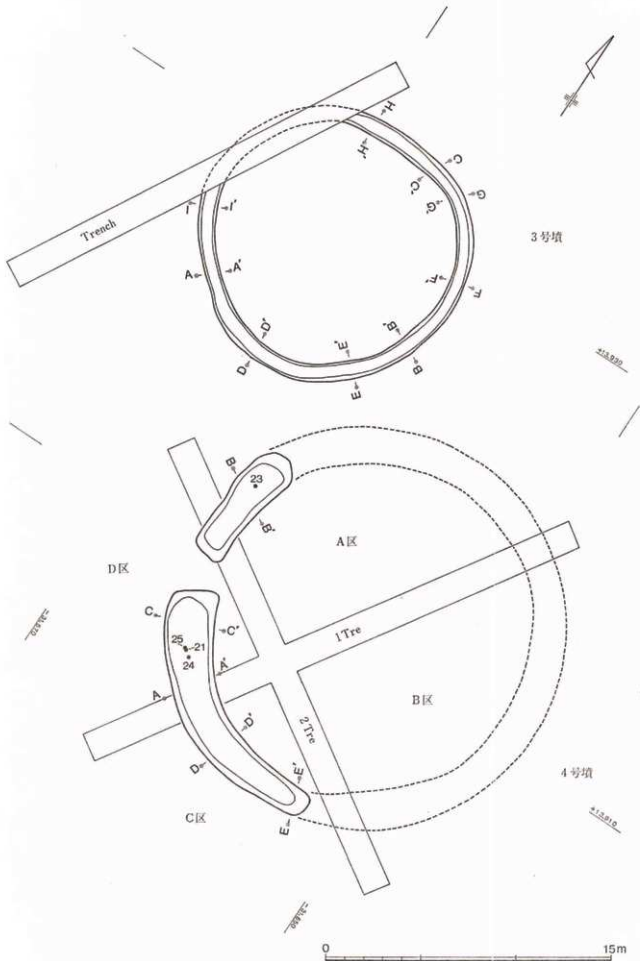


第28图 梅塚古墳(埼玉2号墳)平面图及び断面图



A-A'、B-B' 土层说明

1. 灰褐色(鉄分を含む)
2. 黑色(鉄分を含む)



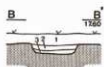
第30图 埼玉3号墳及び4号墳平面図

3号墳土層断面



A-A' 土層説明

1. 耕作土(灰褐色)
2. 灰褐色(ローム小ブロック、鉄分を含む)
3. 茶褐色(ローム小ブロック、鉄分を含む)



B-B' 土層説明

1. 耕作土
2. 灰褐色
3. 茶褐色



C-C' 土層説明

1. 耕作土
2. 黒色(鉄分を含む)
3. 黄褐色(ローム小ブロックを含む)



4号墳土層断面



A-A' 土層説明

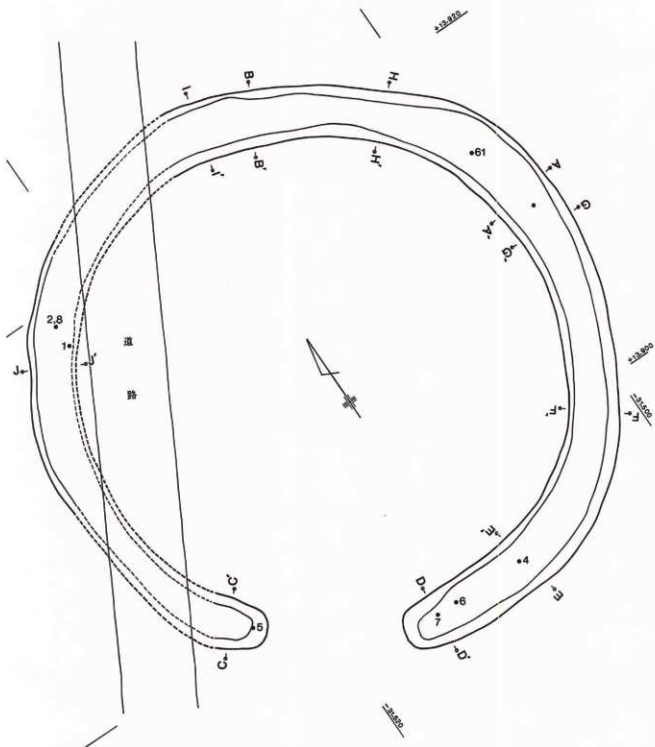
1. 耕作土
2. 暗褐色(鉄分を含む, 3と比べて, 黒味が強い)
3. 暗褐色(鉄分を含む)



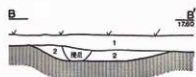
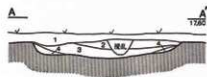
5号墳土層断面



第31図 埼玉3, 4, 5号墳土層断面図



0 15m



0 4m

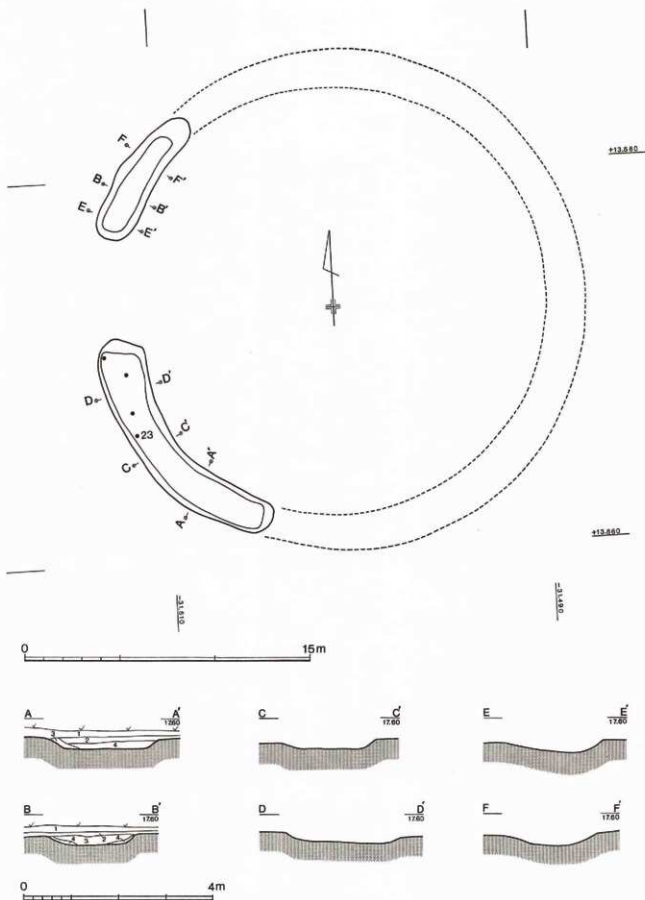
A-A' 土層説明

1. 耕作土
2. 黒色
3. 暗褐色
4. 茶褐色(ロームブロックを含む)

B-B' 土層説明

1. 耕作土
2. 暗褐色

第 32 図 埼玉 5 号墳平面図及び土層断面図



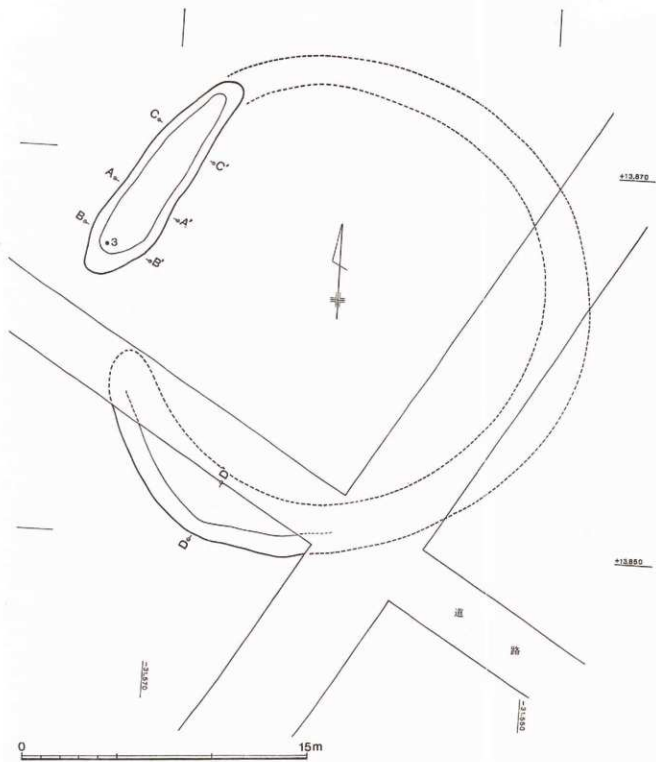
A-A' 土層説明

1. 耕作土
2. 灰褐色(耕作土)
3. 茶褐色(ロームブロックを含む)
4. 暗褐色(鉄分を少量含む)

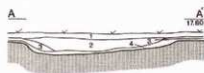
B-B' 土層説明

1. 耕作土
2. 灰褐色
3. 暗褐色
4. 茶褐色(鉄分を含む)

第 33 図 埼玉 6 号墳平面図及び土層断面図



0 15m



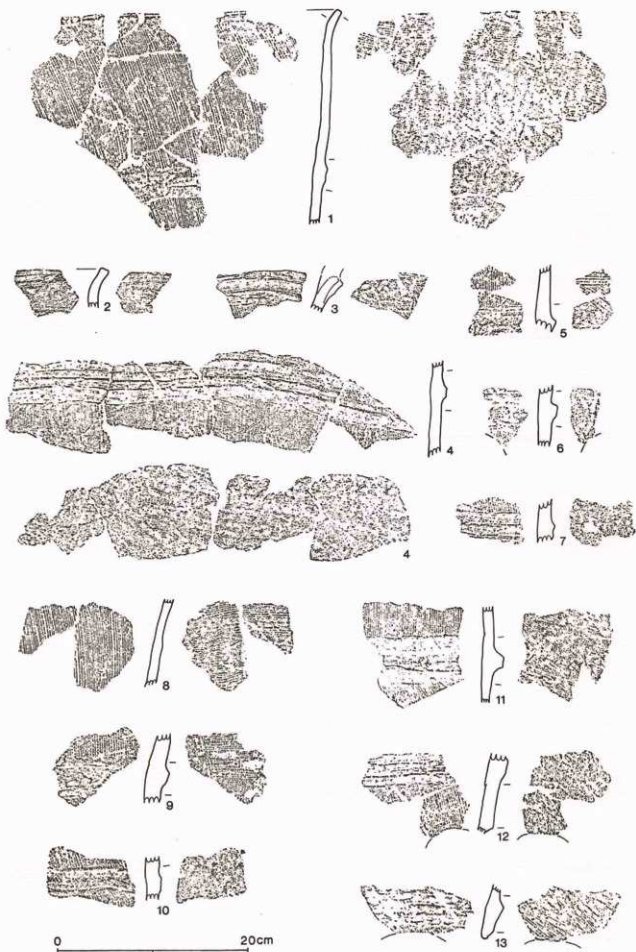
0 4m



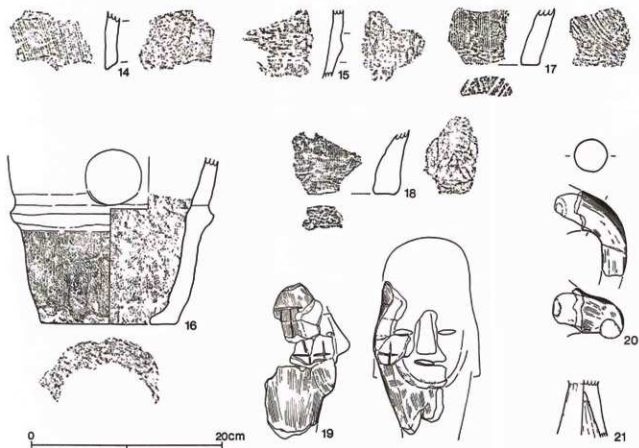
A-A' 土層説明

- | | |
|----------------|---|
| 1. 表土(耕作土) | 3. 暗茶褐色(2の土層にローム粒子が混入)
(2より明るく粘性が弱い) |
| 2. 黒色(粘性が特に強い) | 4. ロームブロックと暗褐色の混合土 |

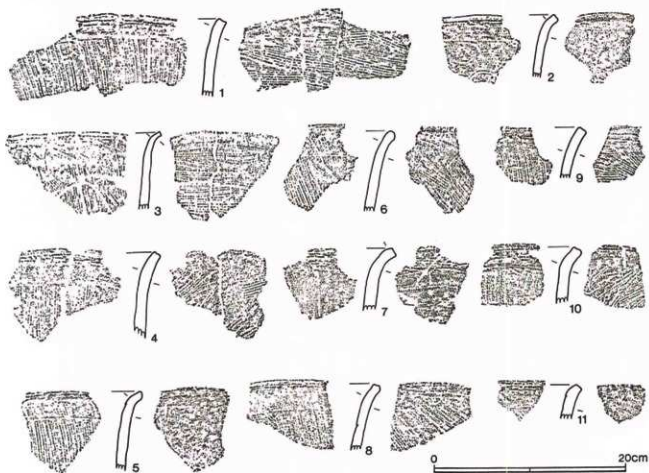
第34図 埼玉7号墳平面図及び土層断面図



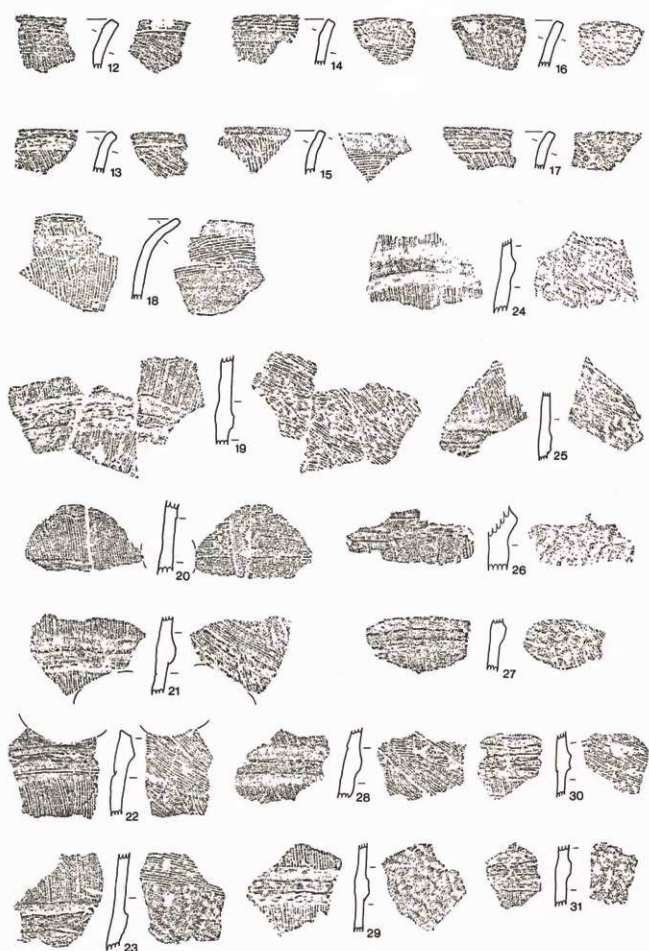
第35图 天王山古墳(埼玉1号墳)出土遺物



第36图 天王山古坟(埼玉1号坟)出土遗物



第37图 梅塚古坟(埼玉2号坟)出土遗物

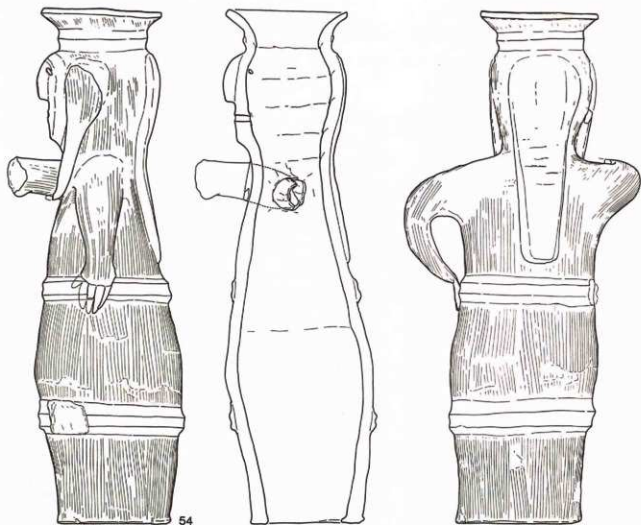


0 20cm

第38图 梅塚古墳(埴玉2号墳)出土遺物



第39图 梅塚古墳(埼玉2号墳)出土遺物



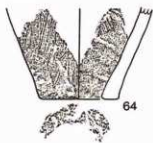
65



55



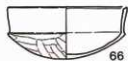
56



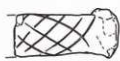
64



63



66



57



58



67



59



60



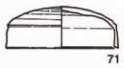
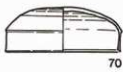
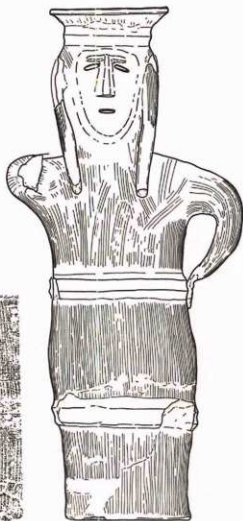
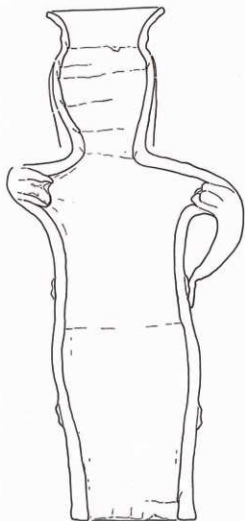
61



62



第40图 梅塚古墳(埼玉2号墳)出土遺物

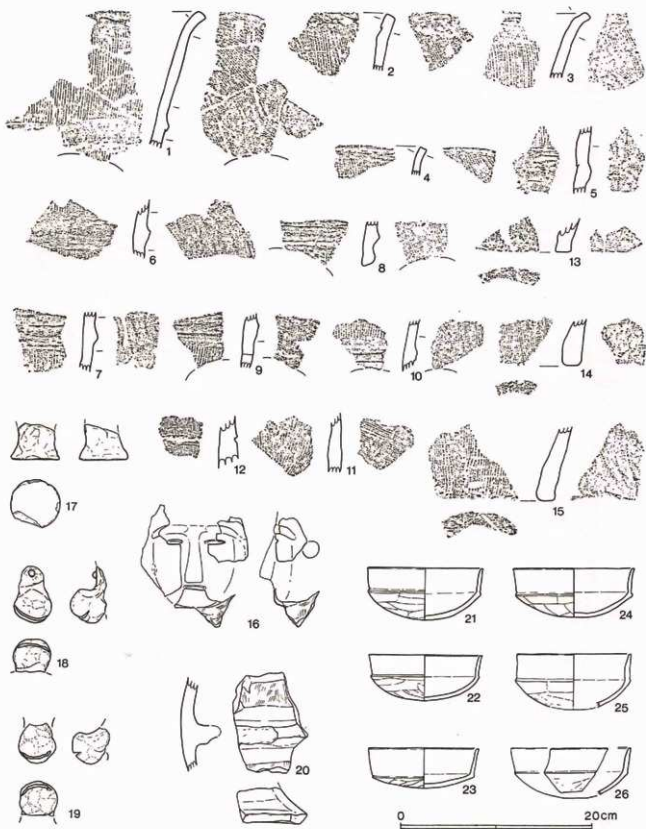


0 20cm

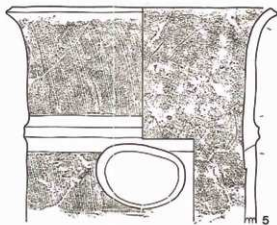
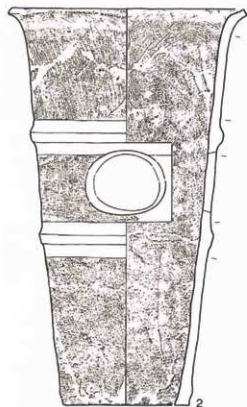
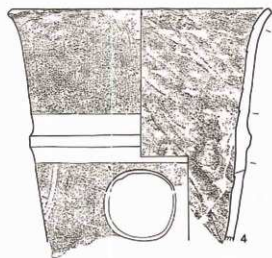
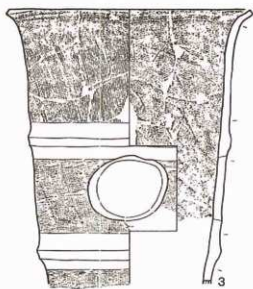
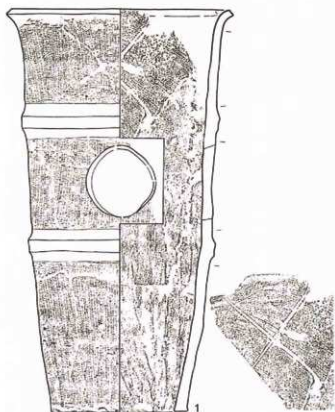
第41图 梅塚古墳(埼玉2号墳)出土遺物



第42图 埼玉3号墳出土遺物

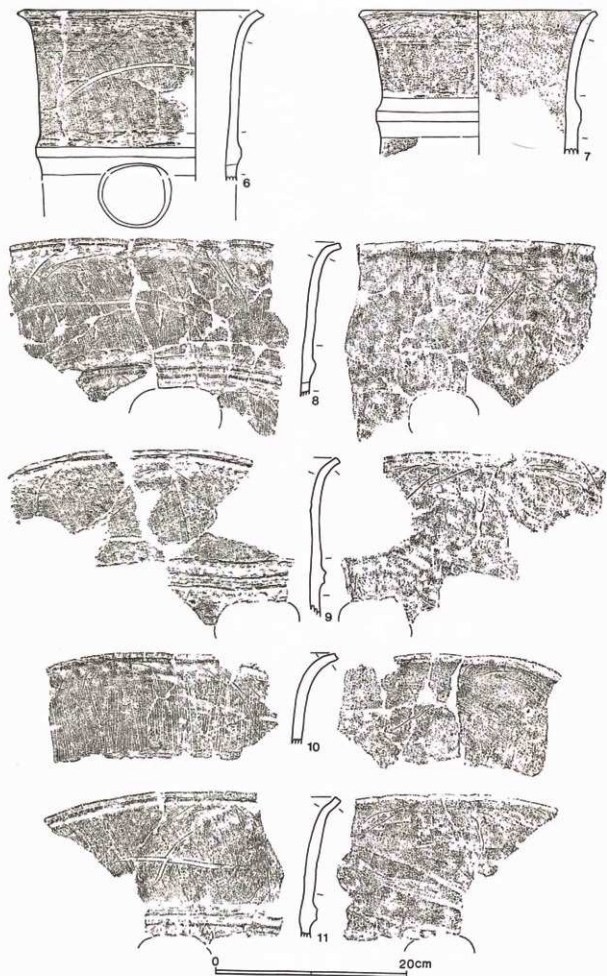


第43图 埼玉4号墳出土遺物

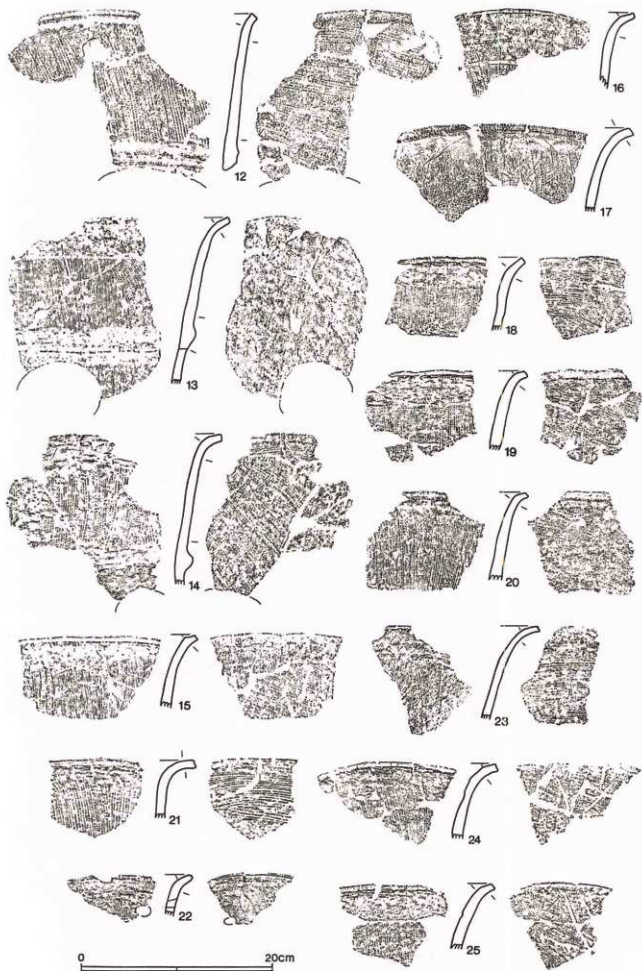


第44圖 埼玉5号墳出土遺物

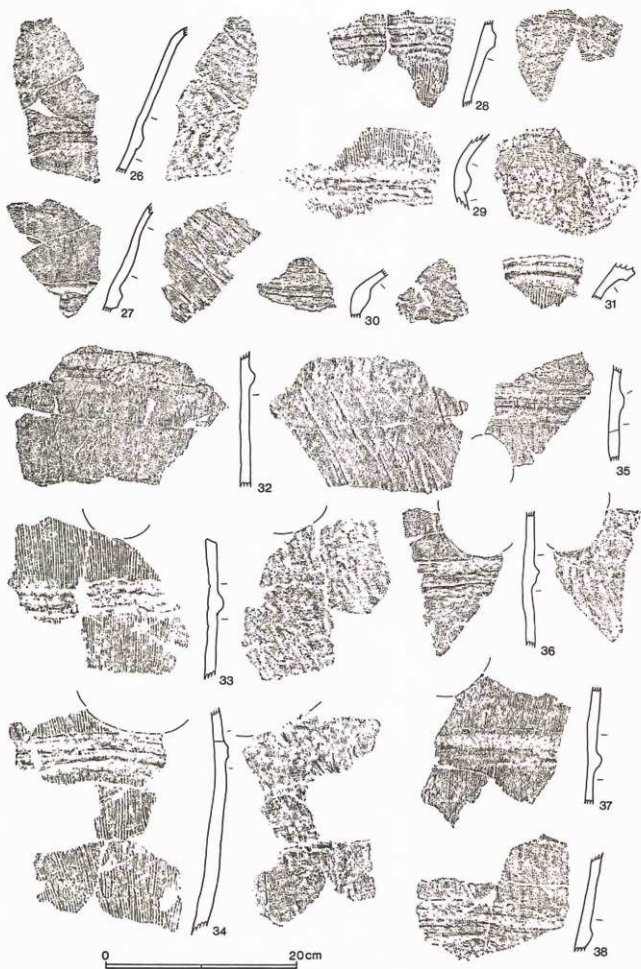
0 20cm



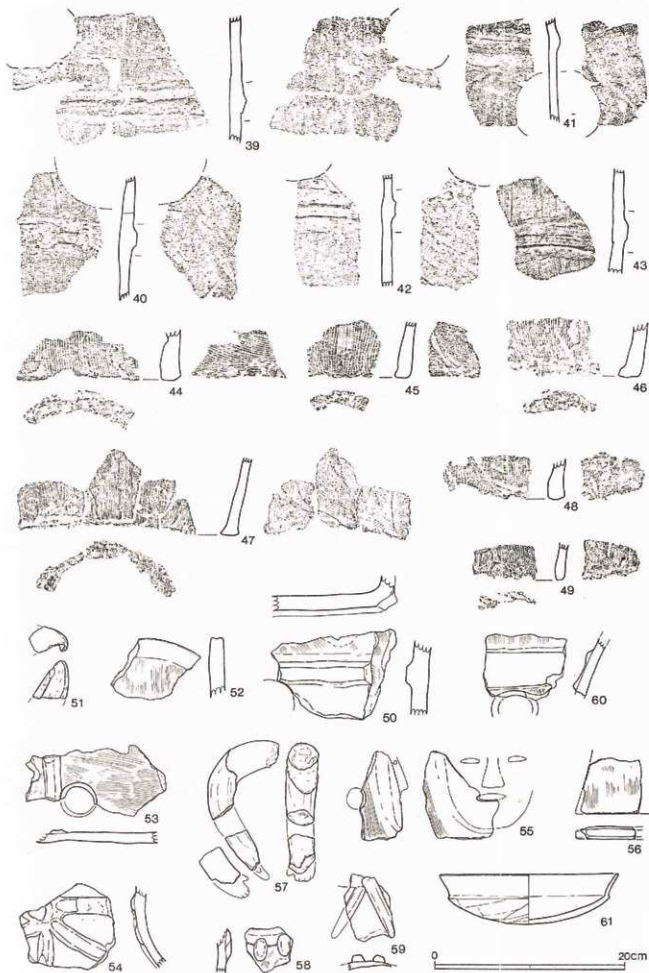
第45图 埼玉5号墳出土遺物



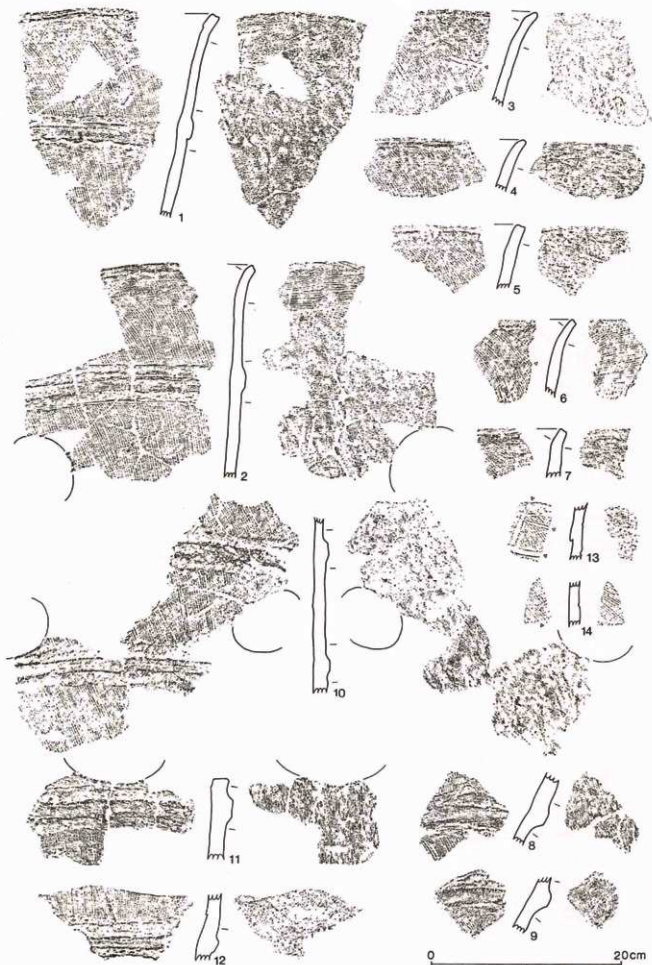
第 46 圖 埼玉 5 号墳出土遺物



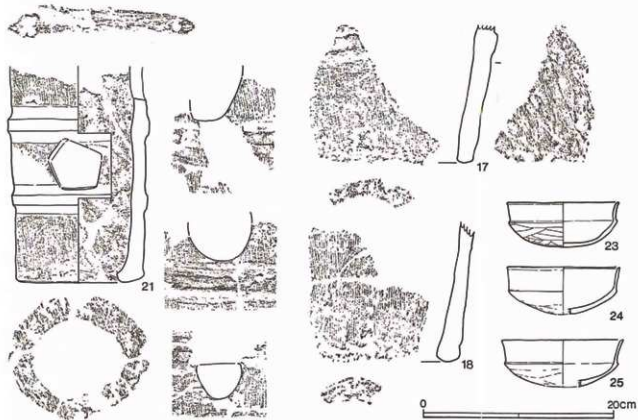
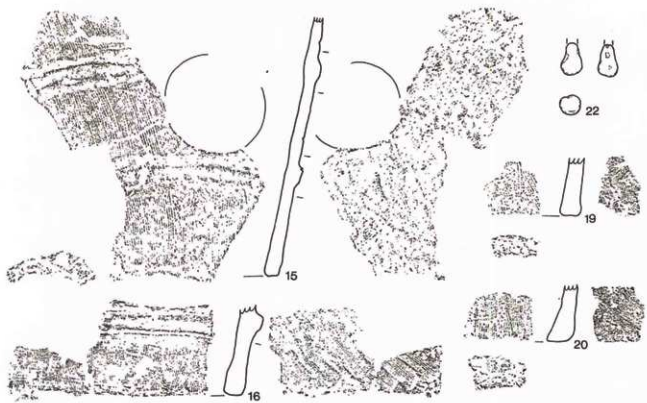
第47图 埼玉5号墳出土遺物



第48图 埼玉5号墳出土遺物



第49圖 埼玉6号墳出土遺物



第50图 埼玉6号墳出土遺物



第51图 埼玉7号墳出土遺物

埼玉 1～7号墳出土遺物観察表

天王山古墳(埼玉1号墳)

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10分)	備考
1	円筒口縁	口縁径約32cm前後。口縁端部は小さく屈曲して開き、ヨコナデで端面を形成。外面ナナメハケメ、内面ナナメナデとハケメ。	f(4)s(4) にふい橙(5YR 6/4)	2.1	
2	"	口縁部小破片。ヨコナデでわずかに凹む端面を形成。	f.橙(2.5YR 6/8)		
3	"	朝顔形の下方部位。普通円筒の口縁状の部分の内側に上方部位を乗せている。タガは扁平な古形。外面タテ、内面ヨコハケメ。	f(2)橙(2.5YR 7/6)	1.6	
4	円筒体部	半周羽が遺存するが、直径約42cmと薄手な例に大形。形象の古等の可能性がある。外面タテハケメ、内面ナナメナデ。	f.s.橙(5YR 6/8)	1.0	
5～15	"	体部小破片。外面はいずれもタテ(又はナナメ)ハケメ、内面はタテ(又はナナメ)のナデやヨコ、ナナメハケメ。タガは11がやや突出度が高いほか、扁平でくずれを見せる。6、12～14はスカシ部分だが、いずれも円形と考えられる。	橙や赤褐色のものが多く、 5(赤灰:10R 5/1)7(にふい赤褐:2.5YR 5/3)は還元色。		
16	円筒底部	底径14.2cm遺存高16.3cm。外面タテハケメ、内面ナナメナデ、タガはくずれた台形。上方に円形と考えられるスカシがある。基底部は粘土が内側に突出する。	f(15)H(2) 橙(2.5YR 7/6)	1.3	
17,18	"	底部小破片。外面タテハケメ、内面は17がナナメハケメ、18がナデ。底面に禾本科植物の圧痕残る。	17:m.橙(2.5YR 6/6) 18:f.f.橙(5YR 7/8)	1.4 1.1	
19	人物頭部	背をかぶる男子人物の顔面右半から首にかけての破片。顔面部分の幅は約11cm。粘土ヒモマキアゲで成形し、アゴ及び背裾部分は粘土を貼り足す。小乳は沈線で表現、各所にハケメを残す。	s(2)f(2)H(1) 橙(5YR 6/8)		
20	人物腕	19の左上腕部と考えられる。粘土を棒状(胴体挿入部のみ筒状)に作り、接合部分は粘土を貼り出し、ハケメにて仕上げる。	胎土、色調等19と同一。		
21	土師器	高杯胴部上位部分の破片。遺存高5.5cm。外面タテヘラミガキ、内面ヘラ先でタテにナデ。五領期のものと思われ、古墳と直接関係するとは思われない。	f(5)二次的に被熱しらしい。 にふい褐(7.5YR 5/4)		

梅塚古墳(埼玉2号墳)

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10分)	備考
1	円筒口縁	ゆるく外反して開き、ヨコナデでわずかに凹む端面を形成する。外面タテ、内面ナナメハケメ。口縁径約25cmと推定される。	m.H(2)橙(2.5YR 7/6)	2.1	
2,3	"	端部を小さく外方に屈曲させヨコナデで端面を作り出す。3は薄手に作る。両者とも外面に焼成前のヘラ書きによる顔印あり。外面タテハケメ、内面はナナメナデ(2)、ヨコハケメ(3)。	2:m.橙(2.5YR 6/6) 3:l.灰白(10YR 7/1)	0.8 1.9	
4	"	1と同様の断面形態。外面タテハケメ、内面ナデ及びハケメ。	m.橙(5YR 7/6)	2.4	
5	"	端部は小さく屈曲させヨコナデで鈍い端面を作り出す。	m.#()	2.5	
6	"	ゆるく外反させ、鈍い端面を作り出す。内外ナナメハケメ。	橙(2.5YR 7/6)	2.6	
7	"	端部に近い部分で外反させ端面を作り出す。	m.橙(2.5YR 7/6)	0.8	
8	"	6と同様の断面で、端面は鈍い作りである。	m.H(2)浅黄橙(7.5YR8/4)	2.2	
9～17	"	口縁部に小破片。ゆるく外反するもの、小さく屈曲するもの、直線的に開くもの(15、18:朝顔形か)があるが、例外なくヨコナデにより端面を形成する。外面はタテ(ナナメ)ハケメ、内面もハケメを施す部分が多い。	橙色のものが多くが赤褐色(16)のものもある。		
18	"	朝顔形と考えられる破片で、ゆるく屈曲して開く。端部はヨコナデで鈍い端面を形成。外面タテ、内面ヨコハケメ及びナデ。	f.H(2)橙(2.5YR 6/8)	3.3	

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケ目 (cm/10本)	備考
19	円筒底部	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	m. s. 赤橙(10R 6/8)	1.8	
20	"	"、内面ヨコ(一部タテ)ハケメ。スカシ有り。	l(5)橙(5YR 7/6)	2.2	
21,22	"	円形と考えられるスカシ部分の破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは21が偏平でずれた台形。22が偏平な三角形。	21 : f. 浅黄橙(7.5YR 9/6) 22 : m(4)H(4)赤橙(10R6/8)	1.7	
23	"	外面タテハケメ、内面ヨコのナデ及びハケメ。タガはごく偏平で、その直上部での直径約22cm。	m. 橙(5YR 7/6)	2.3	
24	"	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平な台形。	f. m. 橙(5YR 7/8)	2.4	
25	"	内外ナナメハケメ。タガの直上での直径18cm。	s. H(2)橙(5YR 7/8)	2.4	
26	"	厚手の作りで、タガは幅広く鈍い三角形。	l. s(4)浅黄橙(10YR 8/3)		
27~ 40	"	体部小破片。外面タテ(又はナナメ)ハケメ、内面はナデ又はナナメハケメで仕上げる。タガは偏平な台形又はM字形のものが多いが、三角形に近いもの(38)もある。33、35、38、39には円形と考えられるスカシがある。	橙色のものが多く赤橙(30、38) 明赤褐色(34)のものもある。		
41~ 45	"	いずれも外面に焼成前の沈線による煎印を有し、口縁部に近いものと考えられる破片である。煎印全体のわかるものはない。			
46	円筒体~ 底部	体部中位以下、1/2周遺存。遺存部高25cm、底径約16cmと推定。上方のタガ直上部の直径19cm。小形の円筒としては厚手の作り。外面タテハケメ、内面ナナメナデ。くずれたM字形のタガ間に円形のスカシが一對ある。基底部分は高さ約4cmの断面三角形の板状の粘土で形成、底面内側が突出する形となる。	l(4)s. H(2) 橙(7.5YR 7/6)	1.1	
47	円筒底部	図示部分略周。遺存高15.2cm。タガ直上の直径18.3cm、底径12.2cm。外面タテハケメ、内面基底部ナデ、上方はナナメハケメ。タガはくずれたM字形で上方に一對の円形のスカシあり。	m(4)H(2) 浅黄橙(10YR 8/4)	1.5	
48	"	図示部分略周遺存。遺存高15.7cm。底径約12.5cmと推定。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガ上方にスカシあり。	m(4)H(2) 橙(2.5YR 7/6)	2.4	
49	"	外面タテハケメ、内面ナナメナデ。底径約20cm。	l(4)明赤褐(2.5YR 5/8)		
50	"	"、底径約12cm。	m. 橙(5YR 6/8)		
51	"	やや低位にごく偏平な三角形のタガが付く。底径約16cm。	l(4)ぶい黄橙(10YR7/4)		
52	"	外面タテハケメ、内面ナナメナデ。底径約14cm。	m(4)橙(5YR 7/6)		
53	"	"、内面ナデ及びナナメハケメ。底径約13cm。	m(4)橙(2.5YR 6/8)	2.0	
54	男子人物	天冠と美豆良、指先の一部を欠くが略実形。高さ53.1cm。断面わずかに楕円形の円筒状の台部に、胴体から上が直接表現される。頭部は天冠と思われるが、外方にラッパ状に開き、端面を作り出す。顔面は下顎部分に粘土を足し平坦に成形、側面から見ると弧を描くように鼻を作り、眉も偏平に粘土を貼り表現する。目は偏平な(つぶれた)楕円形に、目尻を下げて穿孔、口は細長い木の葉状に穿孔する。側面には先端が前方に小さく突出する美豆良を付け、耳の表現はない。後部には断面が偏平な方形の垂髪を付ける。右腕は湾曲させ、前方に水平に差出し、左腕は指先(欠損するが粘土をヒモ状にして五指を表現)を下に腰にやがう。腕、胴体には、衣服、裝飾品等の表現は全くない。腕は胴体に近い部分を中空にしており、胴体に挿入後、周囲に粘土を貼り接合する。円筒状の台部は外面タテハケメ。上方のものは帯の表現ともとれるが、2本のタガは偏平なM字形。内面は全面をナデ、頭部は接合痕顕著。	粗砂を含み、全体にやや軟質の焼成。橙(2.5YR 6/8)を基調とする。		西側ブリッジ 北側周堀内出土。(第28図)
55	形 象	美頭良と思われる破片、浅い沈線が外側部分のタテ方向に1条、その下方に直交して短かく2条施される。断面楕円形で遺存長13.8cm。上方の裏に脱落痕がある。	l. H(5)橙(5YR 6/6)		

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/10本)	備考
56	形 象	人物の美顔良と思われ、棒状に作り、下部は平たく前後に突出させる。遺存長8.5cm、ナデにて仕上げ。全体やや磨減。	I、H(2)橙(5YR 7/8)		
57	"	人物に付属する大刀柄頭部分と考えられる。遺存長10.5cmで断面楕円形、先端はコブ状に膨らむが、周囲に脱落痕があり、装飾が施されていたものと思われる。表裏に斜格子風に沈線文が施されるが裏面はやや雑で、本体に貼付けていた痕跡がある。	I、H(2)橙(5YR 6/8)		
58	"	人物付属の大刀柄頭と考えられる。遺存長5.0cm、柄間は断面わずかに縦長(2cm強)の楕円形で、厚さ1cmの、弧の顔形の粘土板で柄頭を表現する。全体をナデで仕上げている。	I、H(2)橙(5YR 7/8)		西側ブリッジ 北側周堀内出土。
59~ 61	"	馬あるいは大刀形等の鈴飾りと考えられる。球形部分の直径は59が3cm、60、61が2.5cm、いずれも孔の表現はなく同巧。	59 : I、H(2)橙(5YR 7/8) 60,61 : I、H(4) # (#)		
62	"	馬形等に付属の鈴飾りであろう。鈴部分ややつぶれた球状。	I(4)H(2)橙(2.5YR 6/8)		
63	"	人物に付属する柄と思われ、手ツクネで成形、ナデで仕上げる。弓周の破片で外面には何かに貼付けていた痕跡がある。	I(3)H(4) 明赤褐(5YR 5/8)		
64	"	器種不明。底径8.3cmで、上方は急に径を増す。	I、H(4)橙(5YR 6/8)		
65	土師器埴	底部を部分的に欠くか略方形。高さ15.4cm、口径11.3cm体部最大径13.9cm。偏平球形の体部におそらく内湾気味に開く口縁が付く。口縁部内外及び体~底部(中心はヘラズリ)をヘラミガキして赤彩。体~底部内面はナデ。	I(1)H(2) 赤彩(10R 5/8)		南東部周堀内 出土。(第28区)
66	土師器杯	高さ5.5cm、口径12.6~12.9cm。所謂須恵器模倣杯。体~底部わずかに欠くか略方形。口縁部はわずかに屈曲、開き気味で、端部に内傾する小さな凹面(端面)が形成される。外面は、口縁部がヨコナデ、体~底部は周囲を軽くヘラズリの後、2度におたり一定方向にヘラズリ。内面は底部のみナデで、他はヨコナデ。	I(1)H(4) 橙(2.5YR 6/8)		南東部周堀内 出土。(67の下から 出土)。
67	"	68と略同形態だが、口縁部は直立気味である。完形で高さ5.1cm、口径11.9~12.2cm。作りはやや粗雑である。底部外面は周囲を周縁に沿ってヘラズリ後、一定方向にヘラズリ。口縁部外面及び内面は底部中央付近までヨコナデ。内外やや磨減。	I(1)H(2) 橙(5YR 7/8)		"
68	須恵器甕	突の口縁~体部上位部分の破片。約弓周の遺存で、口径約23cm。口縁部は体部からくの字状に外反して開く。端部外面には下方に小さく突出する2条の突縁がめぐる。端部はやや丸味があり鋭さを欠く。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキをナデ消す。口縁部内外はヨコナデ、頭部は無文である。	細砂を少量含み、非常に堅緻。灰白色(10Y 7/1)		
69	須恵器壺	小形の壺(又は壺の可能性もある)破片。体部最大径は約12cm。内外ヨコナデで、外面は暗緑色に釉ののり部分がある。	I(1)f(1) 暗緑灰(10G 3/1)		
70	須恵器杯	有蓋杯の蓋。完形で、高さ4.7cm、口径12.2cm。口縁、体部は略直立し、わずかに内傾して凹凸端面が形成される。天井部はあまり高くはないが丸味があり、体部とは小さな稜により区画される。天井部外面を回転ヘラズリ(ロク左回転)のほか略全面をヨコナデ(天井内面中央はナデ)。	粗砂を少量と、黒いピッチ状に融解した粒子を含む。非常に堅緻で天井外面に淡黄灰色の自然釉がかかる。		南東部周堀内 出土。(第28区)
71	"	70と同巧だが、器肉はやや厚い。完形。高さ4.4cm、口径12.0cm。	I(1)H(5)灰白(N 7/0)		

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/10本)	備考
72	須恵器杯	70、71に比べ作りは粗雑で、天井、底部の壁にシャープさは無く、体・口縁部も幅が狭く、端部も内傾度が強い。口縁～天井部若干欠く。高さ4.6cm、口径12.0cm。天井部外面を回転ヘラケズりするほか、全面をヨコナデ。内面はロクロによる凹凸がやや目立つ。	I(1)H(5)青灰(6BP 6/1)		南東部周堀内出土。
73	"	有蓋杯の杯身。完形で高さ5.2cm、口径10.4cm。端部は1/4周が歪む。体～底部は丸味があり、受け部はやや突出する。口縁部はやや内傾して立上り、わずかに凹凸端面を作り出す。底部外面を回転ヘラケズリ(ロクロ左回転)するほか、内外面ヨコナデ(底部内面中央はナデ)で仕上げる。	粗砂と少量の小石粒を含み非常に堅緻。灰色(10Y 5/1)		南東部周堀内出土。(74の下から出土。)
74	"	73と同巧だが、底部がやや平たく、立上りはやや内傾。端面はあまりシャープではない。体・口縁部の一部を欠く。高さ4.9cm、口径9.9cmでわずかに歪んでいる。	胎土、色調は70と同一で同時に製作、入手されたものであろう。		南東部周堀内出土。(73の上から出土。)
75	"	73、74と同巧。底部はやや平たく、立上りは74よりさらに内傾し、やや高さも低く、器内も厚い。端部も三胴体中最も内傾。口縁1/4周欠く。高さ4.7cm、口径10.0cm。底部外面を回転ヘラケズリ(ロクロ左回転)するほか、内外全面をヨコナデ(底部内面中央はナデ?)で仕上げる。作りは比較的丁寧。	少量の粗砂、小石粒を含むが、焼成は非常に堅緻。		南東部周堀内出土。(72の下方から出土。)
76	須恵器 高杯	小形高杯の脚部小破片。左右にスカシがあり、その間隔から四方スカシであろう。端部は下方に小さく折曲げるように作り、外面の上方には小さな二条の凸線を作り出している。スカシ部分の外面にカキメがあるほかはヨコナデと思われる。	細砂を含み、全く軟質に焼上る。灰白色(5Y 8/2)。		
77	鉄製品	断面が丸く、太目の針金状。左側は矢印部分で折れており先端が鷲首状に曲がる。右側は湾曲して略直角に曲がっている。器種不明。			
78	"	右端で折れており、器種不明。断面方形でゆるく湾曲し先端は角錐状に尖がっている。遺存長6.3cm。			
79	"	完形と思われ、長さ17.0cm。断面方形で、先端と思われる左側部分はクサビ状に尖がっている。器種不明。			

埼玉3号墳出土土物

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/10本)	備考
1	円筒体部	外面タテハケメ、内面ナデ。タガは三角形。	I, 灰白(2.5Y 8/2)		
2	"	内面ナメハケメ。タガは平面でくずれた台形。	I, s. 浅黄橙(7.5YR 8/4)		
3	形 象	器種、部位不明。下部に粘土ヒモモタガ状に偏平に貼付ける。左上方に円孔がある。外面タテハケメ、内面ナデ。	I, H(4)橙(2.5YR 7/6)		
4	土師器杯	所謂、須恵器模倣杯。薄手の作りで、底部を若干欠く。高さ5.3cm、口径12.2～12.8cmとわずかに楕円形に歪む。丸い底部に、わずかに外反気味に開く口縁部が付き、端部にわずかに内傾する。端面が形成される。底部外面ヘラケズリ、口縁部内外をヨコナデ。全体に磨減し調整不明瞭である。	I(2)H(1) 橙(5YR 6/6)。口縁部)外面に赤彩の痕跡。		

埼玉4号墳出土土物

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/10本)	備考
1	円筒口縁	体部から直線的に開き、端部はわずかに外方に屈曲し、ヨコナデして端面を形成する。外面タテハケメ、内面ナメハケメ(部分的にナデが残る)で、タガは粗雑な作りで断面三角形。タガ下方に円形と考えられるスカシがある。口径24cm前後と推定。	m. s. 橙(2.5YR 7/8)	2.8	
2	"	直線的に開き端面を作り出す(朝顔形の可能性あり)。	s(4)橙(2.5YR 7/8)	2.8	

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	粘土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10分)	備考
3	円筒口縁	端部は小さく屈曲して開く。外面タテ、内面ナメハケメ。	m. 橙 (2.5YR 7/8)	2.5	
4	"	薄手の作りの小破片。外面タテ、内面ナメハケメ。	l. # (5YR 7/6)		
5~12	円筒体部	体部小破片。体部外面はいずれもタテハケメ、内面はナデ又はハケメ。タガは扁平でくずれた白形(8、10)や三角形(7、8)等がある。8、9は円形と思われるスカシ部分で、10にもスカシがある。	砂粒を多量に含み、橙色を呈するものが多い。		
13~14	円筒底部	底部小破片。外面タテハケメ(13は最下部にヨコにナデを加える)、内面ナデ。14は基底部分がやや肥厚している。	13 : s. H (2) 橙 (5YR 7/8) 14 : s. 赤橙 (10R 6/8)	1.5 1.9	
15	"	上方に開いて立上っている。底径約14cmと推定。外面タテハケメ、内面ナメナデ。底面に禾本科植物の圧痕が残る。	m. 橙 (2.5YR 7/8)	2.3	
16	人物	顔面部分の破片。眉は下り気味、顎は丸くふくよかである。目、口の半分は欠損、鼻の部分は全くない。耳は円孔で表現。	m (5) H (4) 橙 (2.5YR 6/8)		
17	形象	器種、部位不明。円柱状に作っており、端部に平らな面を作っている。この部分は丁寧にナデるが、他は雑にナデる。	l. 橙 (2.5YR 6/6)		
18	"	馬形等に装着される鈴飾り。鈴部分の直径4cmで、上方に鉾の表現がある。小さな凹凸があり、作りはあまり良くない。	l (4) 明赤褐 (2.5YR 5/8)		
19	"	鈴飾り。鈴の直径4cm。本体との接合部分は粘土をそぎ取って成形する。18同様、あまり精巧な作りとは言えない。	l (4) 橙 (5YR 6/8)		
20	"	器種、部位は不明。外反する板状の本体に、垂直に粘土板を貼付けている。外面ハケメ、内面と貼付された粘土板はナデ。	l (4) 橙 (5YR 7/6)		
21	土師器杯	須恵器模倣杯(以下28まで略同)。口縁部1/4周を欠く。高さ5.5cm、口径12.2cm。体~底部はやや深く丸味を持つ。口縁部はわずかに開き気味で、略水平で鈍い端面を形成。底部外面は一定方向のヘラケズリの後、黒線部を右廻りにヘラケズリ。口縁部内外及び底部内面上位をヨコナデ(底部中央はナデ)。	多量の細砂と、ごく少量の粗砂含む。0.1~1mm径の赤色粘土粒も含む。しまり欠き軟質。		ブリッジ南周 堀底出土。
22	"	高さ4.9cm、口径12.0cm。底部1/2を欠く。口縁部わずかに外反気味に開き端面を形成。口縁部内外ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。内外やや磨滅している。	内外赤彩残る部分あり。 l (1) H (3) 橙 (2.5YR 5/8)		
23	"	21、22と比べ底部に丸味、深さが浅い。口縁部は直線的でやや長く、開き気味でわずかに内傾する鈍い端面を作り出す。口縁~体部1/4周を欠く。高さ4.3cm、口径11.5~11.9cm。底部外面ヘラケズリ、口縁部内外はヨコナデ。	砂粒含み、軟質。 橙 (2.5YR 6/8)		ブリッジ北周 堀底出土。
24	"	全体の1/4程を欠く。高さ5.1cm、口径12.8cm、口縁部はわずかに外反気味に開き、略平坦な端面を作り出す。調整は21と同様。口縁内側ヨコナデが左上に抜ける部分があり、右廻りの回転台を利用して調整か。	細砂及び0.5~5mm径の赤色粘土粒含む。H (2) 明赤褐色 (5YR 5/6)		ブリッジ南周 堀底出土。
25	"	口縁部若干と底部中央を欠く。高さ5.9cm(推定)、口径12.0cm、口縁外見は直立するが内面に肥厚する部分があり、わずかに内傾する端面を作り出す。底部外面ヘラケズリ、口縁部内外はヨコナデ。内外磨滅し調整は不明瞭。	細砂多量に含み、21と同様の赤色粘土粒含む。軟質。 橙 (2.5YR 6/6) 一部暗赤灰。		ブリッジ南周 堀内出土。
26	"	口縁~底部破片。高さ5.3cm、口径12.5cm前後に復原される。口縁はわずかに開き気味で小さな端面を形成。	f (5) 橙 (5YR 7/6)		

埼玉5号墳出土遺物

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10分)	備考
1	内筒埴輪	約1/4周が遺存。高さ42.0cm(推定)、口径24cm、底径14.5cm。体部は内湾気味に立上り、口縁部は小さく外方に屈曲して開き、ヨコナデで端面を形成する。タガは2条で偏平な台形。下のタガは底部から17cmに付けられ、上のタガとの間に(不正)円形のスカシが一對あけられる。外面タテハケメ、内面中、下位はタテにナデ、上位はナナメハケメ。口縁部内面にへら描による焼成前の窯印「×」がある。底面に禾本科植物の圧痕残る。	小石粒と多量の粗砂を含み、比較的堅緻。明赤褐色(2.5YR 5/8)	2.1	北西部周堀内出土。
2	"	約半周遺存。1と略同巧で高さ41.5cm(推定)、口径約25cm、底径約13cm。内面は全体をナデにより仕上げる。	I(4)H(4)上方赤(10R 5/8) 下方、橙(5YR 6/6)	1.5	"
3	"	口縁部内面がやや凹み薄くなるが、1と同巧。タガは偏平でくずれた台形。遺存高28.5cm、口径26.0cm。図示部分半周遺存。外面に窯印「へ」の一部が認められる。	I, 明赤褐(2.5YR 5/8)	1.7	
4	"	口縁部の屈曲度は1、2などと比べやや弱く、端面も丸く作られている。図示部分下方部位を除きほぼ全周。遺存高26cm、口径28.0cm。内面ナナメハケメで接合痕を残す。	I(4)s. 赤(10R 5/6)	1.9	ブリッジ東側周堀内出土。
5	"	図示部分半周遺存。遺存高22.5cm(推定)、口径27cm。口縁部外湾して開き凹んだ端面を形成。内面ナナメハケメ。	I, S.H(4)赤(10R 4/8)	1.9	ブリッジ西側周堀内出土。
6	"	図示部分半周遺存。遺存高17cm(推定)、口径27.5cm口縁部は外方に湾曲させ、比較的シャープに作る。外面に窯印「へ」があり、円形のスカシも認められる。内面ナデ(剥落著しい)。	小石粒を含む。比較的堅緻。赤褐(2.5YR 4/8)	1.5	ブリッジ東側周堀内出土。
7	"	口縁部分は略全周。口径26.0cm。タガはくずれた台形で上下している。端部は全体的に薄い。外面に窯印「へ」の一部あり。	I, s. 暗赤褐(2.5YR 3/5)	1.6	"
8	内筒口縁	外面タテハケメ、内面ナデ。窯印「へ」、円形のスカシあり。タガはつぶれた台形。復原口径約27cm。	m. s. H(2) 赤(10R 5/6)	1.7	周堀北西側堀中出土。
9	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平なM字形。円形のスカシあり。窯印の一部が認められる。復原口径28cm。	I, H(3) 橙(2.5YR 6/6)	1.7	
10	"	外反度がやや強い。内面ナナメハケメ及びタテのナデ。	I, 明赤褐(2.5YR 3/6)	1.6	
11	"	外面に窯印「×」あり。復原口径約29cm。	m. s. 赤橙(10R 6/8)	1.9	
12	"	わずかに屈曲して開き、ヨコナデにより端面を作り出す。	m. s. # (10R 6/6)	1.9	
13	"	外面に窯印あり。円形のスカシがあり、内面全体をナデ。	I, s. # (10R 6/8)	1.8	
14	"	端部の屈曲度やや強い。内面ナナメハケメ。復原口径約28cm。	浅黄橙(7.5YR 8/3)	2.4	
15	"	端部内側はヨコナデで凹面が形成される。内面ナナメハケメ。	I, 橙(2.5YR 6/8)	1.4	
16	"	外面に窯印あり。内面はナナメハケメ。	赤橙(10R 6/6)	1.8	
17	"	外湾度の大きい破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。	I, 赤橙(10R 6/6)	1.6	
18~20	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。20の端部は薄い作り。			
21	"	端部が水平に近く強く屈曲して開く。朝顔の可能性強い。	浅黄橙(10YR 8/4)	2.4	
22	"	口縁直下に焼成前の直径約8mmの円孔がある。端部は丸味を持ちヨコナデで仕上げ。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	I, H(5) 明赤褐(2.5YR 5/8)	1.3	
23~	"	23は薄く外湾度が強く朝顔の可能性ある。外面はタテハケメ	23 : I, 橙(2.5YR 6/6)	1.3	
24	"	内面は23がヨコ、他はナナメハケメ。24、25は内面に窯印。	24 : I, 赤(10R 5/6)	1.3	
25	"		25 : I, 明赤褐(2.5YR 5/8)	1.2	
26	"	朝顔形の口縁部。外面タテハケメ、内面ナデ及びナナメハケメ。	I(4)s. 橙(2.5YR 6/6)	1.8	
27	"	" " " "、内面ナナメハケメ。	I(4)s(4)赤(10R 5/6)	1.7	
28	"	" " " "、内面ヨコハケメ。	I, 橙(2.5YR 7/6)	2.0	

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10本)	備考
29	円筒口縁	朝顔形の口縁下位破片。内面はナデ及びヨコハケメ。	浅黄橙(7.5YR 8/4)		2.7
30	"	"。内面ナデ。タガは全くずれている。	l. 橙(7.5YR 7/6)		1.4
31	"	"。内面ナナメハケメ及びナデ。	浅黄橙(10YR 8/3)		3.0
32	円筒体部	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、タガはくずれた台形。タガ直下付近で直径約22cm。	m. s. H(4) 橙(2.5YR 6/6)		1.6
33	"	内面ナナメナデ。タガ直下で直径約16cm。上方にスカシあり。	浅黄橙(10YR 8/3)		2.2
34	"	下方は肥厚し、内湾して立上る。外面タテハケメ、内面タテハケメ及びヨコハケメ。タガは偏平なM字形。	l. 赤橙(10R 6/8)		2.6
35	"	外面タテハケメ、内面タテのナデ。円形のスカシがある。	l. 橙(2.5YR 6/6)		1.1
36	"	"、内面ナナメのナデ。	m(4)H(4)赤(10R 5/8)		1.8
37	"	内面はナナメナデ、オサエ底残る。タガ直上位で直径約20cm。	m. l. 橙(2.5YR 6/8)		1.6
38	"	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	l. s. # (#)		1.4
39	"	内面タテにナデ、左上に円形のスカシが認められる。	f(5) # (#)		1.4
40~ 43	"	外面タテハケメ、内面ナナメナデ(43はハケメも認められる)。40、42は円形と考えられるスカシあり。41のタガは相当くずれる。			
44~ 49	円筒底部	外面はタテハケメ、内面タテ又はナナメのナデ。底径は44が約20cm、47が14cm。	47、49が赤橙のほか橙系。		
50	形象	槽形の形象の隅部分の破片。タガが横走り、角の部分もタテにタガの脱落痕がある。左下に円孔。外面ナデ(タガ周囲はヨコナデ)、ハケメが残り、内面はナナメにナデ。家形の一部か。	l(3)s(2)H(4) 橙(5YR 7/6)		
51~ 54	"	いずれも馬形の一部で、51は耳、52は鞍、53は顔面、54は背の一部と考えられる。51はナデ、52は表裏ハケメ、厩縁をヨコナデ。53は外面をハケメ、頸格部分をヨコナデ、内面はナデ。目と思われる円孔があり穿孔後穿孔面をナデている。54は尻髯部分を幅約1.7cmの粘土紐で表現する。内外ナデ。	51: l(5)H(1)橙(5YR7/8) 52: l(5)H(1)橙(2.5YR6/8) 53: l(4)H(4)橙(2.5YR6/6) 54: l(4)H(4)橙(2.5YR6/8)		
55	人物	顔面右下部分の破片。口を偏平な楕円形、耳を円孔で表現。顔面部分はナデ、鬚はタテに浅いハケメが残っている。	l(2)s(1)H(4) 橙(2.5YR 6/6)		
56	"	厚さ1.4cmの楕円形に作っており、島田髯の一部であろう。ナデで仕上げ、ハケメ残る。	l(2)H(4) 赤(10R 5/6)		
57	"	人物の右腕、粘土を棒状に作っており、ナデにて仕上げ。55、58と同一個体の可能性がある。	l(2)H(4) 橙(2.5YR 6/6)		
58.59	形象	本体に粘土紐で表現がある。人物の一部であろうか。			
60	"	器種、部位不明。本体に偏平、幅広の凸帯があり、下方に円孔がある。外面ハケメ、内面はナナメのナデ。	l. H(4)橙(2.5YR 6/6)		
61	土師器杯	大形の模倣杯。約1/4周遺存。高さ5.3cm、口径約18.8cm。丸い底部から梗を持ち、口縁部はわずかに内湾気味に開く。脛部には水平な端面が形成される。外面は底部ヘラケズリ、口縁部がヨコナデ、内面は底部中央がナデの他はヨコナデ。	f(5)H(5) 淡橙(5YR 8/4)		北東部周羅中出土。

埼玉 6 号出土土遺物

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケメ (cm/10本)	備考
1	円筒埴輪	口縁~体部破片。口縁端部はわずかに屈曲して開き、ヨコナデでわずかに凹む端面を形成する。外面ナナメハケメ、内面タテのナデ、タガ付近の内面にオサエ底残る。復原口径24cm。	s. にふい褐色(7.5YR 6/8)		1.8

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/10分)	備考
2	円筒地輪	口縁部は小さく屈曲して開き、ヨコナデで端面を形成。外面ナナメハケメ、内面ナナメナデ、口縁直下はヨコハケメ。タガは扁平につぶれた台形。復原口径約26cm。	s.にふい煙(7.5YR 7/4)	2.0	
3	円筒口縁	端面は鈍い作りで丸味がある。外面に煎印「×」あり。外面ナナメハケメ、内面はナデで、口縁直下はヨコハケメ。	s.橙(7.5YR 7/6)	2.2	
4	"	端面はわずかに屈曲して開く。端面はやや丸く鈍い作り。	s.にふい煙(7.5YR 6/4)	2.1	
5	"	略直線的に開き、端面はわずかに凹む。	s. # (5YR 7/4)	2.0	
6	"	端面はやや薄手で、湾曲して開く。内面ナデ及びヨコハケメ。	s. # (5YR 6/3)	2.0	
7	"	小さく屈曲して開き、端面を形成。内面はナデ。	s.明赤褐(5YR 5/6)	2.2	
8,8	"	朝顔形の口縁下位部分。タガは扁平な台形。内面ナデ。			
10	円筒体部	外面ナナメハケメ、内面タテ又はナナメのナデ。タガ間にスカシが2箇所に認められる。下方のタガ直下で直径約16cm。	s.にふい煙(7.5YR 6/3)	2.2	
11,12	"	外面タテハケメ、内面はナデ。11は上方に円形のスカシあり。			
13,14	"	いずれも外面に煎印と思われる。焼成前の沈線が認められる。			
15	円筒 体～底部	底径約15cmと推定される。外面タテハケメ、内面ナナメナデ、タガ間に円形のスカシあり。タガは扁平な台形。	s.にふい煙(5YR 7/4)	2.4	
16	円筒底部	やや厚手でタガの突出度も高い。復原底径は約46cmと大きい。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	f.橙(2.5YR 6/6)	1.9	
17	"	復原底径約13cm。外面タテハケメ、内面ナナメのナデ。	f(4)s.にふい煙(7.5YR7/4)	2.3	
18	"	" 13cm。内面ナナメナデ。外面底部一部還元色。	f(4)s.橙(7.5YR 7/6)	2.3	
19,20	"	底部小破片。外面タテハケメ、内面ナナメナデ。			
21	"	形象の白部の可能性が高い。遺存高22cm、底径13～14cm。タガ間に一対スカシがあり、一方は五角形、一方は半円形で、上のタガの上にもスカシが一対ある。一つは円形、他は変形した半円形と思われる。外面タテハケメ、内面ナナメのナデ。	多量の荒砂と小石粒を含み、軟質。赤色の粘土粒子も含む。	2.3	
22	形 象	鈴飾りと思われる破片である。鈴部分の直径24cm。遺存不良。	m.橙(7.5YR 7/6)		
23	土師器杯	所謂須恵器模倣杯。完形。高さ4.7cm、口径11.9cm。比較的作りは丁寧。丸底で、口縁部は外湾気味にやや開き、鈍い端面を形成。底部外面は中央を不整方向に、周辺は周縁に沿うように長目のヘラケズリ。口縁部内外、底部内面上位はヨコナデ。	細砂を少量含み、焼成は軟質。明赤褐色(2.5YR 5/6)		ブリッジ南側 周堀中出土。
24	"	底～口縁部約半周遺存。底部と口縁部立上りの稜は鈍い。高さ5.0cm、口径12.0cmと推定される。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、口縁部の内外ヨコナデで仕上げる。	粗砂を含み軟質。 にふい煙(5YR 7/4)		
25	"	底～口縁部が部分的に遺存。高さ5.0cm、口径は12.5cm前後と推定。23、24より作りは良い。口縁部にやや凹む端面を形成。	砂粒を少量含み、焼成は堅緻。		

埼玉7号墳出土土物

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケム (cm/10分)	備考
1	円筒体部	外面タテハケメ、内面ナデ及びナナメハケメ。	m(4)s.にふい煙(7.5YR5/3)	1.8	
2	"	外面タテハケメ、内面ナデでオサエ残る。やや厚手の作りでタガはやや幅広いM字形。	f(4)s.橙(2.5YR 7/6)	1.4	
3	土師器杯	所謂模倣杯。完形で、高さ5.0cm、口径12.4cm。底部は丸底で外湾気味にわずかに開く口縁部上部には内傾する端面が形成される。底部外面ヘラケズリ、口縁部内外はヨコナデ。底部内面は中央をナデ、口縁部にかけてはヨコナデで仕上げる。	粗砂含み、やや軟質。 橙(2.5YR 7/6)		ブリッジ北側 周堀中出土。

III 將軍山古墳

一 將軍山古墳と昭和五九年度の調査の契機及び調査の経過

將軍山古墳は稲荷山古墳の南、二子山古墳の北東それぞれ約一〇〇mの距離に所在し、全長一〇二m、埴玉古墳群中の大形前方後円墳のうちでは第四位の規模を有している。しかし、埴丘は宅地化などによる損壊が著しく、原形を留める部分は少ない。そうした破損のため内部主体である横穴式石室の

將軍山古墳石室出土遺物一覧	
東京国立博物館	須恵器無蓋杯、乳文鏡、水晶製三輪玉、石製盤、金銅鑿眼大刀殘欠、銀製大刀殘片、直刀殘片、鉄矛(4)、挂甲小札、横切板鉄製筒筒角付竹筒殘片、素戔嗚坂付鏡、金銅半球形土金具(7)、金銅鍍形香葉(4)、銅製鈴(3)、八角鍍ナス形銅鏡、金銅鈴(2)、鉄地金銅鍍金具殘片、鉄製輪(2)、純行状鉄器
東京大学総合研究資料館	銅鏡、高倉村有蓋銅鏡、ガラス小玉(多数)、銀製大刀殘片、挂甲小札、金銅鍍板竹筒、金銅半球形銅珠、金銅鍍具、八角鍍ナス形銅鏡、金銅鈴殘片、金銅鍍尖筒金具
埼玉県立博物館	純行状鉄器
さきたま資料館	金銅鍍三輪玉、鉄斧、鉄製殘片、挂甲小札、鉄製鍍具、鉄針、直刀殘片、金銅鍍金具殘片、馬面殘片
行田市教育委員会	鉄製殘片、挂甲小札、馬面殘片
本庄市教育委員会	水晶製三輪玉、金銅鍍三輪玉、ガラス玉(多数)、金銅鍍形香葉殘片
田島邦夫氏	銅鏡、八角鍍ナス形銅鏡、半球形土金具殘片、金銅鍍形香葉殘片、金銅鍍尖筒金具(2)

石材が一部露出して、これが地元村民により発掘されたのは、明治二十七年のことであり、埴玉古墳群中では内部主体、副葬品が知られている数少ない古墳の一つでもある。副葬品は現在、東京国立博物館や東京大学総合研究資料館などに分散し収蔵されているが、それらの示す年代観から、古墳の築造年代は六世紀後半ないし末葉と考えられ、埴玉古墳群の大形前方後円墳としては最も新しい時期に想定されている。

將軍山古墳は、明治二十七年の発掘を除けば、周堀の調査が二度実施されている。昭和五〇年度前方部南の水路改修に伴い、行田市教育委員会により、その一部が調査されたのが第一回目で、ここに報告するのは、第二回目の前方部西方の民有地の調査である。

調査の契機は調査地区中の畑地が水田化されるのに伴い土砂が掘削され、堀状の遺構の一部が露出するに及んだため、この畑地とその周辺を調査したものである。

座標化を軸としたグリッドを設定し調査にとりかかり、比較的良好に遺存したローム面で、外堀の一部を確認することができたが、時間的な制約もあり、完掘したのはさらにその一部にとどまった。調査面積は約八〇²、付近は標高約一七・五mのローム層の低台地である。

二 調査の経過

昭和五九年六月一日～一三日

堀状の遺構のプランを確認し、それと直交する二本のトレンチを設定し掘り下げる。また、西方に所在したと伝えられるポッチ山古墳の確認用のトレ

ンチも設定。

六月一日～一九日

さきに設定した二本のトレンチ及びその間を掘り下げて精査。確認面のローム面から堀底までは深いところで二五～三〇センチと浅い。また、調査区の中程でさらに浅くなり、堀が途切れている。覆土からは埴輪片が出土するが小破片が多い。調査区東の農道際にもトレンチを設定し土層を観察する。

六月二日～二三日

堀状遺構の土層断面図を作成する。ポツチ山部分のトレンチはその存在を推定する成果は得られなかった。

六月二三日

埋戻しを行い調査を終了する。

三 調査の成果

(一) 遺構 (第52図)

調査区内で確認されたのは幅約一四センチ、深さ二五～三〇センチ(ローム層検出面からの最深度部分)の堀状の遺構で、調査区北東から中央付近にかけて検出されたが、中央付近以西では浅くなり途切れている。また、南側の立ち上り上端のラインは内側に膨らむ部分もあった。調査区内はロームが削平されており、調査区東壁の農道際のトレンチの土層から、調査区内のローム検出面よりさらに二〇センチ程上方までローム(漸移層)があり、その場合、堀の深さは少なくとも五〇センチはあったことになろう。

この堀状の遺構は、覆土に埴輪片を含み、その走向方向を検討すると、半

壊の状態にあり、正確な主軸線の想定は困難だが、その方向性の一致から、將軍山の堀端と判断してよいだろう。その場合、今回調査された堀は外堀の西方部分であり、二重の堀端であることになる。

(二) 遺物 (第53図)

今回の調査では、外堀覆土から埴輪片の出土があった。種類は円筒埴輪片しか確認できず、磨滅した小破片が多かった。もち論、原位置を留めるものもなかった。

口縁部は外反させて端面を作り出しヨコナデで仕上げる。体部は外面がタテハケメ、内面がハケメ及びナデで仕上げる。タガは粗雑な作りで、ごく扁平なM字形のものが多い。スカシ部分の破片が何点かあったが、いずれも円形と思われるものである。底部は底面に禾本科植物の茎の圧痕が残り、押圧調整は認められない。

円筒埴輪の全体の器形については、以上の破片から推定するはかばかはないが、比較的大形の、口縁部に近い破片の4は、タガの上方の部位で、直径三四～三五センチと復原され、口縁部が遺存していれば、その直径は三七～三八センチ前後となろう。埼玉古墳群の二子山古墳以下、大形前方後円墳の円筒埴輪は、いずれも口縁部径が三五センチ以上、六一～八段タガの大形品が主体となっており、今回出土の円筒埴輪もそうした大形の円筒埴輪の系譜をひく大形品の一部と判断してよさそうである。ちなみに、行田市教育委員会の前回の調査でも大形の朝顔形埴輪の一部が出土している。

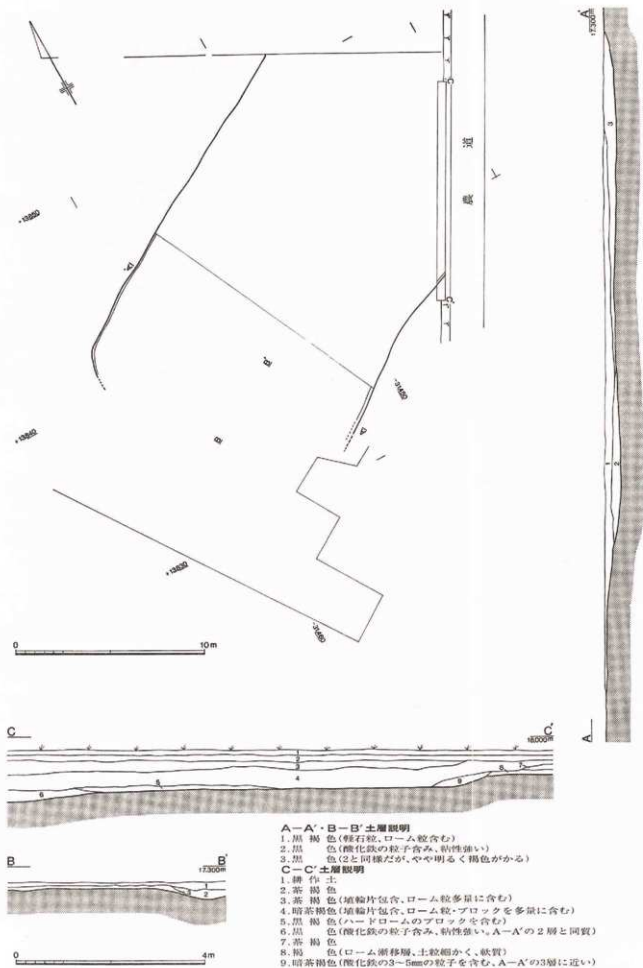
四ま と め

今回、調査された堀状の遺構は、將軍山古墳の外堀の一部と判断されるものであった。いままで、同古墳の周堀は地籍図の地割から楕形の一重堀として推察されてきたが、二重の周堀であることが明らかになった。

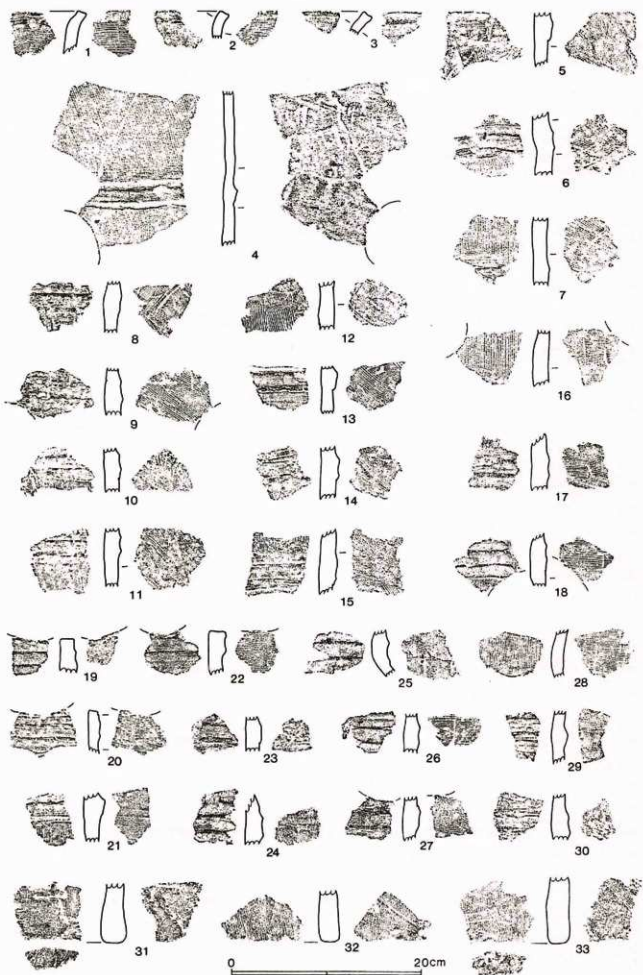
しかし、將軍山古墳周堀の全体を想定するのは、なお不十分であり、稲荷山古墳や二子山古墳にみられる中堤造り出しの存在の有無を含め、平面形が方形が楕形となるのかの確認調査が今後必要である。

また、出土した埴輪片の成形、調整は、埼玉古墳群内の大形古墳では、鉄砲山古墳の円筒埴輪と大差がなく、川西編年^(註)のV期の新しい段階（六世紀後半末葉段階）の所産であり、遅くとも六世紀末には構築されていたと思われる。

(註) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64—2 日本考古学会 昭和五三年九月



第52図 将軍山古墳 昭和59年度調査区平面図及び土層断面図



第53圖 將軍山古墳出土遺物

將軍山古墳出土遺物観察表

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土焼成、色調等の特徴	ハケ目 (cm/10本)	備考
1, 2	円筒口縁	端部は小さく屈曲して開き、ヨコナデによりわずかに凹む端部が形成される。外面タテ、内面ヨコハケメ。	1: LH(4)明赤褐(2.5YR5/8) 2: LH(4)赤褐(2.5YR4/8)	1.5 1.8	
3	"	朝顔形と思われる小破片。ヨコナデでわずかに凹む端部を形成。	m. H(2)赤褐(2.5YR 4/6)		
4	円筒体内	タグの上方での直径が約38cm前後に復原できる大形円筒の一部。やや厚手で、口縁に近い部位と考えられる。外面ナナメハケメ、内面はナデで、部分的にナナメハケメを加える。タグ部分の内面にユビオサエ痕残る。タグは偏平な三角形で、左下に円形のスカシが認められる。外表面に小さなヒビ割れが目立つ。	微細砂を含み、砂っぽくザラザラした感じでやや軟質。内外断面とも灰白色(7.5Y 8/2)	1.5	
5	"	外面タテハケメ、内面ナナメのナデ及びハケメ。タグは偏平にふぶれており、内外やや磨減する。	f. H(2) 赤褐(2.5YR 4/8)	1.4	
6	"	上下方向にやや湾曲があり、朝顔形の可能性がある。タグはごく偏平で稜の部分が鈍く突出する程度だが、粘土紐を用いているものと思われる。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	m(3)H(4) 赤褐(2.5YR 4/8)	1.5	
7	"	タグ部分の破片。外面タテハケメ、内面はナナメハケメ。	m. H(4)明赤褐(2.5YR5/6)	1.6	
8	"	タグはごく偏平である。内面はナナメハケメ。内外やや磨減。	m. H(4)赤褐(2.5YR 4/6)		
9	"	タグは幅広く、ごく偏平。左下に円形と思われるスカシあり。	m. H(4)赤褐(2.5YR 4/8)		
10	"	タグ下方で直径約20cm程度、形象の台の可能性がある。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、タグは偏平なM字形。	f(1)H(2) 橙(5YR 6/8)	1.4	
11	"	外面タテハケメ、内面ナナメナデ及びハケメ。タグはごく偏平。	f. H(3)明赤褐(2.5YR5/8)	1.3	
12	"	右上方がタグ部分。外面タテ、内面ナナメハケメ。	f. H(4)赤褐(2.5YR 4/6)	1.6	
13	"	内面ナナメハケメ。タグは偏平なM字で下方のナデが粗雑。	m(4)H(4)赤褐(2.5YR4/8)	1.1	
14	"	厚手で、タグは幅広く偏平なM字。内面はナナメハケメ。	m(4)H(4) (#)	1.5	
15	"	外面やや剥落する。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	m(2)H(3) # (2.5YR4/6)	1.7	
16	"	左上部にスカシが認められる。下方はタグに近い。	m(2)H(3)明赤褐(2.5YR5/6)	1.5	
17	"	内外磨減。タグはごく偏平。内面ナナメハケメ。	m(3)H(2)橙(5YR 6/3)		
18	"	右下にタグ部分を切込でスカシがある。タグはごく偏平。	f(2)H(4)明赤褐(2.5YR5/6)	1.5	
19	"	スカシ部分の小破片。内面オサエ痕とナナメハケメ。	f(3)橙(5YR 6/8)	1.2	
20	"	。内面ヨコ、ナナメハケメ。	m(4) # (#)		
21	"	やや厚手で砂っぽい。タグは偏平でくずれた台形。	m(4)H(2)に赤黄橙(10YR7/4)	1.7	29と同一個体か。
22	"	スカシ部分の小破片。タグの上方の稜にスカシが及んでいる。	m(2)H(2)明赤褐(2.5YR5/6)		
23	"	タグ部分の小破片。タグはごく偏平なM字形。	s(2)H(2)明赤褐(5YR 6/8)		
24	"	。タグ上方は強いヨコナデ。	m(3)H(3)赤褐(2.5YR4/6)		
25	"	朝顔形の口縁部との接合部分。内面オサエ痕とヨコハケメ。	f(2)H(2)橙(5YR 6/8)		
26	"	タグ部分の小破片。タグは幅広く偏平なM字形。	f(3)H(3)赤褐(2.5YR 4/8)	1.3	
27	"	。タグは偏平なM字形。内面ナナメハケメ。	m(1)H(4)明赤褐(2.5YR5/8)	1.7	
28	"	上下方向外湾気味で、口縁部に近い部分か。下部はタグに近い。	m(4)H(3) # (2.5YR5/6)	1.5	
29	"	タグは偏平でくずれた台形。内面は平滑にナデる。	m(4)H(2)に赤黄橙(10YR7/4)		21と同一個体か。
30	"	タグ部分の小破片。タグは偏平なM字形。内面ナナメハケメ。	m(2)H(4)明赤褐(2.5YR5/6)	1.5	
31	円筒底部	やや厚手で、底径は約30cm前後と推定される。外面タテハケメ内面はナナメナデ。底面に禾本科植物の圧痕がわずかに残る。	m(4)H(2)赤褐(2.5YR4/8)	1.8	内外磨減。
32	"	底径約40cm前後と大形円筒の底部。胎土は砂っぽく、4、21などと同様。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	m(4)H(2) 浅黄橙(10YR 8/3)	1.6	
33	"	底径約30cm前後。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	m(3)H(2)明赤褐(2.5YR5/6)	1.6	

図

版



丸墓山古墳近景



丸墓山古墳
第18トレンチ近影



同 上
第16トレンチ等近影

丸墓山古墳
第1、2トレンチ



同 上
第1トレンチ遺物出土状況





丸墓山古墳
第1トレンチ土層断面
(周堀立上り部分)



同 上
(平坦部部分)



同 上
(墳裾部分)



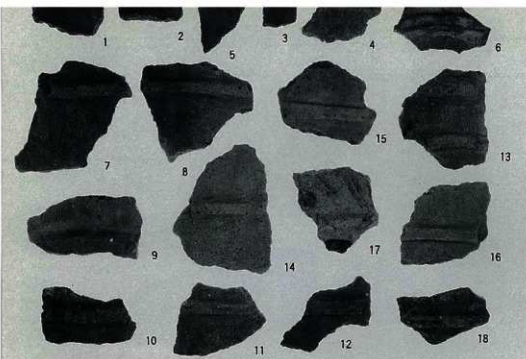
丸基山
第3～5トレンチ



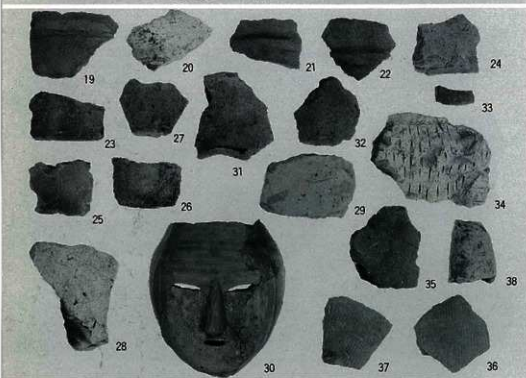
同 上
第3トレンチ土層断面



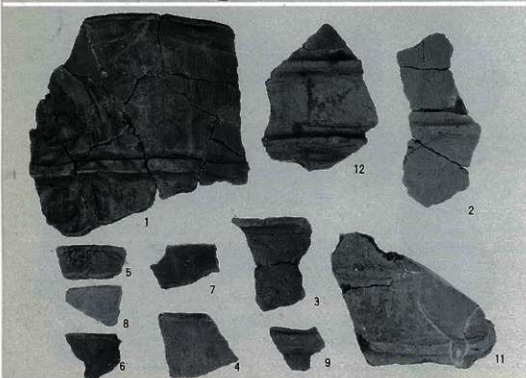
同 上
第4トレンチ遺物出土状況



丸墓山古墳
第18トレンチ出土遺物
(埴輪)



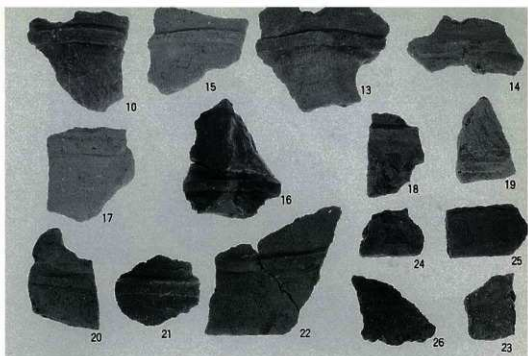
同 上
第18、13トレンチ出土遺物
(埴輪、土師器)



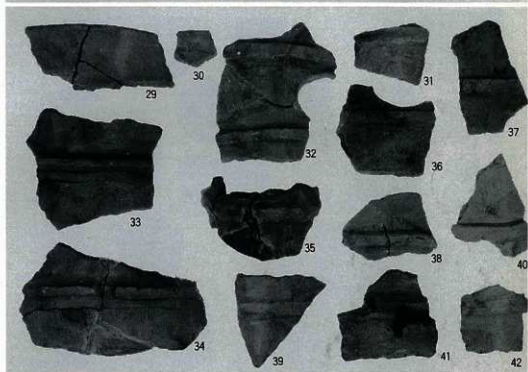
同 上
第1トレンチ出土遺物
(円筒埴輪)

図版 6

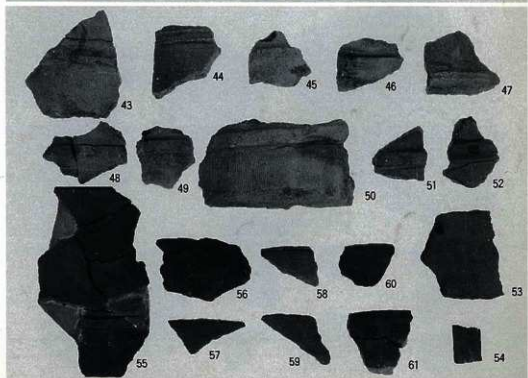
丸墓山古墳
第1トレンチ出土遺物
(円筒埴輪)

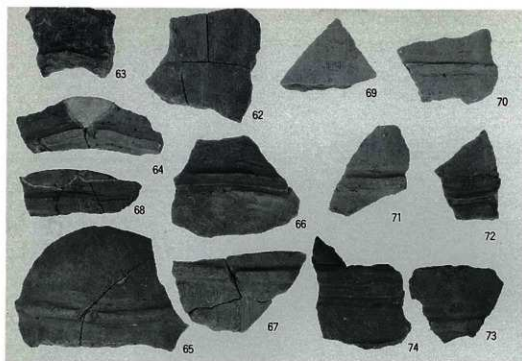


同 上
第2トレンチ出土遺物
(円筒埴輪)

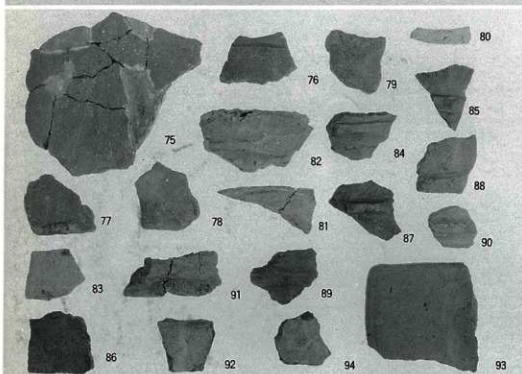


同 上
第2～4トレンチ出土遺物
(円筒埴輪)





丸墓山古墳
第4トレンチ出土遺物
(円筒埴輪)



同 上
第4、5トレンチ出土遺物
(円筒、形象埴輪)



同 上 第1トレンチ出土遺物 (形象埴輪)



同 左

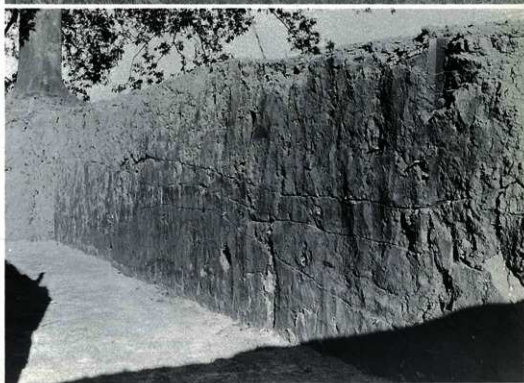
丸墓山南方円墳群遠景
(昭和49年当時、右手は丸墓山古墳)



天王山古墳(埴玉1号墳)近景



同 上
土層断面



梅塚古墳（埼玉2号墳）
遠景
（丸墓山古墳上から。後方
は將軍山古墳）

同 上 周堀

同 上 周堀

梅塚古墳
東南側ブリッジ



同 上
円筒埴輪出土状況



同 上
人物埴輪出土状況





梅塚古墳
土師器出土状況



同上
土師器、須恵器
出土状況



同上

埼玉4号墳周堀



同上

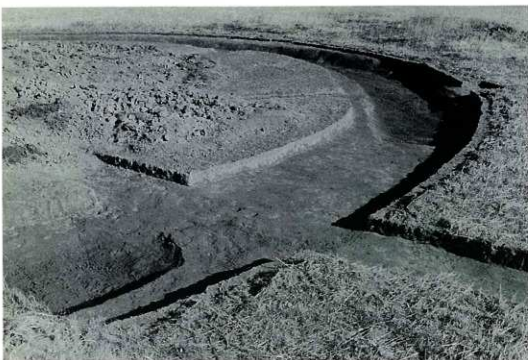


同上
周堀土層断面



同上
遺物出土状況

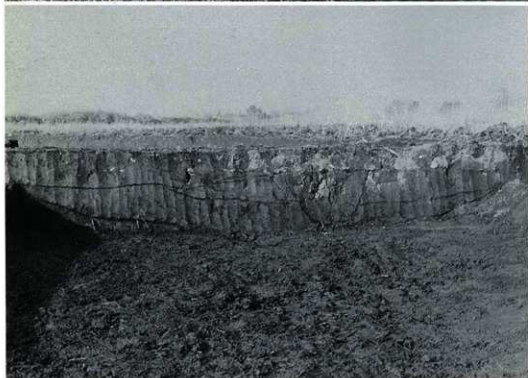




埼玉5号墳周堀

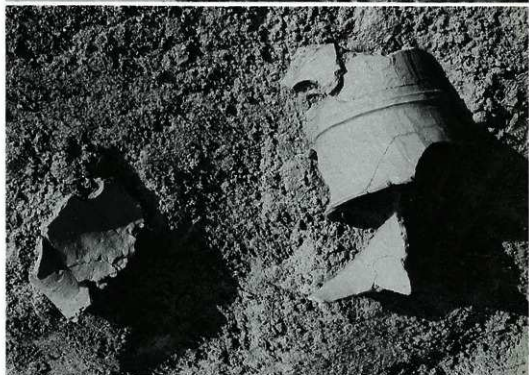


同 上

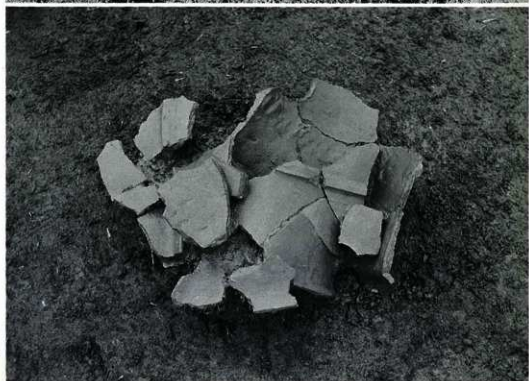


同 上 土層断面

埼玉5号墳
遺物出土状況



同上



同上

埼玉6号墳周堀

同上

同上 遺物出土状況

同 右



埼玉7号墳周堀



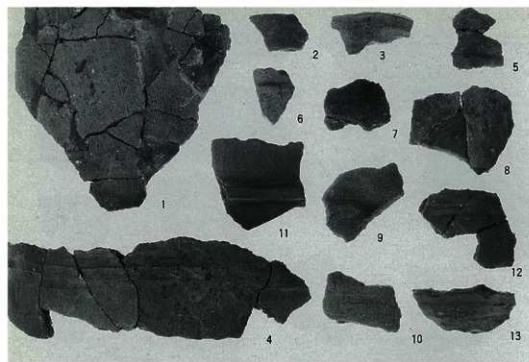
同上



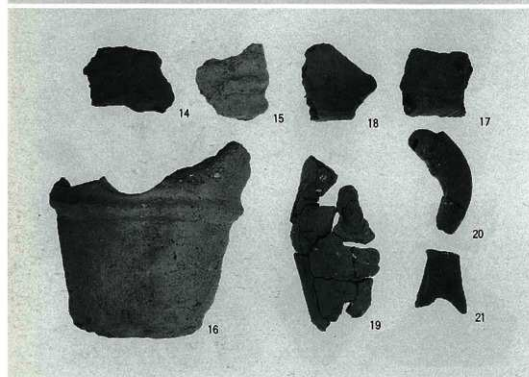
同右



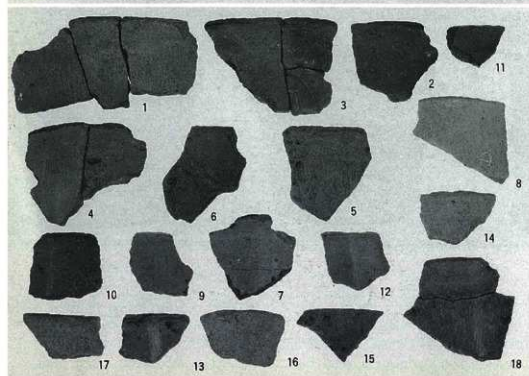
同上 遺物出土状況



天王山古墳出土遺物
(円筒埴輪)



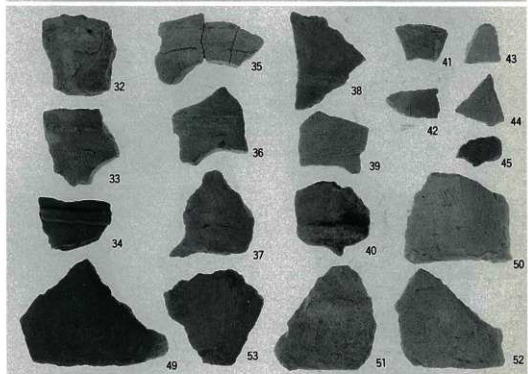
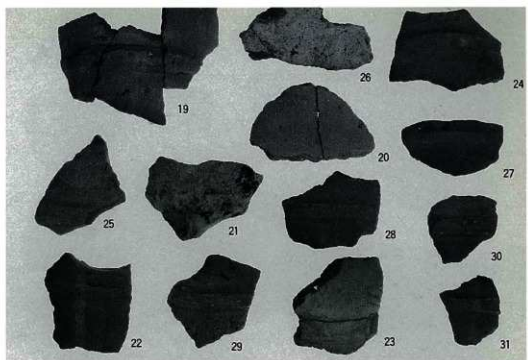
同上
(円筒、形象埴輪ほか)



柳塚古墳出土遺物
(円筒埴輪)

図版18

梅塚古墳出土遺物
(円筒埴輪)

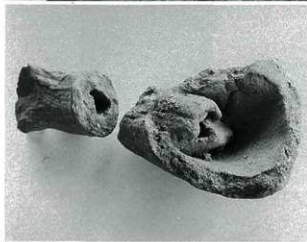




54



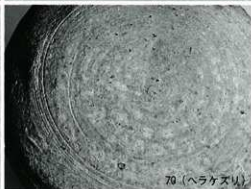
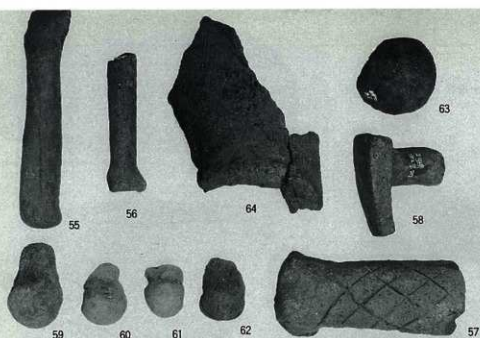
梅塚古墳出土遺物（男子人物壺輪）



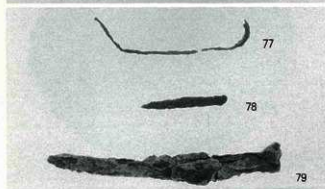
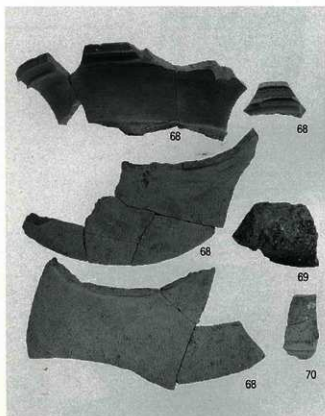
梅塚古墳出土遺物（男子人物埴輪）

図版21

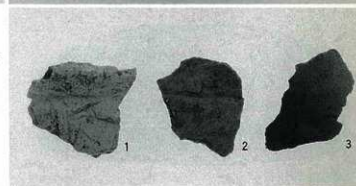
梅塚古墳出土土遺物
(形象埴輪、土師器、須恵器)



梅塚古墳出土遺物（須恵器、鉄製品）

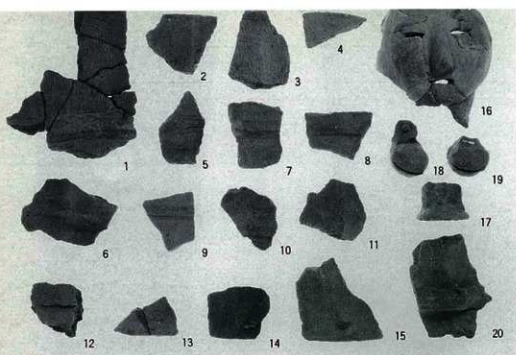


埼玉3号墳出土遺物
（埴輪、土師器）



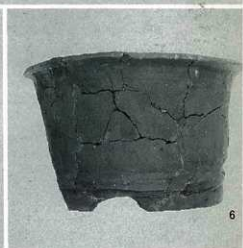
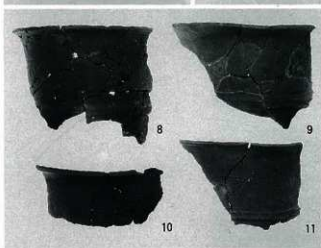
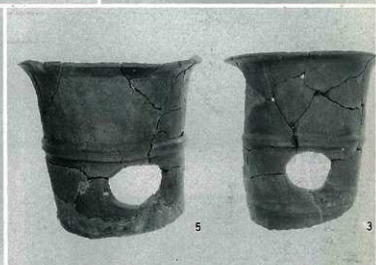
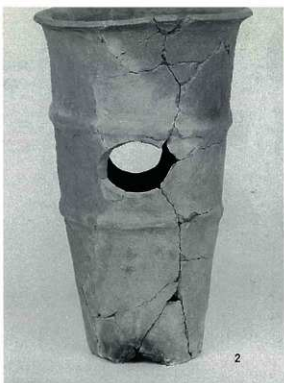
図版23

埼玉4号墳出土遺物
(埴輪、土師器)

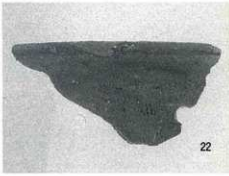
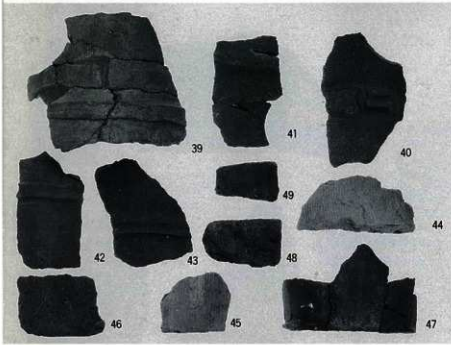
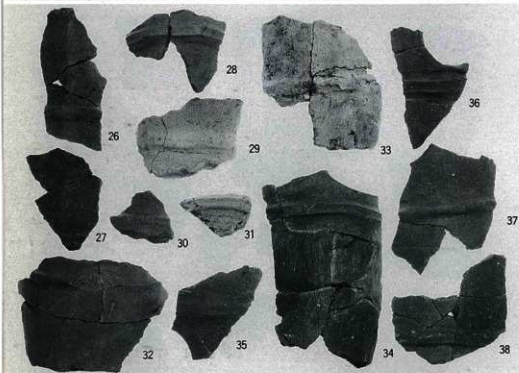
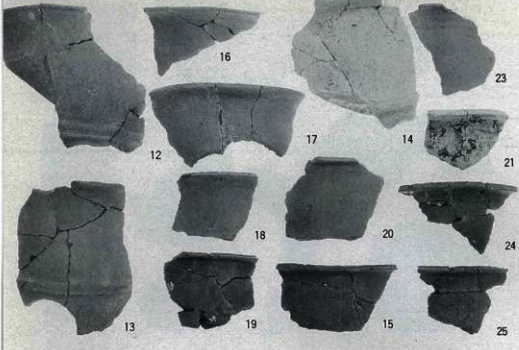


図版24

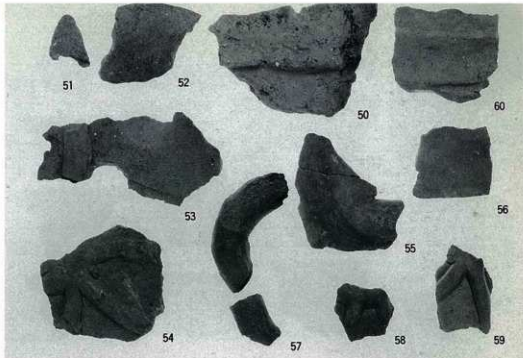
埼玉5号墳出土遺物
(円筒埴輪、土師器)



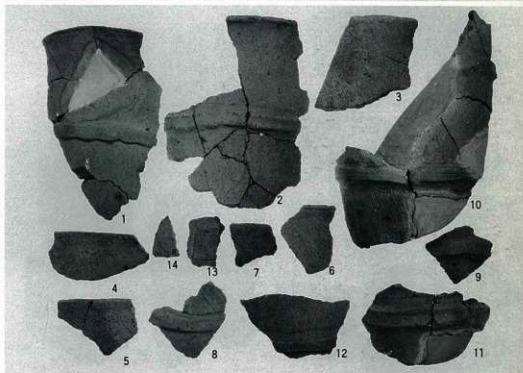
埼玉5号墳出土遺物
(円筒埴輪)



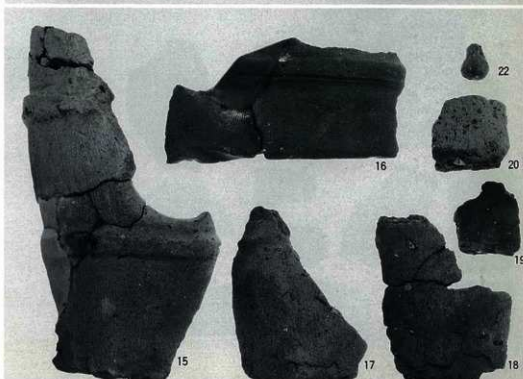
埼玉5号墳出土遺物
(形象埴輪)



埼玉6号墳出土遺物
(円筒埴輪)



同上
(円筒、形象埴輪)



埼玉6号墳出土遺物
(形象埴輪、土師器)



21



21a (アカシ部分)



21b (アカシ部分)



23



24



25



3



埼玉7号墳出土遺物
(埴輪、土師器)

1

2

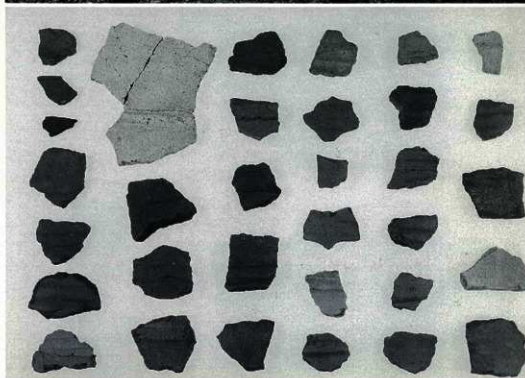
將軍山古墳
昭和59年度調査区近景
(右後方は將軍山古墳)



將軍山古墳
外堀



同上
出土遺物 (円筒埴輪)



埼玉古墳群発掘調査報告書 第六集

丸墓山古墳
埼玉17号墳
將軍山古墳

昭和六三年三月二〇日 印刷
昭和六三年三月二五日 発行

編集 埼玉県立さきたま資料館
発行 埼玉県教育委員会
印刷 アサヒ印刷株式会社